

Citrix Receiver for Linux 13.9.x

Mar 23, 2018

Citrix Receiver for Linuxを使用すると、さまざまな種類のLinuxデバイスからデスクトップ、アプリケーション、およびデータにすばやく安全にアクセスできます。

Citrix製品によるITインフラストラクチャ環境でCitrix Receiver for Linuxを使用すると、作業を行うユーザーの機動性、便宜性、および柔軟性が向上します。

その他のドキュメント

Citrix Receiver for Linuxの過去のリリースについて詳しくは、次のセクションを参照してください。

[Citrix Receiver for Linux 13.8](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.7](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.6](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.5](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.4](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.3](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.2](#)

[Citrix Receiver for Linux 13.1](#)

[Citrix Receiver for Linux 13](#)

新機能

Mar 23, 2018

13.9.1の新機能

Citrix Receiver for Linuxに、GStreamer 1.0ファイルが含まれるようになりました。これらのファイルは、Citrix Receiver for Linux 13.9パッケージには含まれません。

13.9の新機能

Webブラウザコンテンツのリダイレクト

Webブラウザのコンテンツをクライアントデバイスにリダイレクトし、Citrix Receiverに埋め込まれた対応するWebブラウザを作成します。この機能は、ネットワーク使用量、ページ処理、およびグラフィックレンダリングをエンドポイントにオフロードします。そうすることで、要求の多いWebページ、特にHTML5またはFlashビデオのコンテンツを組み込んだページを閲覧する時のユーザーエクスペリエンスが向上します。ブラウザコンテンツリダイレクトは、x86、x64、ARM hard float (armhf) プラットフォームでサポートされています。

詳しくは、XenAppおよびXenDesktopドキュメントの「[Webブラウザコンテンツのリダイレクト](#)」および「[Webブラウザコンテンツのリダイレクトのポリシー設定](#)」を参照してください。

ログ機能の向上

標準のCitrix Receiver for Linuxのリテールビルドは、ログを生成してsyslogで送信できるようになりました。この機能により、メッセージのレベルと出力元に基づいてメッセージの処理を制御できます。リテールログ機能のサポートは、接続シーケンス (WD、PD、TD、プロキシ) および印刷コンポーネントで導入されています。この機能はユーザーのトラブルシューティングに役立つだけでなく、問題が複雑な場合は、解決のヒントとなる詳細なログをサポートチームに提供できます。ログの出力は現在のデバッグモードと同様です。

ログパラメーター、ログレベル、ログファイル、ログ方法 (シーケンス、マルチシーケンシャル、サイクル)、記録されるメッセージは、構成ファイルを使用して構成できます。リテールログ機能を有効にする方法については、「[リテールログ機能の有効化](#)」を参照してください。

Citrix Ready Workspace Hubのサポート

Citrix Ready Workspace Hubは、承認されたアプリケーションやデータへのセキュリティで保護された接続を提供します。このリリースでは、Workspace Hubプラグインの実装が拡張され、[Citrix HDX RealTime Optimization Pack](#)とWorkspace Hubに接続されたデュアルモニターをサポートしています。

解決された問題

Mar 07, 2018

Receiver for Linux 13.9

バージョン13.8以降では、次の問題が解決されています。

サーバー/サイトの管理

- 「storebrowse -killdaemon」コマンドを使用すると、キャッシュに格納されている資格情報を使用してセッションに直接ログオンするため、無効なユーザーであるというメッセージが表示されることがあります。本来は、現在のユーザーに対してユーザー名とパスワードの入力指示が表示される必要があります。この問題は、ユーザーの最後のログオン以降、StoreFrontサーバーでキャッシュされた資格情報を「storebrowse -killdaemon」コマンドがクリアしない場合に発生します。[#LC8707]

セッション/接続

- Citrix Receiver for Linuxを使用している場合、VDA for Server OSで入力デバイスを使用して音声を記録しようとするとう失敗することがあります。[#LC8072]
- TLS 1.0およびTLS 1.2を使用すると、公開アプリケーションまたはデスクトップへの接続が失敗することがあります。[#LC8122]
- Xubuntuオペレーティングシステム上で実行されている公開アプリケーションを最大化しようとするとう失敗することがあります。この問題は、タスクバーを複数のモニターにわたって表示する場合に発生します。[#LC8436]

Receiver for Linux 13.8

バージョン13.7では、次の問題が解決されています。

印刷

- ドキュメントを印刷する場合、Citrix Receiver for Linuxは、選択したプリンターに関係なく通常使うプリンターに印刷ジョブをリダイレクトします。

[#LC8221]

サーバー/サイトの管理

- 「storebrowse -killdaemon」コマンドを使用すると、キャッシュに格納されている資格情報を使用してセッションに直接ログオンするため、無効なユーザーであるというメッセージが表示されることがあります。本来は、現在のユーザーに対してユーザー名とパスワードの入力指示が表示される必要があります。この問題は、ユーザーの最後のログオン以降、StoreFrontサーバーでキャッシュされた資格情報を「storebrowse -killdaemon」コマンドがクリアしない場合に発生します。

[#LC8707]

セッション/接続

- Citrix Receiver for LinuxをCisco VXMEプラグインとともに使用する場合、セッションの開始時にMicrosoft Windows Serverが切断されることがあります。

[#LC8496]

スマートカード

- ダブルホップ環境でCitrix Receiver for Linuxを使用している時にスマートカードにアクセスしようとするとう失敗することがあります。次のエラーメッセージが表示されます：

「このスマートカードには有効な証明書がありません。」

[#LC7424]

Receiver for Linux 13.7

このリリースでは、以前に報告された問題は解決されていません。

Receiver for Linux 13.6

バージョン13.5では、次の問題が解決されています。

印刷

- Citrix Receiver for Linuxが最初の印刷ジョブを完了しても、同じセッションでさらに印刷しようとするとう失敗することがあります。

[#LC7913]

セッション/接続

- 「Proxy Auto Configuration」が有効な場合、アプリケーションを起動しようとするとう、wficaでsegfaultエラーが発生することがあります。

[#LC8179]

キーボード

- Citrix Receiver for Linux 13.5へのアップグレード後、クライアントセッションでキーボード入力が機能しないことがあります。

[#LC7591]

セッション/接続

- Citrix Receiver for Linuxの使用中に、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

「X Request 139.27が原因のエラー："8: BadMatch (invalid parameter attributes)".」

[#LC6682]

- Citrix Receiver for Linuxの使用中に、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

「X Request 24.0が原因のエラー："5: BadAtom (invalid Atom parameter)"。」

[#LC6733]

Receiver for Linux 13.5

バージョン13.4以降では、次の問題が解決されています。

HDX MediaStream Flashリダイレクト

- HDX MediaStream Flashリダイレクトが有効になっている時にMicrosoft Internet Explorerのウィンドウのサイズを変更すると、FlashコンテンツがあるWebサイトが変更されたウィンドウに応じた適切なサイズにならないことがあります。

[#LC6126]

セッション/接続

- HPシンクライアントのデスクトップセッションでメディアクリップを再生すると、Windows Media Playerが次のメッセージを表示することがあります。

「ファイルの再生中にWindows Media Playerに問題が発生しました。」

場合によっては、空白または黒い画面が表示されることがあります。

[#LC5508]

- Citrix Receiver for Linuxから起動すると、公開アプリケーションのドロップダウンメニューが表示後すぐに非表示になることがあります。

[#LC5574]

- セッションを開始してから接続の進行状況バーをキャンセルすると、wficaプロセスが同じプロセスグループ内のすべてのプロセスにSIGTERMを送信することがあります。プロセスグループの共有中に、予期せずプロセスが終了する可能性があります。

[#LC5858]

- マルチモニター環境でシームレスアプリケーションが別のモニターで実行されている時、Gnome 3のワークスペース間で切り替えると、シームレスアプリケーションが正しくレンダリングされないことがあります。この問題はGnome 3で「workspaces-only-on-primary」が有効になっている時に発生します。

[#LC5897]

- [デスクトップビューアー] ツールバーのキーボードショートカット「Ctrl+Alt+Del」がLinux VDAセッションで機能しないことがあります。

[#LC6164]

- アプリケーションの関連デスクトップアイコンをクリックしてアプリケーションを起動しようとする時、起動しないことがあります。

[#LC6285]

- Linux VDAでH.264エンコーディングのサポートを有効にしてセッションを開始しようとする、wficaでsegfaultエラーが発生することがあります。

[#LC6603]

システムの例外

- 特定のXenAppまたはXenDesktopサイトに接続しようとする、AuthManagerDaemonによって予期せず終了することがあります。

[#LC6166]

ユーザーエクスペリエンス

- 複数の子ウィンドウがあるシームレスアプリケーションを起動すると、特定の子ウィンドウを移動できないことがあります。また、フォーカスをこれらのウィンドウに変更できないことがあります。

[#LC4342]

- セルフサービス資格情報ダイアログボックスを開いたままでローカルデスクトップからログオフすると、セルフサービスのログオンが失敗し、セルフサービスが認証ダイアログボックスに進めないことがあります。

[#LC4939]

- シームレスモードでMicrosoft Excelを起動すると、キーボードのフォーカスがアプリケーションの [検索] ウィンドウに移動しないことがあります。

[#LC5964]

ユーザーインターフェイス

- Citrix Receiver for Linuxを使用すると、システムトレイに「Sametime」アイコンが表示されないことがあります。

[#LC3956]

- Microsoft Lyncチャットウィンドウを新しい位置に移動すると、ウィンドウが完全な形で再描画されないことがあります。

[#LC5583]

- シームレスモードでMicrosoft Excelの [検索] ウィンドウを移動しようとする、失敗することがあります。

[#LC5963]

- 子ウィンドウ (例: Spy++のメインウィンドウは親ウィンドウで、指定されたウィンドウを検出するためのウィンドウは子ウィンドウ) を最小化すると、最小化されたタイトルバーのサイズが小さく表示されることがあります。

[#LC6210]

Receiver for Linux 13.4

バージョン13.3では、次の問題が解決されています。

クライアントデバイスの問題

- クライアントドライブマッピングを有効にすると、マップされたドライブへのアクセスに通常より時間がかかることがあります。

[#LC3930]

強化された機能

- このリリースでは、相対マウスのサポートが導入されました。相対マウスのサポートは、マウスの絶対位置ではなく相対位置を読み取るオプションを提供する機能です。この機能は、マウスの絶対位置ではなく相対位置の入力を必要とするアプリケーションに必要です。

注：この機能は、XenAppまたはXenDesktop 7.8で実行されているセッションでのみ使用できます。デフォルトでは、無効になっています。

- この機能を有効にするには、以下の手順に従います。*

ファイル\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniの[WFClient]セクションにエントリRelativeMouse=1を追加します。これによって、機能が有効になります。有効にするまでは、無効になっています。

- この機能を有効にするには、以下の手順に従います。

種類 - Ctrl/F12

機能が有効になった後、再度「Ctrl/F12」と入力し、クライアントでサーバーポインターの位置を同期します（サーバーおよびクライアントのポインター位置は、相対マウスを使用する場合には同期しません）。

- この機能を無効にするには、以下の手順に従います。

「Ctrl-Shift/F12」と入力します。この機能は、セッションウィンドウからフォーカスが失われた場合もオフになります。

*別の方法として、相対マウスで次の値も使用できます。

RelativeMouse=2。機能を有効にし、セッションウィンドウがフォーカスを取り戻すとアクティブになります。

RelativeMouse=3。機能を有効にし、アクティブにし、常時アクティブ状態に維持します。

キーボードコマンドを変更するには、以下のような設定を追加します。

RelativemouseOnChar=F11

RelativeMouseOnShift=Shift

RelativemouseOffChar=F11

RelativeMouseOffShift=Shift

RelativemouseOnCharおよびRelativemouseOffCharでサポートされる値は、Citrix Receiverインストーラーのconfig/module.iniファイルの [Hotkey Keys] に一覧があります。RelativeMouseOnShiftおよびRelativeMouseOffShiftの

値は、使用される識別子キーを設定し、 [Hotkey Shift States] 見出しの下に一覧があります。

[#LC5000]

ログオン/認証

- Citrix Receiver for Linuxのバージョン13.3は、-clearpasswordオプションなどの特定のコマンドラインパラメーターを古いバージョンのXenAppに渡すことができません。結果として、ログオンの試行に失敗することがあります。

[#LC4594]

セッション/接続

- 「-span」 コマンドラインオプションを使用して全画面モードでユーザーセッションを開始しようとする、失敗することがあります。

[#LC3394]

- 2番目のモニターをデュアルモニター構成でサイズ変更した後、Windowsタスクバーを元の場所に戻せないことがあります。

[#LC3856]

- Wficaのsegfaultエラーによって、強調表示やスクロールなどによる画面の更新中、セッションが切断されたり、応答しなくなる場合があります。

[#LC3947]

- Ubuntu 14.04の切断されたマルチモニターセッションに再接続中、セッションウィンドウがすべてのモニターではなく1つのモニターのみで表示されます。

[#LC4181]

- 匿名ストアに接続しようとする、失敗し、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

「NoWebUIAuth 0」 および 「Cannot complete your request」

[#LC4270]

- SSL RelayのようなSSLプロキシホストを使用中、公開デスクトップを起動しようとして失敗することがあります。

[#LC4739]

- Internet Explorerの元のウィンドウでポップアップ画面を表示すると、公開されたインスタンスのフォーカスが失われ、複製されることがあります。

[#LC5066]

スマートカード

- pnbrowseでスマートカードを使用すると、PINをVDAに渡せず、認証に失敗することがあります。セッションは開始されますが、ログオン画面も表示されます。

[#LC4241]

システムの例外

- ARM HFベースのLinuxクライアント上のWindows Media Playerでメディアを再生した後、セッションが切断されます。

[#LC4625]

ユーザーエクスペリエンス

- XenAppおよびXenDesktop 7.6で実行されているセッションで、マイクの音質が十分ではないことがあります。

[#LC3124]

- ARM HF展開で、新しいLync 2010メッセージを通知するタスクバーが光らないことがあります。

[#LC3688]

- デュアルモニターセットアップでユーザーセッションのロックを解除した後、最小化された画面が正しい位置に復元されず、応答しないことがあります。

[#LC3984]

- Gnome 3デスクトップでアプリケーションを起動して最大化すると、マウスカーソルの位置がGnome 3トップバーの距離に応じてオフセットされることがあります。

[#LC4738]

- Webカメラのリダイレクトが、バージョン7.6のVDAで実行されているセッションで機能しないことがあります。

[#LC4751]

ユーザーインターフェイス

- サーバー間やサーバーとユーザーデバイス間で、コピーして貼り付ける機能が失敗することがあります。

[#LC4157]

- 全画面モードでビデオを再生すると、マウスカーソルが表示されなくなり、全画面モードを停止するまで表示されなくなります。

[#LC4428]

- サードパーティの特定の公開アプリケーションがダイアログボックスを起動すると、セグメンテーション違反エラーが発生することがあります。予期せず終了したアプリケーションに再接続しようとする、カーソルが表示されなくなります。

[#LC4955]

Receiver for Linux 13.3

バージョン13.2では、次の問題が解決されています。

セッション/接続

- 最大化されたシームレスウィンドウをリストアした後、デスクトップの特定の部分の自動更新に失敗します。この問題は、Ubuntu 12.04 Unity 2Dなどの一部のデスクトップ環境でのみ発生します。

[#LC0602]

- "ProxyType=Secure"パラメーターを使用すると、セグメンテーションフォールトが発生することがあります。

[#LC3396]

- 公開アプリケーションからローカルアプリケーションにコンテンツをコピーして貼り付けようとする、ICAエンジンコンポーネント (wfica) 処理がセグメンテーションエラーにより予期せず閉じるようになります。

[#LC3480]

- 場合によって、キャッシュされたアプリケーション一覧が同期しなくなる可能性があります。

[#556245]

システムの例外

- スマートカード認証によりセッションが予期せず終了することがあります。

[#582550]

ユーザーエクスペリエンス

- この修正により、Receiver for Linuxで、ロシアのタイムゾーン情報を更新できます。

この修正を有効にするには：

- XenApp 6.5の場合、Hotfix Rollup Pack 5あるいはそれ以降のRollup Pack Hotfixをインストールして、すべてのタイムゾーンを正しくリダイレクトする必要があります。
- XenAppおよびXenDesktop 7.6サーバーオペレーティングシステムのVDAの場合、Hotfix ICATS760WX64014をインストールする必要があります。
- サーバーのオペレーティングシステムがWindows Server 2008 R2 Service Pack 1である場合は、Microsoft Hotfix KB2870165をサーバーにインストールする必要があります。
- サーバーとユーザーデバイスの両方のオペレーティングシステムを更新して、最新のタイムゾーン情報を適用させます。
- WindowsにMicrosoftの更新プログラムKB2998527をインストールし、Linuxのタイムゾーンデータを更新します。

[#LC1971]

ユーザーインターフェイス

- 公開アプリケーションのアイコンがタスクバーに正しく表示されないことがあります。

[#LC3405]

- ARMハードフロート (armhf) プラットフォームを使用している場合、シームレスセッションのアイコンがタスクバーに表示されないことがあります。

[#LC4051]

- Citrix Receiverをtar.gzパッケージでFedora 21にインストールした後でselfserviceを開始すると、不適切な依存関係のメッセージが表示されます。

[#582071]

Receiver for Linux 13.2

バージョン13.1では、次の問題が解決されています。

HDX Plug-n-Play

- HDX RealTime Optimization Pack (Linux) for Microsoft Lync 2010を使っている場合、Citrix GoToMeetingおよびCisco WebExでは、Webカメラが機能しないことがあります。この修正を全体的に有効にするには、Receiver for Linux Hotfixと修正プログラム#LA0339を含むHDX RealTime Optimization Pack (Linux) for Microsoft Lync 2010 Hotfixの両方をインストールする必要があります。

注：この修正をインストールした後、Citrix GoToMeetingまたはCisco WebExビデオ会議を実行中にMicrosoft LyncをVDAセッションで起動すると、Webcamが機能しなくなることがあります。この問題が発生した場合は、ビデオ会議内でWebカメラを停止してから再度起動させます。

[#LC0339]

ログオン/認証

- Uniconユーザーインターフェイスでユーザーがスマートカードを使ってログオンする時、そのスマートカードに2つ以上の証明書が含まれていて、そのうちの1つだけが認証証明書な場合、ユーザーはアプリケーションを列挙または開始できませんでした。スマートカードに認証用のクライアント証明書が1つだけ含まれている場合は、ユーザーがアプリケーションを列挙および開始できますが、次のエラーメッセージが必ず表示されます。"Cert Client Authentication OID info set, but unexpected value:..."

[#LC2098]

サーバー/ファームの管理

- Receiver for Linuxを使って仮想プライベートネットワーク (VPN) インターフェイスに接続すると、公開アプリケーションを起動した時にReceiverでエラーが発生しました。

[#LC1284]

- コマンド"ctx_rehash"を実行してルート証明書または中間証明書をユーザーデバイスにインストールすると、正しいハッシュまたはリンクを作成できず、"Error adding store:AM_ERROR_HTTP_SERVER_CERTIFICATE_NOT_TRUSTED[65150]"というエラーメッセージが表示されました。この問題が発生すると、Receiverは証明書を使用できず、ストアを追加できませんでした。

[#LC1513]

- この修正により、ユーザーがコマンド"`SICAROOT/util/storebrowse --addstore <ストアのURL>`"を実行した場合、あるいはSelf-Service Plug-inを使ってストアを追加した場合に、"discovery"パラメーターがURLには含まれていないと、"discovery"パラメーターが自動的にURLに付加されます。

[#LC1517]

セッション/接続

- シームレスモードで公開アプリケーションのMicrosoft Officeのウィンドウを最大化すると、ウィンドウは最大化されますがウィンドウ内の表示がオフセットされて左側および上部フレームが描画されないことがありました。

[#LC0118]

- マルチモニター環境において2つ目のモニターを回転したか、解像度が異なる場合に、シームレスモードで公開アプリケー

ションを起動してウィンドウを最大化すると、サーバーは最大化されたウィンドウを表示せず、ウィンドウを使用できませんでした。

このリリースの修正を適用するには、ファイル\$HOME/.ICAclient/wfclient.iniの[WFClient]セクションにエントリ"TWIAvoidFullScreenWhenMaximized=True"を追加します。

[#LC0354]

- マルチモニター環境において、シームレスモードの公開アプリケーションウィンドウの最大化と元のサイズに戻すのを何度か繰り返すと、まれに2つ目のウィンドウにアプリケーションウィンドウではなく灰色の背景が表示されることがありました。

[#LC0355]

- マルチモニター環境において、クライアント側でサイズ変更を実行すると、2つ目のモニターでシームレスモードの公開アプリケーションウィンドウサイズを変更できないことがありました。

[#LC0356]

- 全画面モードで、mstsc1とmstsc2など2つの公開リモートデスクトップ (RDP) セッション間で切り替えを実行すると、接続バーが正しく更新されずに、mstsc1に切り替えた後もプライマリウィンドウとしてmstsc2が表示されました。

[#LC0437]

- Citrix汎用USBまたはクライアントドライブのリダイレクトを介してデータを持続的に転送している場合、Receiver for Linuxを使ってセッションを開始しようとするするとセッションが切断することがありました。

[#LC0522]

- IPアドレスを使ってWeb Interfaceへログオンしようとするすると、segfaultが発生して、pnabrowseが予期せず終了することがありました。

[#LC0648]

- 公開アプリケーションとMicrosoft SQL Server 2012 Management Studio間を切り替える場合に、ユーザーがいったん両方のウィンドウを最大化してから公開アプリケーションの方だけを最小化すると、Microsoft SQL Server 2012 Management Studioウィンドウが正しく表示されず、ウィンドウの一部が更新されませんでした。

[#LC0739]

- ウィンドウのフォーカスが、ダイアログボックスへとは切り替わらず、メインウィンドウに残ったままとなることがありました。たとえば、公開アプリケーションのメモ帳で作業内容を変更して閉じようとする、変更した内容を保存するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。このメッセージを表示するダイアログボックスは、フォーカスがアクティブなウィンドウではありません。

[#LC0952]

- 公開アプリケーションからローカルのアプリケーションに画像をコピーすると、Receiver for Linuxが予期せず閉じることがありました。

[#LC1017]

- Citrix NetScaler Gatewayを介してReceiver for Linuxを使ってセッションを開始しようとするすると失敗しました。

[#LC1103]

- 既にローカルのアプリケーションによって使用されている、Webカメラを必要とするVDAセッションでユーザーがアプリケーションを開こうとすると、空白のエラーウィンドウが表示されることがありました。

[#LC1135]

- XenDesktop 5.6 VDAに接続した時にユーザーデバイスが2つのモニターに接続されている場合、2つ目のモニターで表示上の問題が発生することがありました。また、2つ目のモニターでウィンドウを最大化しても、そのウィンドウは画面内で完全には最大化されないことがありました。

[#LC1148]

- セッションを開始またはサイズ変更すると、フレームバッファプラグインが画面をクリアしないことがありました。

[#LC1515]

- ユーザーデバイスで自動プロキシサーバーURLが構成されると、Receiverでエラーが発生しました。ログには次のSyslogエラーが記録されます：

```
Ubuntu1204LTSi386 kernel: [xxxx.xxxxxx] wfica [xxxx] segfault at 2 ip bxxxxxxx sp bxxxxxxx error 4 in libproxy.so[bxxxxxxx+xxxx]
```

[#LC1584]

- セッション画面の保持が有効な時にCitrix汎用USBを介してデータが持続的に転送されると、既存のセッションが切断することがありました。

[#LC1588]

- 64ビット版のReceiver for Linuxがブラウザープラグインを登録できないことがありました。

[#LC1712]

- 参照番号#LC1127がインストールされたシステムで、XenDesktopによって公開されたデスクトップセッションから切断されると、Receiver for Linux 13.1.3が応答しなくなることがありました。

[#LC2365]

- ユーザーがReceiver for Linuxにログオンし、XenApp 5.0で公開されたホストされるデスクトップ内にコンテンツを貼り付けようとする場合、ユーザーが貼り付けオプションを右クリックしてその上にマウスポインターを置くと、セッションが切断してセグメンテーション障害が起こることがありました。

[#LC2467]

- Receiver for Webで接続すると、StoreFront Servicesプロビジョニングファイル (.cr) をダウンロードし、次にstorebrowseコマンド"/util/storebrowse -C /tmp/receiverconfig.cr"を実行した後は、"Add Service Record Add Store"ダイアログボックスが表示されず、ストアが作成されませんでした。

[#LC2669]

- Receiver for Linux 13.1を使用している場合、ユーザーがWindows通知領域のアイコンを右クリックするとReceiverセッションが応答なくなり、セッションを閉じて再度開くまではマウスとキーボード入力が機能しなくなることがありました。

[#LC2824]

ユーザーエクスペリエンス

- Receiver for Linuxでサイズの大きなドキュメントをスクロールすると、エラーメッセージが表示されることがありました。セッション内で作業を続けるには、ユーザーはエラーメッセージに応答する必要があります。

[#LC1127]

- Receiverセッションの実行中にユーザーデバイスのオリジナルの画面解像度を変更すると、セッションの全画面設定は維持されませんでした。そのため、セッションサイズが変更されて、現在およびオリジナルの画面解像度と一致しくなくなります。

[#LC1222]

- アイコン名にバックスラッシュ ("\") が入っている場合、Receiver for Linuxではアプリケーションアイコンが正しく表示されないことがありました。

[#LC1364]

- Javaアプリケーションから公開アプリケーションにコンテンツをコピーして貼り付けようとする失敗するか、または以前にクリップボードに保持されていたコンテンツが貼り付けられることがありました。この問題は、Receiver for Linuxがユーザーデバイスのクリップボードとサーバーのクリップボードの情報との同期に失敗した場合に発生します。

[#LC1856]

- H.264グラフィック用のハードウェアデコーダーを使用するHewlett-Packardの新デバイスでは、VDAセッション内およびセッションでアプリケーションを起動した後に、開いているドキュメントで文字列をコピーして貼り付けようとする失敗しました。また、あるアプリケーションウィンドウからVDAで実行している別のアプリケーションウィンドウに文字列をコピーしようとしても失敗しました。

[#LC2985]

ユーザーインターフェイス

- StoreFrontがアグリゲーショングループで構成されていて、アプリケーション名にバックスラッシュ ("\") が入っている場合、Receiver for Linuxでアプリケーションを起動しようとする失敗することがありました。次のエラーメッセージが表示されます：

「ICAファイルが破損しています」

[#LC1268]

Receiver for Linux 13.1

バージョン13.0では、次の問題が解決されています。

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクト

- Receiver for Linux 13.0では、YUYV出力を利用できる場合でもWebカメラにはMotion JPEG (MJPEG) 出力が使用されます。

[#LA5740]

HDX MediaStream Flashリダイレクト

- HDX MediaStream for Flashを有効にすると、Internet Explorerでの特定のFlash動画の再読み込みに失敗することがありました。

[#LA4345]

- YouTubeで動画を再生する時に、Internet Explorerで音声と動画が正常に再生されないことがありました。この問題は、ユーザーがReceiver for Linuxを使って接続し、HDX MediaStream Flashのリダイレクトを有効にした場合に発生しました。

[#LA5833]

- HDX Flashのリダイレクトが有効な場合、YouTubeの動画サイズコントロールを選択すると、Flashリダイレクトがサーバー側のレンダリングにフォールバックすることがありました。

[#LA5834]

キーボード

- Alt、Shift、またはCtrlキーと別のキーを組み合わせると、これらのキーがリモートセッションで押されたままの状態になりました。

[#LA5730]

- この修正により、次のNum Lockキー状態の解釈の問題が処理されます。

公開アプリケーションのウィンドウにあるマウスポインターをウィンドウ外に動かしてからウィンドウ内に戻し、Num Lockキーを押しながらテンキーの複数のキーを押すと、テンキーで最初に押したキーはセッションに表示されません。

[#LC0146]

セッション/接続

- クライアントクリップボードリダイレクトを有効にして、（たとえば、シームレスに公開されたWindows Explorerを使って）クライアントセッションでファイルのコピーと貼り付けを実行する失敗することがありました。

[#LA5254]

- タスクバーエントリのない公開アプリケーションウィンドウでは、同じ公開アプリケーションを別のセッションウィンドウで開いてない限り、入力を実行できませんでした。

[#LA5617]

- シームレスウィンドウを移動する場合、特定のシナリオではウィンドウが正しく再描画されないことがありました。

この問題を修正するには、~/!CAClient/wfclient.iniファイルまたはconfig/All_Regions.iniファイルのいずれかで、[WFClientセクションにエントリ"TWIRedrawAfterMove=TRUE"を追加します。

[#LA5669]

- この修正により、低待機時間環境でのファイル転送率が改善されました。

[#LA5725]

- Receiver for Linux 13.0では、YUYV出力を利用できる場合でもWebカメラにはMotion JPEG (MJPEG) 出力が使用されます。

[#LA5742]

- (ラウンドロビン構成では一般的な) 単一の検索に対して複数の応答を返すDNSクエリにより、セキュリティで保護された接続に失敗し、Receiverが予期せず終了することがありました。

[#LA5752]

- サーバー上で最大化したウィンドウを元のサイズに戻すと、ローカルのウィンドウサイズは元に戻りますが、ウィンドウに正しくないコンテンツが表示され、マウスのオフセットが生じました。

[#LA5926]

- シームレスモードで開始された公開アプリケーションウィンドウを移動すると、ウィンドウのコンテンツが正しく表示されません。この問題を解決するには、次のことを実行します。

- サーバーで、ポリシー「ドラッグ中にウィンドウの内容を表示する」ポリシーを [禁止] に設定します。
- ユーザーデバイスで、"\$HOME/wfclient.ini"ファイルの[WFClient]セクションにエントリ "TWICoordinateWinPosition=True"および"TWIRedrawAfterMove=True"を追加します。

[#LA5935]

- 表示品質設定がデフォルト (中) 以外に設定された視覚表示ポリシーが適用された7.5 VDA上のセッション表示は、起動時から応答しなくなることがあります。

[#LC0043]

- NetScaler Gatewayを介する公開アプリケーションまたはデスクトップへの接続に失敗し、次のエラーメッセージが表示されることがありました。

```
Cannot contact server for application <>.
Server browser command contains an invalid parameter.
The server name cannot be resolved.
```

この問題は、追加のSTA (Secure Ticket Authority) がNetScaler GatewayとStoreFrontの両方に対して構成される場合に発生します。

[#LC0059]

- Kerberosチケットを使ってWeb Interfaceへの認証を実行しようとする時、segfaultが発生して、pnabrowseが予期せず終了することがありました。

[#LC0065]

- Alt+Tabキーを押して開いているウィンドウ間をブラウズし、リモートデスクトップのログオンウィンドウに移動すると、ウィンドウを操作できなくなることがありました。

[#LC0069]

- アプリケーションウィンドウの境界内にカーソルがある場合、Alt+Tabキーを押すとウィンドウを前面に持ってくることはできないことがありました。

[#LC0070]

- Receiver for Linuxにより開始されたデスクトップ内でウィンドウをドラッグすると、シャドウが残ったままになりました。

[#LA0128]

- この修正により、接続の問題を示唆してユーザーに終了および再試行オプションを提供する、予期しない不当なエラーメッセージが表示されるのを防ぎます。

[#LC0129]

- セッション内で数分の間、UDPオーディオが予期せず再生されないことがありました。

[#LC0137]

- Receiver for Linuxのシリアルポートでデータを転送すると、XenDesktopセッションが応答しなくなることがありました。

[#LC0296]

- ユーザーがReceiver for LinuxおよびHP ThinPro 4.4オペレーティングシステムで実行中のシンクライアントHP t610で接続する時、次の場所でタイムゾーンがGMT +8に設定されるとエラーメッセージ「Your current time zone is not recognized」（現在のタイムゾーンは認識されません）が表示されることがありました。

- シンガポール
- ブルネイ
- マカッサル
- クアラルンプール
- クチン
- マニラ

[#LC0299]

- Microsoft WordとMicrosoft Terminal Services Client (MSTSC) ウィンドウ間を切り替えると、ウィンドウ内のコンテンツが正しく表示されませんでした。

[#LC0308]

- コマンドpnabrowse -WTはデスクトップセッションを終了できません。

この修正を有効にするには、\$HOME/wfclient.iniファイルの[WFClient]セクションに、エントリ"LogoffDesktopThroTWI=True"を追加します。

[#LC0345]

- Receiver for Linuxを使用中、一部のドロップダウンボックスを正しく操作できないことがありました。

[#LC0365]

シャドウ機能

- Linuxクライアントの解像度を変更し、Receiver for Linuxを使ってXenAppサーバーから公開アプリケーションを開始すると、管理コンソールからセッションをシャドウする間に表示内容を正しく更新できないことがありました。

[#LA5165]

システムの例外

- PersistentCacheSizeを有効にすると、Receiver for Linuxを実行できないことがありました。

[#LC0528]

その他

- 現在のTarballおよびRPMパッケージは、最近のFedora、Red Hat、およびCentOS AMD (x86_64) ディストリビューションのGStreamerと統合できませんでした。

[#LA4212]

- 特定のポリシー制約があるx.509 Public Key Infrastructure (PKI) がNetScaler Gatewayにインストールされている場合、Receiver for Linuxを使ってアプリケーションを起動するとSSLエラー85が発生することがありました。

アプリケーションを開始するには、All_Regions.iniファイルに以下のオプションを設定する必要があります。

[Network\SSL]

EnableCertificatePolicyVerification=1

[#LA5609]

- この機能拡張により、Receiver for LinuxはSHA-2証明書をサポートします。

[#LC0136]

Receiver for Linux 13.0

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクト

- HDX RealTimeを有効にすると、Webカメラのデータをリダイレクトする時にgst_readプロセスでメモリリークが発生することがありました。

[#LA1933]

キーボード

- Receiver for LinuxでWindows 7の仮想デスクトップに接続する場合、Windows 7のログオン画面に表示される「CapsLock キーオン」のメッセージと実際のクライアントデバイス側のキーボードの状態が正しく同期しないという問題がありました。

[#LA1784]

- ローカルのアプリケーションと公開アプリケーションを切り替えるとCtrlキーの後に最初に押すキーが正しく入力されないという問題がありました。

[#LA3397]

- **重要**：参照番号#LA1965に対する修正が適用されたシステムにこの修正をインストールすると、#LA1965の修正が無効になります。#LA1965の修正が必要な場合は、この修正をインストールしないでください。

Alt+Tabキーなどのホットキーがセッションに適用されず、クライアント側で処理されることがありました。

#LA1965の修正の内容は以下のとおりです。

Receiver for Linuxで非シームレスウィンドウモードのセッションを実行する場合、公開デスクトップや公開アプリケーションの起動時に画面が一瞬（1秒程度）灰色になることがありました。

[#LA3660]

- キーボードのLEDキー（CapsLock、NumLock、またはScrollLockキー）でマクロを実行する公開アプリケーションで、マクロが複数回実行されることがありました。

この修正を有効にするには、~/ICAClientディレクトリにあるwfclient.iniファイルの[WFClient]セクションにBypassSetLED=Trueを追加してください。~/ICAClientディレクトリが存在しない場合は、/opt/Citrix/ICAClient/nls/en/wfclient.iniファイルで同様の編集を行ってください。

[#LA3825]

- 日本語版のReceiver for Linuxを使用した仮想デスクトップセッションでShift+英数キーを押すと、IME言語バー上のCapsLockキーの状態が同期されなくなるという問題がありました。

[#LA4072]

- 日本語版のReceiver for Linuxを使用した仮想デスクトップセッションでShift+英数キーを押すと、IME言語バー上のCapsLockキーの状態が同期されなくなるという問題がありました。

[#LA4422]

セッション/接続

- マルチモニター環境でReceiver for Linuxを使用する場合、セカンダリモニターで最大化したウィンドウが正しく表示されなくなるがありました。この問題では、ウィンドウのサイズがモニターの表示領域よりも大きくなってしまいます。

[#LA0663]

- IBM Lotus Notesと他の公開アプリケーション（Microsoft Excelなど）を一緒に実行する場合、そのセッション内でLotus Notesの添付ウィンドウを開くとそのウィンドウの表示が正しく更新されず、ほかのウィンドウよりも手前に表示されるという問題がありました。この問題により、ほかのウィンドウが黒（またはほかの背景色）で表示されます。

[#LA1490]

- タイムゾーンのリダイレクトを有効にすると、セッションにクライアント側のタイムゾーンが適用されます。ただし、セッション内でコントロールパネルの「日付と時刻」を開いた時に、以下のエラーメッセージが表示されることがありました。

「現在指定されているタイムゾーンは認識できません。以下のリンクを使用して、有効なタイムゾーンを選択してください」

[#LA1828]

- IceWMウィンドウマネージャーがインストールされたシステムで、**-span o**コマンドで2つのモニター全体にセッションを表示できず、片方のモニターにのみ表示されるという問題がありました。

[#LA2178]

- セッションで、クライアント側のUSBドライブ上の特定のファイルを開けないという問題がありました。この問題は、そのファイルの名前に5C文字（Shift-JISエンコーディングで円記号）が含まれていると発生します。

[#LA2183]

- この修正により、SucConnTimeout設定 (<http://support.citrix.com/proddocs/topic/ica-settings/nl/ja/ica-settings-succonntimeout.html?locale=ja>) が拡張され、公開アプリケーションだけでなく公開デスクトップにも適用されるようになります。この結果、複数のデスクトップセッションを開始する時に、その待機時間をSucConnTimeoutで指定できます。

SucConnTimeout値を設定するには：

~/ICAClient/wfclient.iniファイルの[WFClient]セクションで、以下の設定を行います。

```
[WFClient]
```

```
Version=2
```

```
SucConnTimeout=60
```

```
KeyboardLayout=(User Profile)
```

```
KeyboardMappingFile=automatic.kbd
```

```
KeyboardDescription=Automatic (User Profile)
```

ユーザーのホームディレクトリに~/ICAClientディレクトリが存在しない場合は、/opt/Citrix/ICAClient/nls/en/wfclient.iniファイルで同様の編集を行ってください。このファイルは、ユーザーの初回接続時に~/ICAClientディレクトリにコピーされます。また、SucConnTimeoutと同じセクションに、必要に応じてApplySucConnTimeoutToDesktops=Trueを追加することもできます。

```
[#LA2679]
```

- Centrifyを使用する環境で、Receiver for Linuxでドメインの資格情報を使用して公開アプリケーションを開始できないという問題がありました。

```
[#LA3270]
```

- この機能拡張により、XFSファイルシステムを使用するクライアント側ドライブのファイルを読み書きできるようになります。

```
[#LA3610]
```

- ワークスペースを移動した後で元の場所に戻って再接続すると、ウィンドウのフォーカスが失われることがありました。

注：この修正により、KDE、Xfce、およびGnomeデスクトップ環境での問題が解決されます。Unityデスクトップでは解決されません。

```
[#LA3432]
```

- 複数ドメイン環境で、ユーザー認証に代替ドメインを使用するとpnabrowseが失敗することがありました。この問題は、ユーザー名とドメインが個別に処理されるために発生します。このため、pnabrowseで代替ドメインを使用すると正しく認証されません。

たとえば、プライマリドメインがthis.companyで代替ドメインがthis.localの場合、「user1@this.company」だけでなく「user1@this.local」と入力しても正しく処理されなければなりません。この修正により、両方の資格情報が正しく処理されるようになります。

```
> ./pnabrowse -L desk -U user1 -D this.company -P company123
```

```
> ./pnabrowse -L desk -U user1@this.local -P company123
```

```
[#LA3551]
```

- Receiver for Linuxで切断セッションに自動再接続した後、カスタムの仮想チャネルが初期化に失敗することがありました。

```
[#LA3572]
```

- サーバー上で [ポインターを自動的に既定のボタン上に移動する] オプション (ダイアログボックスが開いた時にデフォ

ルトのボタン上にマウスポインターを配置する機能)を有効にしても、Receiver for Linuxによる公開アプリケーションセッションでは動作しないという問題がありました。

[#LA4285]

- 一部のJavaアプリケーション (jEditなど) をシームレスウィンドウモードで実行する場合、ウィンドウの右側と下側が正しく再描画されないという問題がありました。

この修正を有効にするには、\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniファイルの[WFClient]セクションに、TWISetFocusBeforeRestore=Trueを追加してください。

[#LA4450]

- NetScaler環境のReceiver for Linuxで、USBデバイスのリダイレクトに時間がかかることがありました。

[#LA4549]

- 一部の公開アプリケーション (Token2など) で、ウィンドウをタイトルバーでドラッグすると、そのウィンドウが最小化することがありました。

この修正を有効にするには、wfclient.iniファイルの[WFClient]セクションに、TWIMoveResizeHideWindowType=2を追加してください。

[#LA4737]

システムの例外

- module.iniにCommPollSize=Onを設定するとwfica.exeプロセスが異常停止することがありました。

[#LA2155]

- 公開デスクトップ上のJavaアプリケーションで印刷すると、Receiver for Linuxが異常停止することがありました。

[#LA3321]

- クリップボードから大量のデータを貼り付ける時にReceiverが異常停止することがありました。

[#LA3608]

- Receiverが異常停止することがありました。この問題は、公開アプリケーションのタイトルバーに51文字以上の漢字が含まれていると発生します。

[#LA4119]

ユーザーエクスペリエンス

- 公開アプリケーションのウィンドウをタイトルバーでドラッグしながらAltキーを押すと、ウィンドウの外枠とその内容が正しく移動しなくなるという問題がありました。この場合、マウスボタンを離すと、ウィンドウの移動が繰り返されます。

[#LA0837]

- セカンダリモニター上でウィンドウを最大化すると、マウスポインターが正しく配置されなくなることがありました。たとえば、メニューやボタン上にマウスポインターを移動すると、異なる項目が反応します。この問題は、セカンダリモニターの垂直解像度がプライマリモニターよりも小さい場合に発生します。

例：プライマリモニターの解像度が1920×1080ピクセルでセカンダリモニターが1280×1024ピクセルの場合、プライマリモニター上で公開アプリケーションを開始してセカンダリモニター上にそのウィンドウを移動して最大化すると、マウスポインターが1cmほどずれて表示されます。このため、マウスポインターから1cm離れた場所にあるボタンのヒントが表示されません。

[#LA2071]

- シームレスウィンドウモードの公開アプリケーションで、通知領域のアイコンメニューの一部が正しく再描画されないという問題がありました。

[#LA4139]

ユーザーインターフェイス

- この機能拡張により、pnabrowseユーティリティで表示する公開リソースのアイコンの解像度が高くなります。

[#LA1994]

- 公開アプリケーションでドロップダウンメニューを開いた時に、「Untitled Window」というタスクバー項目が表示されることがありました。

[#LA3422]

その他

- この機能拡張により、USBリダイレクト機能をクライアントデバイスのユーザー単位で制限できるようになります。特定のユーザーのUSBリダイレクトを制限するには、そのクライアントデバイスのルートまたは管理者アカウントで以下のコマンドを実行します。

1. ctxusbバイナリからsetuidビットを削除します。

```
# chmod u-s /opt/Citrix/ICAClient/ctxusb
```

2. USBデバイスを挿入して、ファイルシステムでそのデバイスを参照します。

```
# ls -lR /dev/bus/usb
```

3. ユーザー権限を割り当てます。ここで、user1はユーザー名、/dev/bus/usb/001/041は手順2.で参照したUSBデバイスの場所です。

```
# chown user1 /dev/bus/usb/001/041
```

[#LA1952]

- Ubuntu Version 12.04で、GStreamer（サードパーティ製アプリケーション）とCitrix Receiverとの統合に失敗するという問題がありました。

[#LA2016]

- Ubuntu 64ビットディストリビューションなどの64ビットシステムで、hdxcheck.shスクリプトが32ビットライブラリlibpcsc-lite.so、libcrypto.so、libjpeg.so、libldap.so、およびlibcap.soを参照できないという問題がありました。このため、以下の警告メッセージが表示されます。

```
"Warning! - libpcsc-lite.so missing, check that the file exists.
```

```
Warning! - libcrypto.so is not installed. This is required if you use NTLM proxies.
```

```
Warning! - libjpeg.so is not installed! This is needed for Speedscreen Image and Browser Acceleration.
```

Warning! - libdapsdk.so is not installed! This is only needed if you use Novell Netware Services.
A compatible version of libcap could not be located!"

この問題は、スクリプトが/user/lib配下のライブラリのみを参照するために発生します。64ビットのLinuxディストリビューションでは、これらのライブラリの32ビット版は/usr/lib/i386-linux-gnuまたは/lib/i386-linux-gnu/にインストールされます。この修正により、スクリプトで/lib配下のライブラリも参照されるようになります。ライブラリの参照に成功すると、警告メッセージの代わりに以下のメッセージが表示されます。

```
"Success! - Libpcsc-lite.so installed. Smartcard support enabled.  
Success! All OS dependencies found!  
A compatible version of libcap is installed!"
```

[#LA2204]

- この機能拡張により、HP T510上のオープンソースマルチメディアフレームワークplaybin2がサポートされます。playbin2のサポートを有効にするには、All_Regions.iniファイルに以下のオプションを設定してください。

```
SpeedScreenMMAClosePlayerOnEOS=True  
SpeedScreenMMAEnablePlaybin2=True
```

[#LA2566]

- この修正により、#LA2566のさまざまな問題が解決され、HP T510上のオープンソースマルチメディアフレームワークplaybin2がサポートされます。

[#LA2757]

既知の問題

Mar 07, 2018

Citrix Receiver for Linux 13.9の既知の問題

このリリースの既知の問題は次のとおりです。

- 4バイト文字が1つまたは複数含まれるローカライズされたカスタムパスにCitrix Receiver for Linuxがインストールされている場合、StoreFront URLを追加することができません。 [RFLNX-613]
- Citrix Receiverにアップグレードすると、新しい設定を\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルに追加できません。この問題は、ユーザーの最初のセッション起動時に\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniがテンプレートから作成されるため起こります。アップグレードでユーザーのAll_Regions.ini設定が変更されることはありません。つまり、All_Regions.iniテンプレートに追加される新しいエントリは、ユーザーの既存のAll_Regions.iniファイルに自動的に追加されず、新しいエントリはデフォルトでブロックされます。

この問題を回避するには、ユーザーが元の\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを変更していない場合、元のファイルを削除します。これによって、新しいAll_Regions.iniファイルがアップグレードで作成されます。ユーザーが元のファイルを変更している場合、ファイルをバックアップの場所に移動してから、最新のテンプレートを使用してAll_Regions.iniファイルが作成されるようにします。次に、diffやmeldなどのツールを使用して、既存のバージョンと新しい\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを比較し、ユーザーの設定に反映します。

[RFLNX-706]

- GStreamer1.0を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、OpenGLによって予期しないポップアップウィンドウが表示されるプラットフォームがあります。

[RFLNX-949]

- GStreamer1.4以降を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、サーバー側で取得モードにすると、マルチメディアファイルの種類 (MPG1、MPEG2、H264) によっては再生することができません。

[RFLNX-952]

- Raspberry PiのようにCPU周波数をスケーリングできるデバイスで、オーディオの途切れや一般的なパフォーマンスの問題が発生する場合、スケーリングのガバナナーをパフォーマンスモードに設定してください。現在のコアごとのパフォーマンスガバナナーを表示するには、以下のコマンドを実行します。はコアです。

```
cat /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

デフォルトでは、この設定はオンデマンド設定であり、リアルタイムで動的に適切なパフォーマンスを提供するではありません。

スケーリングガバナナーをパフォーマンスモードに設定するには、以下のコマンドをrootとして実行します。

```
echo performance > /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```


コアごとにこのコマンドを繰り返します。

[RFLNX-1003]

- ハードウェアアクセラレーション用のHDX Ready PiのH264デコーダープラグインは、/boot/config.txtファイルの「framebuffer_width」および「framebuffer_height」パラメーターでフレームバッファの解像度を変更すると、正しく機能しません。この問題を回避するには、「hdmi_group」および「hdmi_mode」パラメーターでPiの解像度を変更します。

[RFLNX-1049]

- tar.gzファイルでCitrix Receiverをインストールすると、無効なグループエラーが発生します。このエラーは、オペレーティングシステムに「sys」というグループが存在しないために発生し、次のエラーメッセージが表示されます。

```
「chgrp: invalid group: sys」
```

この問題を回避するには、HOST_SYS_GROUP_NAMEを対象のグループに設定してsetupwfcを実行します。

```
HOST_SYS_GROUP_NAME=<グループ> ./setupwfc
```

次に、インストールされたファイルのグループ名を入力します。

[RFLNX-1377]

- 使用するネットワークの最大転送単位 (MTU) が1500を下回る場合は、UDT接続の確立に失敗することがあります。

この問題を解決するには、生成されるUDPパケットのサイズを小さくします。udtMSSのサイズを大幅に削減すると、生成されたUDPパケットをMTUネットワークで送信できます。詳しくは、Knowledge Centerの[CTX224373](#)を参照してください。

[RFLNX-1390]

- アダプティブトランスポート接続で帯域幅の推定が更新できないことがあります。セッション帯域幅の正確な読み取りに依存する機能が正しく動作していない可能性があります。次のような場合が考えられます。
 - 全体的なセッションスループットが予想より低い、またはセッションの確立後にネットワークの状態が変化した状況（利用可能な帯域幅の減少）で、クライアントがネットワークが実際に処理できるサイズより大きなデータを送信しようとしている。
 - エンコードされたH264グラフィックのビットレートが正しくない、または不適切である。
 - MediaStreamのトランスコード機能が正しく動作していない。

[RFLNX-1408]

- ブラウザーコンテンツリダイレクトを使用する場合、ライブ配信ビデオがブラウザーのオーバーレイで再生されないことがあります。
回避策：WebKitGTKの最新バージョンをインストールしてください。

[RFLNX-1589]

Citrix Receiver for Linux 13.8の既知の問題

このリリースの既知の問題は次のとおりです。

- 4バイト文字が1つまたは複数含まれるローカライズされたカスタムパスにCitrix Receiver for Linuxがインストールされている場合、StoreFront URLを追加することができません。 [RFLNX-613]
- Citrix Receiverにアップグレードすると、新しい設定を\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルに追加できません。この問題は、ユーザーの最初のセッション起動時に\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniがテンプレートから作成されるため起こります。アップグレードでユーザーのAll_Regions.ini設定が変更されることはありません。つまり、All_Regions.iniテンプレートに追加される新しいエントリは、ユーザーの既存のAll_Regions.iniファイルに自動的に追加されず、新しいエントリはデフォルトでブロックされます。

この問題を回避するには、ユーザーが元の\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを変更していない場合、元のファイルを削除します。これによって、新しいAll_Regions.iniファイルがアップグレードで作成されます。ユーザーが元のファイルを変更している場合、ファイルをバックアップの場所に移動してから、最新のテンプレートを使用してAll_Regions.iniファイルが作成されるようにします。次に、diffやmeldなどのツールを使用して、既存のバージョンと新しい\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを比較し、ユーザーの設定に反映します。

[RFLNX-706]

- GStreamer1.0を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、OpenGLによって予期しないポップアップウィンドウが表示されるプラットフォームがあります。

[RFLNX-949]

- GStreamer1.4以降を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、サーバー側で取得モードにすると、マルチメディアファイルの種類（MPG1、MPEG2、H264）によっては再生することができません。

[RFLNX-952]

- Raspberry PiのようにCPU周波数をスケーリングできるデバイスで、オーディオの途切れや一般的なパフォーマンスの問題が発生する場合、スケーリングのガバナナーをパフォーマンスモードに設定してください。現在のコアごとのパフォーマンスガバナナーを表示するには、以下のコマンドを実行します。はコアです。

```
cat /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

デフォルトでは、この設定はオンデマンド設定であり、リアルタイムで動的に適切なパフォーマンスを提供することはできません。

スケーリングガバナナーをパフォーマンスモードに設定するには、以下のコマンドをrootとして実行します。

```
echo performance > /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

コアごとにこのコマンドを繰り返します。

[RFLNX-1003]

- ハードウェアアクセラレーション用のHDX Ready PiのH264デコーダープラグインは、/boot/config.txtファイルの「framebuffer_width」および「framebuffer_height」パラメーターでフレームバッファの解像度を変更すると、正しく機

能しません。この問題を回避するには、「hdmi_group」および「hdmi_mode」パラメーターでPiの解像度を変更します。

[RFLNX-1049]

- tar.gzファイルでCitrix Receiverをインストールすると、無効なグループエラーが発生します。このエラーは、オペレーティングシステムに「sys」というグループが存在しないために発生し、次のエラーメッセージが表示されます。

```
「chgrp: invalid group: sys」
```

この問題を回避するには、HOST_SYS_GROUP_NAMEを対象のグループに設定してsetupwfcを実行します。

```
HOST_SYS_GROUP_NAME=<グループ> ./setupwfc
```

次に、インストールされたファイルのグループ名を入力します。

[RFLNX-1377]

- 使用するネットワークの最大転送単位 (MTU) が1500を下回る場合は、UDT接続の確立に失敗することがあります。

この問題を解決するには、生成されるUDPパケットのサイズを小さくします。udtMSSのサイズを大幅に削減すると、生成されたUDPパケットをMTUネットワークで送信できます。詳しくは、Knowledge Centerの[CTX224373](#)を参照してください。

[RFLNX-1390]

- アダプティブトランスポート接続で帯域幅の推定が更新できないことがあります。セッション帯域幅の正確な読み取りに依存する機能が正しく動作していない可能性があります。次のような場合が考えられます。
 - 全体的なセッションスループットが予想より低い、またはセッションの確立後にネットワークの状態が変化した状況（利用可能な帯域幅の減少）で、クライアントがネットワークが実際に処理できるサイズより大きなデータを送信しようとしている。
 - エンコードされたH264グラフィックのビットレートが正しくない、または不適切である。
 - MediaStreamのトランスコード機能が正しく動作していない。

[RFLNX-1408]

- Citrix Receiver for Linuxは、誤ってクライアントアドレスがサーバーのアドレスであるとVDAに報告します。

[RFLNX-1735]

- Enlightened Data Transport (EDT) セッションは、ログオフ時に断続的に応答しなくなることがあります。

[RFLNX-1740]

Citrix Receiver for Linux 13.7の既知の問題

このリリースの既知の問題は次のとおりです。

- 4バイト文字が1つまたは複数含まれるローカライズされたカスタムパスにCitrix Receiver for Linuxがインストールされている場合、StoreFront URLを追加することができません。 [RFLNX-613]

- Citrix Receiverにアップグレードすると、新しい設定を\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルに追加できません。この問題は、ユーザーの最初のセッション起動時に\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniがテンプレートから作成されるため起こります。アップグレードでユーザーのAll_Regions.ini設定が変更されることはありません。つまり、All_Regions.iniテンプレートに追加される新しいエントリは、ユーザーの既存のAll_Regions.iniファイルに自動的に追加されず、新しいエントリはデフォルトでブロックされます。

この問題を回避するには、ユーザーが元の\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを変更していない場合、元のファイルを削除します。これによって、新しいAll_Regions.iniファイルがアップグレードで作成されます。ユーザーが元のファイルを変更している場合、ファイルをバックアップの場所に移動してから、最新のテンプレートを使用してAll_Regions.iniファイルが作成されるようにします。次に、diffやmeldなどのツールを使用して、既存のバージョンと新しい\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを比較し、ユーザーの設定に反映します。

[RFLNX-706]

- GStreamer1.0を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、OpenGLによって予期しないポップアップウィンドウが表示されるプラットフォームがあります。

[RFLNX-949]

- GStreamer1.4以降を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、サーバー側で取得モードにすると、マルチメディアファイルの種類 (MPG1、MPEG2、H264) によっては再生することができません。

[RFLNX-952]

- Raspberry PiのようにCPU周波数をスケーリングできるデバイスで、オーディオの途切れや一般的なパフォーマンスの問題が発生する場合、スケーリングのガバナーをパフォーマンスモードに設定してください。現在のコアごとのパフォーマンスガバナーを表示するには、以下のコマンドを実行します。はコアです。

```
cat /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

デフォルトでは、この設定はオンデマンド設定であり、リアルタイムで動的に適切なパフォーマンスを提供することはできません。

スケーリングガバナーをパフォーマンスモードに設定するには、以下のコマンドをrootとして実行します。

```
echo performance > /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

コアごとにこのコマンドを繰り返します。

[RFLNX-1003]

- ハードウェアアクセラレーション用のHDX Ready PiのH264デコーダープラグインは、/boot/config.txtファイルの「framebuffer_width」および「framebuffer_height」パラメーターでフレームバッファの解像度を変更すると、正しく機能しません。この問題を回避するには、「hdmi_group」および「hdmi_mode」パラメーターでPiの解像度を変更します。

[RFLNX-1049]

- tar.gzファイルでCitrix Receiverをインストールすると、無効なグループエラーが発生します。このエラーは、オペレーティングシステムに「sys」というグループが存在しないために発生し、次のエラーメッセージが表示されます。

「chgrp: invalid group: sys」

この問題を回避するには、HOST_SYS_GROUP_NAMEを対象のグループに設定してsetupwfcを実行します。

HOST_SYS_GROUP_NAME=<グループ> ./setupwfc

次に、インストールされたファイルのグループ名を入力します。

[RFLNX-1377]

- 使用するネットワークの最大転送単位 (MTU) が1500を下回る場合は、UDT接続の確立に失敗することがあります。

この問題を解決するには、生成されるUDPパケットのサイズを小さくします。udtMSSのサイズを大幅に削減すると、生成されたUDPパケットをMTUネットワークで送信できます。詳しくは、Knowledge Centerの[CTX224373](#)を参照してください。

[RFLNX-1390]

- アダプティブトランスポート接続で帯域幅の推定が更新できないことがあります。セッション帯域幅の正確な読み取りに依存する機能が正しく動作していない可能性があります。次のような場合が考えられます。
 - 全体的なセッションスループットが予想より低い、またはセッションの確立後にネットワークの状態が変化した状況（利用可能な帯域幅の減少）で、クライアントがネットワークが実際に処理できるサイズより大きなデータを送信しようとしている。
 - エンコードされたH264グラフィックのビットレートが正しくない、または不適切である。
 - MediaStreamのトランスコード機能が正しく動作していない。

[RFLNX-1408]

Citrix Receiver for Linux 13.6の既知の問題

このリリースの既知の問題は次のとおりです。

- 4バイト文字が1つまたは複数含まれるローカライズされたカスタムパスにCitrix Receiver for Linuxがインストールされている場合、StoreFront URLを追加することができません。 [RFLNX-613]
- Citrix Receiverにアップグレードすると、新しい設定を\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルに追加できません。この問題は、ユーザーの最初のセッション起動時に\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniがテンプレートから作成されるため起こります。アップグレードでユーザーのAll_Regions.ini設定が変更されることはありません。つまり、All_Regions.iniテンプレートに追加される新しいエントリは、ユーザーの既存のAll_Regions.iniファイルに自動的に追加されず、新しいエントリはデフォルトでブロックされます。

この問題を回避するには、ユーザーが元の\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを変更していない場合、元のファイルを削除します。これによって、新しいAll_Regions.iniファイルがアップグレードで作成されます。ユーザーが元のファイルを

を変更している場合、ファイルをバックアップの場所に移動してから、最新のテンプレートを使用してAll_Regions.iniファイルが作成されるようにします。次に、diffやmeldなどのツールを使用して、既存のバージョンと新しいSHOME/.ICAClient/All_Regions.iniファイルを比較し、ユーザーの設定に反映します。

[RFLNX-706]

- GStreamer1.0を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、OpenGLによって予期しないポップアップウィンドウが表示されるプラットフォームがあります。

[RFLNX-949]

- GStreamer1.4以降を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、サーバー側で取得モードにすると、マルチメディアファイルの種類 (MPG1、MPEG2、H264) によっては再生することができません。

[RFLNX-952]

- Raspberry PiのようにCPU周波数をスケーリングできるデバイスで、オーディオの途切れや一般的なパフォーマンスの問題が発生する場合、スケーリングのガバナーをパフォーマンスモードに設定してください。現在のコアごとのパフォーマンスガバナーを表示するには、以下のコマンドを実行します。はコアです。

```
cat /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

デフォルトでは、この設定はオンデマンド設定であり、リアルタイムで動的に適切なパフォーマンスを提供することはできません。

スケーリングガバナーをパフォーマンスモードに設定するには、以下のコマンドをrootとして実行します。

```
echo performance > /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

コアごとにこのコマンドを繰り返します。

[RFLNX-1003]

- ハードウェアアクセラレーション用のHDX Ready PiのH264デコーダープラグインは、/boot/config.txtファイルの「framebuffer_width」および「framebuffer_height」パラメーターでフレームバッファの解像度を変更すると、正しく機能しません。この問題を回避するには、「hdmi_group」および「hdmi_mode」パラメーターでPiの解像度を変更します。

[RFLNX-1049]

- tar.gzファイルでCitrix Receiverをインストールすると、無効なグループエラーが発生します。このエラーは、オペレーティングシステムに「sys」というグループが存在しないために発生し、次のエラーメッセージが表示されます。

```
「chgrp: invalid group: sys」
```

この問題を回避するには、HOST_SYS_GROUP_NAMEを対象のグループに設定してsetupwfcを実行します。

```
HOST_SYS_GROUP_NAME=<グループ> ./setupwfc
```

次に、インストールされたファイルのグループ名を入力します。

[RFLNX-1377]

- 使用するネットワークの最大転送単位 (MTU) が1500を下回る場合は、UDT接続の確立に失敗することがあります。

この問題を解決するには、生成されるUDPパケットのサイズを小さくします。udtMSSのサイズを大幅に削減すると、生成されたUDPパケットをMTUネットワークで送信できます。詳しくは、Knowledge Centerの[CTX224373](#)を参照してください。

[RFLNX-1390]

- アダプティブトランスポート接続で帯域幅の推定が更新できないことがあります。セッション帯域幅の正確な読み取りに依存する機能が正しく動作していない可能性があります。次のような場合が考えられます。
 - 全体的なセッションスループットが予想より低い、またはセッションの確立後にネットワークの状態が変化した状況 (利用可能な帯域幅の減少) で、クライアントがネットワークが実際に処理できるサイズより大きなデータを送信しようとしている。
 - エンコードされたH264グラフィックのビットレートが正しくない、または不適切である。
 - MediaStreamのトランスコード機能が正しく動作していない。

[RFLNX-1408]

Citrix Receiver for Linux 13.5の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

- 4バイト文字が1つまたは複数含まれるローカライズされたカスタムパスにCitrix Receiver for Linuxがインストールされている場合、StoreFront URLを追加することができません。

[RFLNX-613]

- GStreamer1.0を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、OpenGLによって予期しないポップアップウィンドウが表示されるプラットフォームがあります。

[RFLNX-949]

- GStreamer1.4以降を有効にしたHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトの場合、サーバー側で取得モードにすると、マルチメディアファイルの種類 (MPG1、MPEG2、H264) によっては再生することができません。

[RFLNX-952]

- Raspberry PiのようにCPU周波数をスケーリングできるデバイスで、オーディオの途切れや一般的なパフォーマンスの問題が発生する場合、スケーリングのガバナーをパフォーマンスモードに設定してください。現在のコアごとのパフォーマンスガバナーを表示するには、以下のコマンドを実行します。はコアです。

```
cat /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

デフォルトでは、この設定はオンデマンド設定であり、リアルタイムで動的に適切なパフォーマンスを提供することはできません。

スケーリングガバナーをパフォーマンスモードに設定するには、以下のコマンドをrootとして実行します。

```
echo performance > /sys/devices/system/cpu/cpu/cpufreq/scaling_governor
```

コアごとにこのコマンドを繰り返します。

[RFLNX-1003]

- ハードウェアアクセラレーション用のHDX Ready PiのH264デコーダープラグインは、/boot/config.txtファイルの「framebuffer_width」および「framebuffer_height」パラメーターでフレームバッファの解像度を変更すると、正しく機能しません。この問題を回避するには、「hdmi_group」および「hdmi_mode」パラメーターでPiの解像度を変更します。

[RFLNX-1049]

Citrix Receiver for Linux 13.4の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

- ‘-span o’引数を使用してセッションウィンドウリダイレクトを上書きすると、Desktop Viewerツールバーを使用して、全面モードのセッションをウィンドウモードに縮小することができません。

この問題を解決するには、‘-span o’オプションを使用しないでください。代わりに、ウィンドウマネージャーで _NET_WM_FULLSCREEN_MONITORS サポートを使用するか、Desktop Viewerを無効にしてください。

[#634855]

- Desktop Viewerで [切り替え] ボタンの下の別のセッション名をクリックすると、セッションがポップアップしないことがあります。

[#648716]

- X1 UIからクラシックUIに切り替えると、Receiver for Linuxは応答しなくなります。

セルフサービスUIがエラー「NoWebUI 0」を表示した場合、セルフサービス処理を再起動し、セルフサービスUIを通常に戻します。

[#652810]

- Flashリダイレクトがマルチモニタークライアントで誤った場所を使用します。

複数のモニターでクライアントがFlashリダイレクトを使用すると、Flashコンテンツが意図した以外のモニターや画面外に表示されます。これを回避するには、Flashリダイレクト機能を試行する前に、すべての使用可能なモニターでセッションが実行されていることを確認します。

[#653550]

- このリリースを更新すると、All_Regions.iniファイルのオプションによって、エラーが発生することがあります。

[#654826]

- HDX Webカメラリダイレクトは、起動から45秒間無効になります。

これを回避するには、~/ICAclient/wfclient.iniファイル（または\$ICAROOT/config/module.iniファイル）の[wfclient]セクションに次のエントリを追加します。HDXRTMEWebCamLaunchDelayTime=0。

HDX Webカメラリダイレクトではなく、RTMEプラグインを使用する場合は、この値を変更しないでください。

Citrix Receiver for Linux 13.3の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

- デスクトップを最初に起動する時、Citrix ReceiverはPIVスマートカードを認識しません。

[#491235]

- サーバーを再起動後すぐにCitrix Receiverがサーバーを見つけられないと、不明確なエラーメッセージが表示されます。

[#553886]

- セッション画面の保持タイマーの有効期限が切れると、正しくないメッセージダイアログが表示されます。

[#556899]

- SSLv3プロトコルが有効なVDAに接続するとエラーメッセージ（「未知のエラー1000047」など）が表示されます。

[#558641]

- SSLv3プロトコルが有効なStoreFrontサーバーに接続すると全般ネットワークエラーが表示されます。

[#558653]

- storebrowse, -c SharedUserMode[=value]を使用してSharedUserModeを変更すると、値パラメーターの大文字と小文字を完全に一致させる必要があります。storebrowse, -c SharedUserMode[=value]の値パラメーターを使う場合、大文字と小文字はTrueまたはFalseと完全に一致している必要があります。無効な値パラメーターが使用されてもエラーメッセージは表示されません。例：-c SharedUserMode=True。

[#559402]

- SSLv3プロトコルのみを有効にしてターミナルサーバー（たとえば、RDS）に接続すると接続には予想通り失敗しますが、SSLピアハンドシェイクエラーには失敗しない可能性があります。

[#567407]

- 汎用USB Webカメラ入力が64ビットシステムで失敗します。

[#568556]

- storebrowse -dコマンドは、セルフサービスにより作成された以前にクリアされたキャッシュ済みのストア情報を削除しません。つまり、引き続いてストアに追加されると、セルフサービスUIが以前キャッシュされた状態から読み込みます。

[#569806]

- エンドユーザーライセンス契約（ライセンス）に同意した後でTLS値が変更されると、新しいTLS値は、selfservice/storebrowseを使用するStoreFrontサーバーへの接続には適用されません。実行中のAuthManagerは変更したTLS設定を読み取りません。

[#570725]

- コネクションセンターはIPv6をサポートしません。

[#571743]

- ネイティブ値を\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniのTCPRecvBufferSizeなどの正数構成エントリとして指定すると、値は正の値としてWFICAに間違って渡されます。この問題を解決するには、\$ICAROOT/config/module.iniを使ってTCPRecvBufferSizeのネイティブ値を設定します。

[#575474]

- GStreamerヘルパープロセスにより、GLIBスレッド問題に関連した警告が表示されます。

[#580753]

- ARMELブラウザプラグインは、このリリースでは機能しません。

[#588044]

- タイムゾーンがXenAppおよびXenDesktop 7.6セッションと正しくマッピングされない問題が発生する場合は、[CTX142640](#)で言及されているHotfixの7の手順を実行する必要があります（ICATS760WX64014より）。問題が解決しない場合は、/etc/timezone（または/etc/timezoneがない場合は/etc/localtime）を変更して/usr/share/zoneinfo/...の市の名前に対するsymlinkにします。

タイムゾーンがサポートされていない場合は、サーバーに追加されたマッピングのためのサポートチケットを作成する必要があります。

[#LC1061, #606648]

- プラットフォーム最適化SDKでは、非X11環境用のプラグインに2つの問題があります。
 - セッション画面の保持を使用すると、XenDesktop 7.x用のWindowsサーバーへのセッションでエラーが生じます。
 - 16ビット色深度のセッションではビデオ表示が壊れます。これらの問題は、SDLライブラリベースのSDL_pluginおよび生カーネルFramebufferベースのFB_pluginサンプルプラグインの両方の実装に存在します。ユーザーによって開発されたそのほかのいずれのプラグインにもこれと同じ問題がある可能性があります。

Citrix Receiver for Linux 13.2.1の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

- ARMELブラウザプラグイン（Webブラウザからセッションを起動する場合に使用される）に起動に失敗すると、ユーザーはセッションを開始できません。この問題を解決するには、ブラウザの設定によりプラグインを無効にし、フォールバックメカニズムを実行できるようにします。

[#580782]

- SLED 11sp3で実行している場合、端末からstorebrowseまたはselfserviceを開始すると、複数のプログラムでエラーが発生して「libidn.so.11: no version information available.」と表示されることがあります。この問題がCitrix Receiverに及ぼす影響はほとんどありません。

[#582512]

- Flashのリダイレクトは、64ビットクライアントソフトウェアでは実行できません。環境においてこの機能を実行することが重要な場合は、Citrix Product Managementチームまで連絡するか、サポートフォーラムでガイダンスの追加情報を参照してください。

[#582627]

- Receiverは [詳細] ビューで [よく使う項目に追加] を選択しても、お気に入りのアプリケーションを追加できません。この問題は、更新をインストールせずにSuSE SLED 11sp3を実行する場合に発生します。この問題を避けるには、パッケージlibwebkit-1_0-2のバージョンを1.2.7-0.17.1以降にします。

[#585295]

- libwebkitgtk+のEPEL 2.2.4バージョンでサードパーティの問題が発生しますCitrixは、RedHat 7およびCentos 7上でlibwebkitgtkのGTK+2バージョンを取得する方法としては、EPEL（Extra Packages for Enterprise Linux）リポジトリの使用をお勧めします。ただし、サーバー上のホストされているアプリケーション名に日本語/中国語の文字が使用されていると、ここで指定されたEPELバージョンで問題が発生します。その結果、APAC文字に適したRedHat 7およびCentos 7上では、安定したlibwebkitgtkビルドを入手するのに適した方法をReceiverで確保できません。

[#586967]

- 一部のプラットフォームにおいては、tarballディストリビューションからクライアントをインストールすると、KDEおよびGNOMEへの統合を求めるプロンプトが表示された後でシステムがハングすることがあります。この問題は、gstreamer-0.10を初めて初期化する場合に発生します。この問題が発生した場合、（ctrl+cを用いて）インストール処理を中断して、コマンド（スペースバーで1つスペースを挿入）gst-inspect-0.10 --gst-disable-registry-fork --versionを実行します。このコマンドを実行後、システムがハングすることなくtarballセットアップを再実行できるようになります。

[#587640]

- 一部のGnomeデスクトップ環境では、Microsoft Remote Desktopアプリ（Mstsc）の起動時にクライアントがクラッシュすることがあります。この問題は、リモートデスクトップへ接続した後で発生します。ログイン資格情報を入力後、'X'記号をクリックしてセッションを正常に閉じることができません（"A problem has occurred and the system can't recover."というエラーが表示されます）。

[#587922]

- Windows Media Playerに「ファイルの再生中にWindows Media Playerに問題が発生しました。」というエラーメッセージが表示されます。このエラー状態はエラーメッセージを閉じることで解除できます。その後、[再生] アイコンをクリックします。

[#588009]

- 64ビットのReceiverから起動すると、Windows 7デスクトップ上のWindows Media Playerがオーディオおよびビデオを再生できないことがあります。この問題は、Ubuntu 14.04の既知の問題によるものです。必要なGStreamerコンポーネントがインストールされていません。「[トラブルシューティング](#)」の「Windows Media Playerが特定のフォーマットのファイルを再生できない」を参照してください。

[#588298]

- Windows Media Playerが特定のフォーマットのファイルを再生できない

Citrix Receiver for Linux 13.2の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

- クライアントサーバーファイルタイプの割り当てを作成する新しいスクリプトが追加されました。この新しいctx_app_bindというスクリプトにより、公開アプリケーションを使って特定のファイルタイプを開くことができます。このスクリプトは公開アプリケーションの名前を受け付けたり、例示ファイルあるいはMIMEの種類の一つを受け付けたり、またオプションとしてサーバー名またはURLを含めることができます。

例：

```
ctx_app_bind example_file published_app_name server
ctx_app_bind application/some-mime-name published_app_name
```

-pオプションを使って、セッションの起動にstorebrowseではなくpnabrowseを使用します。

注：このスクリプトを実行する場合には、特に注意してください。このスクリプトをテストしていないOS環境もあります。

[#558649]

- ユーザーがストアに接続できない場合、Receiverで接続ログを有効にして、問題に関するトラブルシューティングを実行できます。Receiverで接続ログの収集を有効にするには：

1. 管理者権限のあるユーザーとして、次のパラメーターを使って/opt/citrix/ICAClient/config/AuthManConfig.xmlを編集します。

```
TracingEnabled
true
```

```
LoggingMode
verbose
```

2. 次のプロセスを停止します：AuthManagerDaemon、selfservice、ServiceRecord、storebrowse。

3. Receiverを起動してストアに接続します。

4. \$HOME/.ICAClient/logsでログをチェックします。

HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮には次のものがが必要です。

- Video4Linux互換Webカメラ

- ディストリビューションの"plugins-good"パッケージを含むGStreamer 0.10.25（または0.10.x以降）。

[#559817]

- アプリケーションを削除するためにLinux Receiver X1を使用している場合、ログアウトしてストアに戻ると、アプリケーションは削除されずそのまま保持されます。

[#561719]

Citrix Receiver for Linux 13.1の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

- コネクションセンターで仮想デスクトップから切断したりログオフしたりすることはできません。[切断] ボタンは使用できず、[ログオフ] ボタンは機能しません。仮想デスクトップから切断したりログオフしたりするには、コネクションセンターではなくデスクトップセッションを使用してください。仮想アプリケーションでは、この問題は発生しません。

[#423651, #424847]

- ユーザーがセルフサービスUIを開いてStoreFrontストアに接続するとエラーが発生し、その後でAuthentication Managerダイアログボックスが開かれるとReceiver for Linuxウィンドウが閉じます。

[#430193]

- Receiver for Linuxは保護されていないStoreFrontストアへの接続 (http://) は許可しません。ストアの構成によっては、ユーザーが"エラー：探索ドキュメントを取得できません" []形式のエラーメッセージを受け取ったり、初期接続がHTTPで実行された後で通信がhttpsに切り替えられたりします。または、ホスト名にIPアドレスを使用している場合は、Citrix XenAppサービス（以前のProgram Neighborhood エージェント）に関連するエラーが発生することがあります。URLを入力する場合、https://を明示的に使用するか、あるいはサーバー名にhttp://を付けないようにしてください。

[#473027、#478667、および#492402]

- Receiver for Linuxは、複数の認証証明書を含むスマートカードによるログオンをサポートしません。

[#488614]

- スマートカードにアクセスする場合にReceiver for Linuxでセグメント化の問題が起きる場合、PKCS#11ライブラリに問題があることがあります。pkcs11-toolユーティリティでライブラリをチェックできます。pkcs11-toolユーティリティはopensパッケージの一部です。次はテスト例です。

```
pkcs11-tool --module /usr/lib/libgtop11dotnet.so -
```

これによってもセグメント障害が起こる場合は、ドライバーの供給元に問い合わせてください。また、同じ種類のカード

ほかのソースのドライバーを試すこともできます。この問題は、Fedora 19およびFedora 20に含まれるGemalto .NETドライバーで見られます。

[#493172]

- Receiver for Linuxは複数のカードリーダーをサポートします。ただし、同時に使用できるのは1台のみです。

[#494524]

- 接続を実行するには、Linuxマシンのホスト名を20文字以下にする必要があります。この設定は、hostnameコマンドを使用して調査および設定することができます。いずれのユーザーもホスト名を調査できますが、hostnameを設定できるのはルートユーザーまたは管理者権限があるユーザーだけです。

[#494740]

- Receiver for Linux 13.xで全画面モードのXenDesktopにアクセスする場合、ローカルのスクリーンセーバーがアクティブにならないことがあります。これはサードパーティの問題で、クライアントのオペレーティングシステムにより動作は異なります。

[#496398]

- StoreFrontストアに接続しようとして間違えたスマートカードを挿入すると、「プロトコルエラー」や「指定したストアが見つかりません」などの問題について説明しないエラーメッセージが表示されることがあります。

[#496904]

- 全画面セッションを実行している低性能のデバイスでは、スマートカード認証によるログオンに予想よりも時間がかかり、タイムアウトすることがあります。H264の使用を無効にすることで、この問題を防ぐことができます。H264の使用を無効にするには、次のことを実行します。
 1. wfclient.iniを開きます。
 2. "Thinwire3.0"セクションに移動します。
 3. エントリ"H264Enabled=False"を追加します。

この問題は、ハードウェアアクセラレータH264のない、armhf (ARM hard float) をベースとするマシンで見られません。

[#497720]

- Program Neighborhoodエージェントサーバーによりユーザーがドメインコントローラーに直接アクセスして有効期限が切れたパスワードを変更できる場合は、ライブラリのMIT互換バージョンであるlibkcpms.soでのみこれを実行できます。これは、Heimdal互換バージョンの問題によるものです。これ制限は、x86、armel、およびx64 (x86 pnabrowseを使用) に適用されます。armhfには適用されません。

[#498037]

- Receiver for Linuxはlibpng12.soを必要としますが、Fedoraベースのシステムの標準のリポジトリではこれは通常使用できません。この場合、システムに適切なRPMをインターネットで見つけてください。openSUSEの場合はlibpng12.soを使用できますが、別途インストールする必要があります。

[#501937]

- 12.1用のHotfixは、値220のpnabrowse終了コードE_SSLSDK_PASSWORD_LOCKEDを追加しました。これにより、終了コードE_PASSWORD_EXPIREDの値は238から239に変更されました。13.0では、E_SSLSDK_PASSWORD_LOCKEDの値は240に変更され、E_PASSWORD_EXPIREDの正しい値を復元します。ただし、pnabrowse -errnoにより一覧表示される値は、220～240のまま間違っ表示されます。

[#502550]

Citrix Receiver for Linux 13の既知の問題

このリリースでは、以下の既知の問題が確認されています。

インストールの問題

- このリリースをインストールするには、libxerces-c 3.1が必要です。ただし、RPMパッケージを使用する一部のLinuxディストリビューションでは、このライブラリがインストールされていない場合があります。このライブラリがインストールされていないディストリビューションでは、適切なWebサイトからインストールしてください。

[#384324]

- libxercesやlibwebkitgtkのシステム要件を満たさないプラットフォームでは、Receiverをインストールする時にTarballパッケージを使用したり、DebianまたはRPMパッケージを強制的にインストールしたりできます。これにより、Webブラウザ上でReceiver for Webを使用できるようになります。たとえば、CentOSシステムではlibwebkitgtk-1.0.so.0を使用できないため、RPMパッケージをインストールできません。この問題を回避するには、--nodepsまたは--forceを指定してインストールするか、Tarballパッケージを使用してください。その後でWebブラウザを起動してReceiver for WebストアのURLを入力します。

[#426176]

- 32ビット版のOpenSUSE 13.1では、RPMパッケージによるReceiverのインストールが完了しますが、正しく動作しません。この問題を解決するには、[ftp://rpmfind.net/linux/opensuse/factory/repo/oss/suse/i586/libpng12-0-1.2.50-7.3.i586.rpm](http://rpmfind.net/linux/opensuse/factory/repo/oss/suse/i586/libpng12-0-1.2.50-7.3.i586.rpm)をダウンロードしてインストールしてから、Receiverを再度インストールしてください。

[#429879]

- 64ビット版のFedora 19.1環境では、64ビット版のRPMパッケージでReceiverをインストールした後で追加の構成手順を実行しないとpnabrowseやクライアントエンジンのwficaで接続を開始できません。この手順により、この環境のcurlの制限により発生するstorebrowseおよびselfserviceの問題が解決されます。この問題を回避するには、次のことを実行します。

1. 次のコマンドを実行して、32ビット版のlibpng12パッケージをインストールします。

```
yum install libpng12.i686
```

2. 次のコマンドを実行して、32ビット版のALSAプラグインをインストールします。これにより、オーディオエラーが最小限に抑えられます。

```
yum install alsa-plugins-pulseaudio.i686
```


3. Gtkエラーの数を最小限にするには、次のようなコマンドを使用してパッケージをインストールします。

```
yum install adwaita-gtk2-theme.i686
yum install PackageKit-gtk3-module.i686
yum install libcanberra-gtk2.i686
```

4. 以下のコマンドを実行して、プラグインnspluginwrapper.i686をインストールしてFirefoxに登録します。これにより、Firefoxからコネクションを開始できるようになります。

```
yum install nspluginwrapper.i686
mozilla-plugin-config
```

[#429886]

一般的な問題

- オーディオの再生を再開すると、ノイズが発生することがあります。このノイズは、一時停止した再生を再開する時にのみ発生し、初回再生時には発生しません。この問題は、リモートPCアクセス機能を使用したXenDesktop接続で確認されています。現在、この問題を回避する方法はありません。

[#308772]

- GStreamerはユーザーデバイスからメディアのソースに直接接続して、ユーザーデバイス上のデコーダーを使って再生する機能ですが、一部の種類のメディアファイルではサーバー上に適切なコーデックが必要です。現在、この問題を回避する方法はありません。

[#339394]

- Ubuntu 12.04でGnome 3デスクトップを使用する場合、通知領域の公開アプリケーションアイコンがデスクトップに統合されません。この問題では、公開アプリケーションのアイコンが別の通知領域ウィンドウ内に表示されます。現在、この問題を回避する方法はありません。

[#395140]

- Linuxユーザーは、自分のメールアドレスを入力してStoreFrontストアをセットアップすることはできません。[環境設定] ダイアログボックスの [アカウント] ページにストアのURLを入力する必要があります。また、管理者が新しいアカウントを作成するためのプロビジョニングファイルを作成して、それをユーザーに提供することもできます。

[#395394]

- デフォルトでは、selfserviceおよびstorebrowseコマンドのプロキシサポートは提供されません。StoreFrontサーバーでプロキシサーバーを使用するには、環境変数http_proxyを設定してからこれらのコマンドを使用してください。環境変数は、次の形式で設定します。

[.]

[#403729]

- セルフサービスユーザーインターフェイスでは、公開コンテンツをデスクトップアイコンにドロップしてクライアントからサーバーにリダイレクトすることはできません。現在、この問題を回避する方法はありません。

[#403739]

- RedHat FedoraのSELinux (Security-Enhanced Linux) のセキュリティモジュールにより、XenAppおよびXenDesktopのクライアント側ドライブのマッピング機能とUSBリダイレクト機能が正しく動作しなくなることがあります。これらの機能を使用する場合は、サーバー上でこれらの機能を構成する前にSELinuxを無効にしてください。

[#413554]

- ARMハードフロート (armhf) プラットフォームでは、HDX MediaStream Flashリダイレクト機能がテストされていません。これは、このプラットフォームのFlashプラグインではこのリリースのReceiverが正しく動作しないためです。

[#414253]

- Webカメラでサポートされないフレーム数を構成すると、予期せず高い値に変換される場合があります。

[#414576]

- ReceiverでWebカメラのデフォルト以外の解像度を設定すると、Citrix GoToMeetingでの初回使用時にビデオがストリーム配信されません。Webカメラは正しく動作してgst_readも実行されますが、映像が表示されません。この問題を解決するには、GoToMeetingでWebカメラをいったん停止してから再度起動してください。

[#414878]

- ウィンドウ装飾のないウィンドウマネージャー (装飾を無効にしたLXDE環境など) では、セルフサービスユーザーインターフェイスを閉じることができません。

[#416689]

- XenAppまたはXenDesktopの一部のバージョンで、デスクトップやアプリケーションの起動後に接続センターで接続先のサーバーの名前を確認できないという問題があります。この問題を解決するには、[プロパティ] をクリックしてください。[プロパティ] ダイアログボックスが開き、サーバー名が表示されます。

[#417114]

- Receiverのログオン時に資格情報の入力が入力が5分程度遅れると、セルフサービスユーザーインターフェイスにアプリケーションが表示されません。この問題を解決するには、ドロップダウンメニューで[アプリ一覧の更新] を選択して資格情報を入力してください。

[#417564]

- 管理者がユーザーのセッションをシャドウする時に表示上の問題が発生することがあります。この問題は、管理者の画面がユーザーデバイスのもよりも小さい場合に発生します。たとえば、スクロールバーが正しく表示されなかったり、一部の領域にアクセスできなくなったりします。現在、この問題を回避する方法はありません。また、管理者の画面上でシャドウセッションのサイズを変更すると、ユーザーデバイス上のセッション画面が黒くなる場合があります。この問題を解決

するには、管理者側のセッションウィンドウで [復元] ボタンをクリックしてください。

[#418672, #418690]

- ライブラリの互換性の問題により、Fedoraではセルフサービスユーザーインターフェイスおよび関連するStoreFrontコンポーネント（Authentication ManagerとService Recordデーモン）がサポートされません。Receiverのインストールはエラーを表示せずに成功しますが、Receiverは動作しません。従来のWeb Interfaceを使用してReceiverを起動するか、Receiver for Webを使用してください。

[#419662]

- サブスクライブしたアプリケーションやデスクトップの数が増えると、セルフサービスユーザーインターフェイスにスクロールバーが表示されます。ユーザーインターフェイスのサイズを大きくしてすべての項目を表示すると、スクロールバーは正しく非表示になります。ただし、ユーザーインターフェイスのサイズを小さくしても、スクロールバーが再表示されません。この問題は、Ubuntu 13.04でのみ確認されています。この問題を解決するには、[更新] メニューオプションをクリックするか、インターフェイスのサイズ変更を何回か繰り返すか、Receiverを再起動してください。

[#422520]

- ネットワークによっては、初回接続時に遅延が発生することがあります。一般的に、3G接続はADSL接続よりも低速です。

[#423663]

- セルフサービスユーザーインターフェイスで、ストアアドレスとしてHTTPS形式のアドレスを入力した時に「このサーバーアドレスでアカウントを追加することはできません。入力内容を確認してください」というエラーメッセージが表示されることがあります。このメッセージは、アドレスが正しくても、証明書が存在しないと表示されます。この問題を回避するには、証明書をインストールしてください。

[#423757, #424674]

- XenDesktopのポリシーで、Receiverセッションの最大フレーム数として30fpsよりも大きな値を設定しても、フロー制御機能の制限により実際のフレーム数が30fpsを超えることはありません。この問題は、XenDesktop 7および7.1で確認されています。この問題を回避するには、フロー制御を無効にしてください。

[#423950]

- アカウントを切り替えてほかのストアのデスクトップやアプリケーションにアクセスするには、セルフサービスユーザーインターフェイスの [アカウント] メニューを使用してください。操作方法が直観的でないため、将来のリリースで改善される場合があります。

[#424027]

- UTF-8でエンコードされていない複数のロケールでstorebrowseを使用すると、ログオン用のダイアログボックスで文字が正しく表示されない場合があります。たとえば、スペイン語のロケールで [ログオン] ボタンに文字が表示されない場合があります。この問題を解決するには、UTF-8ロケールに切り替えてください（たとえば、storebrowse、Service Recordデーモン、およびAuthentication Managerデーモンの実行可能ファイルにラッパースクリプトを作成します）。

[#424052]

- コネクションセンターで仮想デスクトップから切断したりログオフしたりすることはできません。[切断] ボタンは使用できず、[ログオフ] ボタンは機能しません。仮想デスクトップから切断したりログオフしたりするには、コネクションセンターではなくデスクトップセッションを使用してください。仮想アプリケーションでは、この問題は発生しません。

[#424847]

- storebrowse仮想デスクトップのセッションを開始する時に、起動の失敗が示す終了状態値「255 EXEC_FAILED」が表示されることがあります。この問題は、その仮想デスクトップが属しているグループで、すべてのデスクトップがシャットダウン状態である場合に発生します。この問題が発生しても、仮想デスクトップは正しく起動して、やがて使用可能な状態になります。この問題を回避するには、デスクトップを起動し直すか、スタートアップスクリプトを適切に編集してください。

[#425076, #425103]

- 日本語および簡体字中国語版のReceiverで、一部のダイアログボックスのショートカットキーが正しく動作しません。

[#425275, #425278, #425281, #425332]

- Ubuntuプラットフォーム上のドイツ語、フランス語、およびスペイン語版のReceiverで、一部のダイアログボックスのショートカットキーが正しく表示されません。ただし、これらのショートカットキーは正しく動作します。

[#425282, #425285, #425289, #425294, #425339]

- ドイツ語版のReceiverで、一部のダイアログボックスでショートカットキーが重複しています。

[#425284, #425338]

- StoreFrontとの接続を保護するために、opensslツールであるc_rehashによりルート証明書がインポートされハッシュされます。ただし、一部のバージョンのc_rehashでは、MS-DOS形式の行末を含んでいる証明書を正しく処理できません。c_rehashの出力で証明書のシンボリックリンクが生成されない場合は、行末をUNIX形式に変換する必要があります。このためには以下のtrコマンドラインを使用します。

```
tr -d '\r' < root_certificate_name.pem > new_root_certificate_name.pem
```

次にこのコマンドで作成された新しいルート証明書に対してc_rehashスクリプトを実行します。

[#425775]

- Debianプラットフォームで、システムの再起動時にctxusbcdデーモンが起動せず、USBリダイレクトに失敗することがあります。この問題は、/etc/init.d/ctxusbcdのinitスクリプトの変数####INIT_UDEV###がudevとして展開されるために発生します。この問題を解決するには、/etc/init.d/ctxusbcdを以下のように編集してください。このためには、ルート権限が必要です。

```
sed -ie's,####INIT_UDEV###,udev,g' /etc/init.d/ctxusbcd
```

次に、手動でinsservを再実行します（ここでもルート権限が必要です）。

/sbin/insserv /etc/init.d/ctxusbd

この問題は、Debianプラットフォームでのみ確認されています。

[#425810]

- Program Neighborhoodエージェントサイトへの接続時に有効な証明書がインストールされていないと、Receiverのユーザーインターフェイスが点滅してユーザーに資格情報の入力を求めたり、CPU負荷が高くなったりすることがあります。この問題を回避するには、証明書を正しくインストールし、定期的に保守することをお勧めします。この問題は、StoreFrontサイトへの接続時には発生しません。

[#425848]

- セルフサービスユーザーインターフェイスでユーザーがアプリケーションやデスクトップを検索する時に、アイコンが正しく表示されなくなることがあります。この問題を解決するには、[アプリ一覧の更新] をクリックしてください。

[#426364]

- armhf (ハードフロート) 環境で、一部のWindows Server 2012上のHTTPSで保護されたProgram Neighborhoodエージェントサイトにpnabrowseで接続すると、一般的なエラーメッセージが表示され、接続に失敗することがあります。この問題の原因は完全には特定されていませんが、末尾が「.local」のFQDNや、サーバー上の証明書のPublic Keyフィールドでキーのサイズが1024Bitsではなく2048Bitsであることによると考えられます。この問題はstorebrowseでは発生せず、armhf環境でのみ発生します。

[#426420]

- Receiverのセルフサービスユーザーインターフェイスで[ログオフ] をクリックしてからデスクトップまたはアプリケーションに接続し、資格情報の入力画面でキャンセルすると、「要求を処理できない」という内容のメッセージが表示されます。このメッセージは無視して構いません。ログオフ処理が正しく行われます。

[#426424]

- セルフサービスユーザーインターフェイスでProgram Neighborhoodエージェントサイトに初めて接続する時に、ログオンダイアログボックスの[キャンセル] をクリックしてから[アプリ一覧の更新] をクリックしてReceiverのウィンドウを開くと、セグメンテーションエラーが発生してReceiverの処理に失敗することがあります。現在、この問題を回避する方法はありません。

[#426625]

- 同時に複数のプロセスがデータストアをコールしたりプロシージャをロードしたりすると、メモリ上のファイル (StoreCache.xmlなど) のデータが失われることがあります。この問題では、最後の変更内容のみが保持され、それまでの内容は失われます。ファイルが破損することはありません。

[#426692]

- ストアを削除してから追加すると、追加したストアが[環境設定] ダイアログボックスの[アカウント] ページに表示され

ません。 [環境設定] ダイアログボックスをいったん閉じてから再度開いてください。

[#426735]

- [アプリやデスクトップへの再接続] オプションで [アプリの起動時または更新時] を選択し、デスクトップまたはアプリケーションに接続したままReceiverメニューで [アプリ一覧の更新] を選択すると、接続が再確立されるまでユーザーインターフェイスが応答不能になることがあります。

[#426761]

- Receiverで、追加済みのストアやゲートウェイを再度追加しようとしても、エラーメッセージは表示されません。この問題に対する解決策はありませんが、ストアやゲートウェイが重複して追加されることはなく、既存の設定が正しく適用されます。

[#427379]

- 公開アプリケーションのメニューをクリックしたときに、その項目が表示されなくなることがあります。この問題は、Ubuntu 12.04上のGNOME 3デスクトップ環境で最大化したアプリケーションウィンドウで確認されています。Ubuntu 12.04.3上のUnityデスクトップ環境では発生しません。

[#429686]

- 注意：ネットワーク障害などにより切断されたセッションで、再接続時に音量が最大化されることがあります。この問題は、Windowsの制限により発生します。現在、この問題を回避する方法はありません。

[#430160]

- Receiverの [環境設定] の変更は、新規または再接続セッションにのみ反映され、切断セッションには反映されません。たとえば、仮想デスクトップ上でCitrix GoToMeetingを開始し、GoToMeetingを実行したまま仮想デスクトップから切断した場合、 [環境設定] ダイアログボックスの [マイクとWebカメラ] ページで [マイクとWebカメラを使用する] を有効にしてもGoToMeetingセッションでWebカメラは使用できません。この問題を解決するには、そのセッション（この例ではGoToMeetingのセッション）を閉じてから再度起動してください。

[#430692]

- ターミナルでselfserviceを実行し、selfserviceを閉じる前にターミナルを閉じると、そのターミナルによりホストされたすべてのフォアグラウンドプロセスに通常の終了シグナルが送信されます。Service RecordやAuthentication Managerのデーモンなど、ほかのReceiverプロセスではこのシグナルが正しく処理されますが、selfserviceでは無視されます。このため、selfserviceが応答不能になることがあります。この問題を回避するには、1つのウィンドウ内でstorebrowseを使ってデーモンを起動して、その後でほかのウィンドウ内でselfserviceを実行してください。これにより、selfserviceを実行するターミナルウィンドウを閉じてでもデーモンがバックグラウンドで実行されるようになり、ユーザーインターフェイスも停止しません。

[#430697]

システム要件

Mar 23, 2018

デバイス

- glibcxx 3.4.15以降、glibc 2.11.3以降、gtk 2.20.1以降、libcap1またはlibcap2、およびudevをサポートするLinuxカーネルのVersion 2.6.29以降。
- セルフサービスユーザーインターフェイス用
 - libwebkitまたはlibwebkitgtk 1.0
 - libxml2 2.7.8
 - libxerces-c 3.1
- ALSA (libasound2)、Speex、およびVorbisコーデックライブラリ。
- Receiverのインストールには55MBのディスク空き容量が必要です。インストールパッケージの内容を抽出するには、110MBのディスク空き容量が必要です。ディスクの空き容量を確認するには、ターミナルウィンドウで次のコマンドを実行します。
df -k
- HDX MediaStream Flashリダイレクトを使用するSoC (system-on-a-chip) デバイスでは、1GB以上のRAMが必要です。
- 256色以上のビデオディスプレイ。
- TCP/IPネットワークシステム。

H.264

x86デバイスの場合、1.6GHz以上のプロセッサで一般的な解像度（1280×1024ピクセルなど）の単一モニターセッションが良好に表示されます。HDX 3D Pro機能を使用する場合は、ネイティブのハードウェアアクセラレーションをサポートするグラフィックドライバーと2GHz以上のプロセッサが必要です。

ARMデバイスで通常のH.264サポート機能およびHDX 3D Pro機能を使用する場合は、ハードウェアH.264デコーダーが必要です。より高速なプロセッサを使用することでパフォーマンスが向上します。

HDX MediaStream Flashリダイレクト

HDX MediaStream Flashリダイレクトの要件については、[CTX134786](#)を参照してください。

最新機能およびセキュリティ上の修正を活用するには、新しいバージョンを展開する前に、最新のプラグインをテストすることをお勧めします。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) の統合

CEIPが正しく動作するように、次のライブラリが必要です。

- zlib 1.2.3.3
- libtar 1.2以降
- libjson 7.6.1または最新バージョン

HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮

HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮の要件は以下のとおりです。

- Video4Linux互換Webカメラ
- ディストリビューションの「plugins-good」パッケージを含むGStreamer 0.10.25（または0.10.x以降）。
または、ディストリビューションの「plugins-base」、「plugins-good」、「plugins-bad」、「plugins-ugly」、

「gstreamer-libav」パッケージを含むGStreamer 1.0（または1.x以降）。

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクト

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクトの要件は以下のとおりです。

- ディストリビューションの「plugins-good」パッケージを含むGStreamer 0.10.25（または0.10.x以降）。一般的に、バージョン0.10.15以降はHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトをサポートします。
または、ディストリビューションの「plugins-base」、「plugins-good」、「plugins-bad」、「plugins-ugly」、「gstreamer-libav」パッケージを含むGStreamer 1.0（または1.x以降）。

注：GStreamerがLinuxディストリビューションに含まれていない場合、<http://gstreamer.freedesktop.org>からダウンロードできます。特定のコード（「plugins-ugly」のコードなど）の使用には、その製造元からのライセンスが必要な場合があります。使用するコードのライセンス要件については、社内の法務部門に確認してください。

ブラウザコンテンツリダイレクト

ブラウザコンテンツリダイレクトには次の要件があります。

- Linuxオペレーティングシステムwebkit2gtkバージョン2.16.6およびglibcxx 3.4.20以降。

Philips SpeechMike

Philips SpeechMikeデバイスをReceiverで使用する場合には、ユーザーデバイスに関連のドライバーをインストールする必要があります。必要な情報とソフトウェアのダウンロードについては、Philips社のWebサイトにアクセスしてください。

スマートカードのサポート

Citrix Receiver for Linuxでスマートカードのサポートを構成するには、スマートカード認証を許可するよう構成されたStoreFrontサービスサイトが必要です。

注意

注：Web Interface構成（以前のProgram Neighborhoodエージェント）用のXenApp Servicesサイト、またはStoreFrontサーバーにより提供できる「従来のProgram Neighborhoodエージェント」サイトでは、スマートカードはサポートされません。

Citrix Receiver for Linuxは、PCSC-Liteと互換性があるスマートカードリーダーおよび適切なLinuxプラットフォーム用のPKCS#11ドライバーがあるスマートカードをサポートします。Receiver for Linuxはデフォルトで、標準の場所のいずれかでopensc-pkcs11.soを見つけることができようになりました。Receiver for Linuxが確実に標準以外の場所でopensc-pkcs11.soを見つけるか、別のPKCS#11ドライバーを見つけるには、次の手順に従って構成ファイル内に場所を保存します。

1. 次の構成ファイルにアクセスします：\$ICAROOT/config/AuthManConfig.xml
2. 行PKCS11moduleに移動し、この行のすぐ後でドライバーの場所をエレメントに追加します。
注：ドライバーの場所のファイル名を入力すると、Receiverは\$ICAROOT/PKCS#11ディレクトリ内のそのファイルに移動します。または、"/"から始まる絶対パスを使用できます。

スマートカードを取り出した場合のCitrix Receiver for Linuxの動作を構成するには、次の手順に従って構成ファイルでSmartCardRemovalActionを更新します。

1. 次の構成ファイルにアクセスします： SICAROOT/config/AuthManConfig.xml
2. 行SmartCardRemovalActionに移動し、この行のすぐ後で'noaction'または'forcelogoff'をエレメントに追加します。

デフォルトの設定は'noaction'です。この場合、スマートカード上で削除を実行する時に、保存されている資格情報やスマートカードに関して生成されるトークンはクリアされません。'forcelogoff'を追加すると、スマートカードの削除時にすべての資格情報およびStoreFront内のトークンがクリアされます。

Citrixサーバー

- XenApp : 現在サポートされているすべてのバージョン。詳しくは、[製品のマトリックス](#)を参照してください。
- XenDesktop : 現在サポートされているすべてのバージョン。詳しくは、[製品のマトリックス](#)を参照してください。
- VDI-in-a-Box : 現在サポートされているすべてのバージョン。詳しくは、[製品のマトリックス](#)を参照してください。
- StoreFront Receiver for WebとWeb Interfaceとともに、NetScaler GatewayのプラグインがあってもなくてもCitrix Receiver for Linux 13.5のブラウザベースのアクセスを実行できます。

StoreFront :

- StoreFront 3.x、2.6、2.5、2.1
StoreFrontストアへの直接アクセスを提供します。
- Citrix Receiver for Webサイトが構成されたStoreFront
StoreFrontストアへのWebブラウザからのアクセスを提供します。この場合の制限事項については、[Receiver for Webサイト](#)の「重要な注意事項」を参照してください。

NetScaler VPNクライアントを使用する場合のWeb Interface :

- Web Interface 5.4.x for WindowsのWebサイト。
デスクトップやアプリケーションへのWebブラウザからのアクセスを提供します。
- XenApp ServicesサイトまたはXenDesktop Webサイトを構成したWeb Interface 5.4 for Linux
- Citrix Receiverをユーザーに配布する方法：
 - ユーザーによるreceiver.citrix.comからのダウンロードを有効にして、StoreFrontとともにメールまたはサービスアドレスの使用を構成します。
 - Citrix Receiver for Webサイト (StoreFrontと共に構成済み) からのインストールを提供します。
 - Citrix Web Interface 5.4からのReceiverのインストールを提供します。

Webブラウザ

最新バージョンのMozilla FirefoxまたはGoogle Chromeを使用してください。

注 : Google Chrome NPAPIサポートへの変更について詳しくは、Citrixのブログアールティクル [Citrix Preparing for NPAPI being disabled by Google Chrome](#)を参照してください。

接続性

Citrix Receiver for Linuxでは、以下の構成のいずれかを介して、HTTP、HTTPS、およびICA-over-TLS接続を確立できます。

- LAN接続の場合：
 - StoreFront ServicesサイトまたはCitrix Receiver for Webサイトを使用するStoreFront。
 - Web InterfaceサイトまたはXenApp Serviceサイトを使用するWeb Interface 5.4 for Windows。
- セキュリティ保護されたリモートまたはローカルの接続の場合：
 - Citrix NetScaler Gateway 12.0
 - Citrix NetScaler Gateway 11.1
 - Citrix NetScaler Gateway 11.0

- Citrix NetScaler Gateway 10.5
- Citrix NetScaler Gateway 10.1
- Citrix Access Gateway Enterprise Edition 10
- Citrix Access Gateway Enterprise Edition 9.x
- Citrix Access Gateway VPX

StoreFrontでサポートされるNetScaler GatewayおよびAccess Gatewayのバージョンについては、StoreFrontの「[システム要件](#)」を参照してください。

注：このトピックに記載されているNetScaler Gatewayについての説明は、特に注記のない限りはAccess Gatewayにも該当します。

セキュリティが保護された接続と証明書について

注：セキュリティ証明書については、「[セキュリティで保護された接続](#)」および「[セキュリティで保護された通信](#)」を参照してください。

プライベート（自己署名）証明書

リモートゲートウェイにプライベート証明書がインストールされている場合は、組織の証明機関のルート証明書をユーザーデバイスにインストールしないと、Citrix ReceiverでCitrixリソースにアクセスできません。

注：接続時にリモートゲートウェイの証明書を検証できない場合（ローカルのキーストアにルート証明書が含まれていないため）、信頼されていない証明書のエラーメッセージが表示されます。ルート証明書をクライアントの証明書ストアにインストールする必要があります。

ユーザーデバイスへのルート証明書のインストール

ユーザーデバイスへのルート証明書のインストール、およびWeb Interfaceでの証明書設定については、「[Receiver通信のセキュリティ保護](#)」を参照してください。

ワイルドカード証明書

ワイルドカード証明書は、同一ドメイン内の任意のサーバーで個別のサーバー証明書の代わりに使用します。Citrix Receiver for Linuxはワイルドカード証明書をサポートしますが、組織のセキュリティポリシーに従って使用する必要があります。実際には、サブジェクトの別名（SAN）拡張内のサーバー名の一覧に含まれている証明書などのワイルドカード証明書に代わるものを考慮が必要なことがあります。こういった証明書は、私的証明機関および公的証明機関の両方が発行できます。

中間証明書とNetScaler Gateway

証明書チェーンに中間証明書が含まれる場合は、中間証明書をNetScaler Gatewayのサーバー証明書に追加する必要があります。詳しくは、「[中間証明書の構成](#)」を参照してください。

サーバー証明書検証ポリシー

Citrix Receiver for Linuxには、サーバー証明書に関する厳格な検証ポリシーがあります。

Important

このバージョンのCitrix Receiver for Linuxをインストールする前に、サーバーまたはゲートウェイの証明書が、ここで説明されているように正しく構成されていることを確認してください。以下の場合、接続できないことがあります。

- サーバーまたはゲートウェイの構成に不適切なルート証明書が含まれている

- サーバーまたはゲートウェイの構成にすべての中間証明書が含まれていない
- サーバーまたはゲートウェイの構成に有効期限切れの証明書や無効な中間証明書が含まれている
- サーバーまたはゲートウェイの構成にクロスルート用中間証明書が含まれている

Citrix Receiver for Linuxは、サーバー証明書を検証する時にサーバー（またはゲートウェイ）が提供するすべての証明書を使用するようになりました。以前のCitrix Receiver for Linuxリリース同様、証明書が信頼済みかについても確認します。すべての証明書が信頼済みでない場合、接続に失敗します。

このポリシーは、Webブラウザの証明書ポリシーより厳格です。多くのWebブラウザには、多数の信頼済みのルート証明書セットが含まれます。

サーバー（またはゲートウェイ）は、正しい証明書セットで構成する必要があります。不正な証明書のセットを使用すると、Citrix Receiver for Linuxの接続に失敗することがあります。

以下は、ゲートウェイがこのような有効な証明書で構成されていることを前提としています。この構成は、Citrix Receiver for Linuxで使用されるルート証明書を正確に確認するために、より厳格な検証が必要なユーザーにお勧めします。

- 「サーバー証明書サンプル」
- 「中間証明書サンプル」
- 「ルート証明書サンプル」

次に、Citrix Receiver for Linuxはこれらすべての証明書が有効であることを確認します。Citrix Receiver for Linuxが「ルート証明書サンプル」を信頼済みであることも確認します。Citrix Receiver for Linuxが「ルート証明書サンプル」を信頼していない場合、接続に失敗します。

Important

証明機関によっては、複数のルート証明書があります。このような、より厳格な検証が必要であれば、構成で適切なルート証明書が使用されていることを確認してください。たとえば、現在同じサーバー証明書を検証できる2つの証明書（「DigiCert」/「GTE CyberTrust Global Root」および「DigiCert Baltimore Root」/「Baltimore CyberTrust Root」）があるとします。ユーザーデバイスによっては、両方のルート証明書が使用できます。その他のデバイスでは、1つの証明書のみを使用できます（「DigiCert Baltimore Root」/「Baltimore CyberTrust Root」）。ゲートウェイで「GTE CyberTrust Global Root」を構成すると、これらのユーザーデバイスでCitrix Receiver for Linuxの接続に失敗します。どのルート証明書を使用すべきかについては、証明機関のドキュメントを参照してください。また、ルート証明書の有効期限についても注意してください。

注意

サーバーやゲートウェイによっては、ルート証明書が構成されていても、送信しないことがあります。この場合、より厳格な検証は機能しません。

以下は、ゲートウェイがこのような有効な証明書で構成されていることを前提としています。通常は、このルート証明書をイ略した構成が推奨されます。

- 「サーバー証明書サンプル」
- 「中間証明書サンプル」

Citrix Receiver for Linuxはこれら2つの証明書を使用します。次に、ユーザーデバイスでルート証明書を検索します。正しく検証される証明書が見つかり、信頼済みである場合（「ルート証明書サンプル」など）、接続は成功します。信頼済みの証明書が見つからない場合は、失敗します。この構成では、Citrix Receiver for Linuxが必要とする中間証明書が提供されますが、Citrix Receiver for Linuxは任意の有効な、信頼済みのルート証明書を選択できます。

以下は、ゲートウェイがこのような証明書で構成されていることを前提としています。

- 「サーバー証明書サンプル」
- 「中間証明書サンプル」
- 「不正なルート証明書」

Webブラウザーは、不正なルート証明書を無視することがありますが、Citrix Receiver for Linuxは不正なルート証明書を無視しないため、接続は失敗します。

証明機関によっては、複数の中間証明書を使用します。この場合、ゲートウェイは通常、以下のようにすべて中間証明書（ルート証明書ではない）で構成されます。

- 「サーバー証明書サンプル」
- 「中間証明書サンプル1」
- 「中間証明書サンプル2」

Important

証明機関によっては、クロスルート用中間証明書を使用します。これは、複数のルート証明書があり、以前のルート証明書が最新のルート証明書と同時に使用中の状況を想定しています。この場合、少なくとも2つの中間証明書が存在します。たとえば、以前のルート証明書「Class 3 Public Primary Certification Authority」には、関連するクロスルート用中間証明書「VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority - G5」があります。ただし、最新のルート証明書「VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority - G5」も利用可能であり、「Class 3 Public Primary Certification Authority」に置き換わります。このルート証明書はクロスルート用中間証明書を使用しません。

注意

クロスルート用中間証明書およびルート証明書は、同じサブジェクト名（発行先）ですが、クロスルート中間証明書には異なる発行者名（発行元）があります。これによって、クロスルート用中間証明書と通常の間接証明書（「中間証明書サンプル2」など）を区別できます。

通常は、このルート証明書およびクロスルート用中間証明書を省略した構成が推奨されます。

- 「サーバー証明書サンプル」
- 「中間証明書サンプル」

クロスルート用中間証明書をゲートウェイで構成しないでください。これは、ゲートウェイで以前のルート証明書が選択されるようになるのを避けるためです。

- 「サーバー証明書サンプル」
- 「中間証明書サンプル」
- 「クロスルート用中間証明書」（非推奨）

ゲートウェイでサーバー証明書のみを構成しないでください。

- 「サーバー証明書サンプル」

この場合、Citrix Receiver for Linuxはすべての中間証明書を検出できないため、接続に失敗します。

ユーザー側の要件

Citrix Receiver for Linuxをインストールするためにスーパーユーザー（root）としてログオンする必要はありません。ただし、USBサポートを有効にするには、スーパーユーザーとしてReceiverをインストールおよび構成してください。スーパーユーザー以外のユーザーとしてReceiverをインストールした場合でも、サポートされているWebブラウザでStoreFrontを使用したりReceiverのネイティブインターフェイスを使用したりして公開リソースにアクセスできます。

システム要件を満たしているかどうかのチェック

Citrixは、Receiverインストールパッケージの一部としてhdxcheck.shスクリプトを提供します。このスクリプトはReceiver for Linuxのすべての機能を実行できるようにするため、デバイスがすべてのシステム要件を満たしているかどうかをチェックします。このスクリプトは、インストールパッケージのUtilitiesディレクトリにあります。

hdxcheck.shスクリプトを実行するには

1. ターミナルウィンドウを開きます。
2. cd \$ICAROOT/utilと入力してEnterキーを押し、インストールパッケージのUtilitiesディレクトリに移動します。
3. ./hdxcheck.shと入力してスクリプトを実行します。

インストールとセットアップ

Mar 23, 2018

Citrix Receiver for Linuxのインストールは、以下のパッケージを使用して行います。これらのパッケージは、[Citrix Webサイト](#)のダウンロード用ページからダウンロードできます。

| パッケージ名 | コンテンツ |
|---|---|
| Debianパッケージ (Ubuntu、Debian、Linux Mintなど) | |
| icaclient_13.9.1.6_amd64.deb | セルフサービスサポート、64ビットx86_64 |
| icaclient_13.9.1.6_i386.deb | セルフサービスサポート、32ビットx86 |
| icaclient_13.9.1.6_armhf.deb | セルフサービスサポート、ARM HF |
| icaclientWeb_13.9.1.6_amd64.deb | Web Receiverのみ、64ビットx86_64 |
| icaclientWeb_13.9.1.6_i386.deb | Web Receiverのみ、32ビットx86 |
| icaclientWeb_13.9.1.6_armhf.deb | Web Receiverのみ、ARM HF |
| ctxusb_2.7.6_amd64.deb | USBパッケージ、64ビットx86_64 |
| ctxusb_2.7.6_i386.deb | USBパッケージ、32ビットx86 |
| ctxusb_2.7.6_armhf.deb | USBパッケージ、ARM HF |
| Redhatパッケージ (Redhat、SUSE、Fedoraなど) | |
| ICAClient-rhel-13.9.1.6-0.x86_64.rpm | セルフサービスサポート、RedHat (Linux VDAを含む) ベース、64ビットx86_64 |
| ICAClient-rhel-13.9.1.6-0.i386.rpm | セルフサービスサポート、RedHatベース、32ビットx86 |
| ICAClientWeb-rhel-13.9.1.6-0.x86_64.rpm | Web Receiverのみ、RedHatベース、64ビットx86_64 |

| | |
|--|--|
| ICAClientWeb-rhel-13.9.1.6-0.i386.rpm | Web Receiverのみ、RedHatベース、32ビットx86 |
| ICAClient-suse-13.9.1.6-0.x86_64.rpm | セルフサービスサポート、SUSEベース、64ビットx86_64 |
| ICAClient-suse-13.9.1.6-0.i386.rpm | セルフサービスサポート、SUSEベース、32ビットx86 |
| ICAClient-suse11sp3-13.9.1.6-0.x86_64.rpm | セルフサービスサポート、SUSE 11 sp3 (Linux VDAを含む) ベース、64ビットx86_64 |
| ICAClient-suse11sp3-13.9.1.6-0.i386.rpm | セルフサービスサポート、SUSE 11 sp3ベース、32ビットx86 |
| ICAClientWeb-suse-13.9.1.6-0.x86_64.rpm | Web Receiverのみ、SUSEベース、64ビットx86_64 |
| ICAClientWeb-suse-13.9.1.6-0.i386.rpm | Web Receiverのみ、SUSEベース、32ビットx86 |
| ctxusb-2.7.6-1.x86_64.rpm | USBパッケージ、64ビットx86_64 |
| ctxusb-2.7.6-1.i386.rpm | USBパッケージ、32ビットx86 |
| Tarball (任意のディストリビューション用のスクリプトインストール) | |
| linuxx64-13.9.1.6.tar.gz | 64ビットIntel |
| linuxx86-13.9.1.6.tar.gz | 32ビットIntel |
| linuxarmhf-13.9.1.6.tar.gz | ARM HF |

Web Receiverをサポートするパッケージとセルフサービスをサポートするパッケージの違いは、後者にはWeb Receiverに必要なコンポーネントに加えてセルフサービスに必要なコンポーネントが含まれている点です。セルフサービスに必要なコンポーネントは、Web Receiverに必要なコンポーネントのスーパーセットですが、インストールされるファイルは同一です。

Web Receiverのサポートのみが必要である場合、または使用するディストリビューションにセルフサービスをサポートするために必要なパッケージが存在しない場合は、Web Receiverのみのパッケージをインストールします。

注意

可能な場合は、DebianパッケージまたはRPMパッケージを使用してCitrix Receiverをインストールしてください。これらのファイル

は、必要なすべてのパッケージが自動的にインストールされるため、一般的には取り扱いがより簡単です。特定のディレクトリに Citrix Receiver をインストールする場合は、Tarball パッケージを使用します。

同じマシンで両方のインストール方法を使用しないでください。例えば、既に Debian パッケージから Citrix Receiver for Linux をインストールしたマシン上で、Tarball パッケージから Citrix Receiver for Linux をインストールした場合、エラーメッセージや不要な動作が発生する可能性があります。

Debian パッケージから Citrix Receiver for Linux をインストールするには

Ubuntu 上に Receiver を Debian パッケージでインストールする場合は、Ubuntu ソフトウェアセンターでパッケージを開くと便利です。

以下の手順で、**packagename** に実際のインストールパッケージの名前を指定します。

このプロシージャではコマンドラインと Ubuntu/Debian/Mint 用のネイティブパッケージマネージャーを使用します。また、ファイルブラウザでダウンロードした .deb パッケージをダブルクリックしてパッケージをインストールすることもできます。通常、これによりパッケージマネージャーが起動して、必要なソフトウェアが自動的にダウンロードされます。パッケージマネージャーを使用できない場合は、同様の機能を持つコマンドラインツール、**gdebi** を使用することをお勧めします。

コマンドラインを使ってパッケージをインストールするには

1. スーパーユーザー (root) としてログオンします。
2. ターミナルウィンドウを開きます。
3. 「**gdebi packagename.deb**」と入力して、次の3つのパッケージのインストールを実行します。次に例を示します。
 - gdebi icaclient_13.9.1.6_amd64.deb
 - gdebi icaclientWeb_13.9.1.6_i386.deb
 - gdebi ctxusb_2.7.6_amd64.deb

注：上記の例で dpkg を使用するには、「gdebi」を「dpkg -i」に変更します。

icaclient パッケージまたは icaclientWeb パッケージをインストールする必要があります。必要に応じて、ctxusb パッケージで汎用 USB リダイレクトをサポートします。

4. dpkg を使用する場合、「**sudo apt-get -f install**」と入力して、必要な従属ソフトウェアをインストールします。
5. エンドユーザーライセンス契約に同意します。

RPM パッケージから Citrix Receiver for Linux をインストールするには

Citrix Receiver を SUSE の RPM パッケージからインストールしている場合は、RPM ユーティリティではなく、YaST または Zypper ユーティリティを使用します。RPM ユーティリティは必要な従属ソフトウェアを一切ダウンロードまたはインストールしません。.rpm パッケージのみをインストールします。必要な従属ソフトウェアが見つからない場合、エラーが発生します。

注：RPM パッケージを使ったインストールの例を見るには、Citrix Blog の記事『[Installing Citrix Receiver for Linux 13.2.1 on SUSE Linux Enterprise Desktop](#)』を参照してください。

以下の手順で、**packagename** に実際のインストールパッケージの名前を指定します。

注：Red Hatベースのディストリビューション（RHEL、CentOS、Fedora、ほか）でインストール“... requires libwebkitgtk-1.0.so.0”ということを示すエラーが表示される場合、見つからないパッケージを提供できるEPELレポジトリ（詳しくは、<https://fedoraproject.org/wiki/EPEL>で参照できます）を追加するか、パッケージのWebバリエーションに切り替えます。

Red HatでEPELレポジトリをセットアップするには

1. 以下から適切なソースRPMパッケージをダウンロードします。

https://fedoraproject.org/wiki/EPEL#How_can_I_use_these_extra_packages.3

2. 例：Red Hat Enterprise 7.xの場合。

```
yum localinstall epel-release-latest-7 .noarch.rpm
```

ヒント：RPM Package Managerでは、必要なソフトウェアが自動的にダウンロードされません。必要なソフトウェアをダウンロードしてインストールするには、コマンドラインで**zypper install**（OpenSUSE）または**yum localinstall**（Fedora/Red Hat）を使用することをお勧めします。

EPELレポジトリをセットアップ後、RPMパッケージからReceiverをインストールします

1. スーパーユーザー（root）としてログオンします。

2. 「zypper in packagename.rpm」と入力して、次の3つのパッケージのインストールを実行します。

注：icaclientパッケージまたはicaclientWebパッケージをインストールする必要があります。必要に応じて、ctxusbパッケージで汎用USBリダイレクトをサポートします。

3. ターミナルウィンドウを開きます。

SUSEインストールの場合：

```
zypper in ICAClient-suse-13.9.1.6-0.x86_64.rpm
```

```
zypper in ICAClient-suse-13.9.1.6-0.i386.rpm
```

```
zypper in ctxusb-2.7.6-1.x86_64.rpm
```

Red Hatインストールの場合：

```
yum localinstall ICAClient-rhel-13.9.1.6-0.i386.rpm
```

```
yum localinstall ICAClientWeb-rhel-13.9.1.6-0.i386.rpm
```

```
yum localinstall ctxusb-2.7.6-1.i386.rpm
```

4. エンドユーザーライセンス契約に同意します。

Tarballパッケージから**Citrix Receiver for Linux**をインストールするには

注：Tarballパッケージは依存関係のチェックまたは依存関係のインストールを実行しません。すべてのシステムの依存関係は、別個に解決される必要があります。

1. ターミナルウィンドウを開きます。

2. .tar.gzファイルを展開して、その内容を一時ディレクトリに保存します。たとえば次のように入力します。tar xvfz packagename.tar.gz。

3. 「./setupwfc」と入力してEnterキーを押し、セットアッププログラムを実行します。

4. デフォルトの1 (Receiverのインストール) を選択してEnterを押します。
5. 必要なインストールディレクトリのパスおよび名前を入力してEnterキーを押します。インストールディレクトリを指定せずにEnterキーを押すと、デフォルトの場所にReceiverがインストールされます。

スーパーユーザー (root) のデフォルトのインストールディレクトリは、/opt/Citrix/ICAClientです。

非スーパーユーザーのデフォルトのインストールディレクトリは、\$HOME/ICAClient/platformです。platformは、システムにより生成されるオペレーティングシステムIDです。例：\$HOME/ICAClient/linuxx86 for the Linux/x86 platform

注：デフォルトのインストール先以外のディレクトリにインストールする場合は、\$HOME/.profileまたは\$HOME/.bash_profileの\$ICAROOTにそのディレクトリを設定します。

6. インストールを続行するには、「y」を入力し、Enterキーを押します。
7. Receiverをデスクトップ環境に統合するかどうかを選択できます。これにより、Citrix Receiverを起動するためのメニューオプションがデスクトップ環境に作成されます。「y」と入力すると、デスクトップ統合が有効になります。
8. GStreamerがインストール済みの場合は、GStreamerをReceiverに統合してHDX Mediastreamマルチメディアアクセラレーションをサポートするかどうかを選択できます。Receiverを統合する場合は、「y」と入力します。

注：一部のプラットフォームにおいては、tar形式の配布からクライアントをインストールすると、KDEおよびGNOMEへの統合を求めるプロンプトが表示された後でシステムがハングすることがあります。この問題は、gstreamer-0.10を初めて初期化する場合に発生します。この問題が発生した場合、(ctrl+cを用いて) インストール処理を中断して、コマンド **gst-inspect-0.10 --gst-disable-registry-fork --version** を実行します。このコマンドを実行後、システムがハングすることなくtar形式のセットアップを再実行できるようになります。

9. スーパーユーザー (root) としてログオンしている場合、XenDesktopおよびXenApp公開VDIアプリケーションのUSBサポートのインストールを選択できます。「y」と入力すると、USBサポートがインストールされます。

注：スーパーユーザー (root) としてログオンしていない場合、次の警告が表示されます。「USB support cannot be installed by non-root users. Run the installer as root to access this install option. (root以外のユーザーはUSBサポートをインストールできません。この機能を使用する場合は、スーパーユーザーとしてインストーラーを実行してください。)」

10. インストールが完了すると、メインのインストールメニューに戻ります。セットアッププログラムを終了するには、「3」を入力してEnterキーを押します。

Citrix Receiver for Linuxのインストールのカスタマイズ

Sep 19, 2017

Citrix Receiverパッケージのコンテンツを変更しファイルを再パッケージして、インストール前にReceiver構成をカスタマイズできます。この変更パッケージを使用してインストールするすべてバージョンにこの変更が含まれます。

Citrix Receiver for Linuxのインストールをカスタマイズするには

1. Citrix Receiverパッケージファイルを空のディレクトリに展開します。パッケージファイルは、platform.major.minor.release.build.tar.gzの形式です（たとえばLinux/x86プラットフォームの場合ならlinuxx86.13.2.0.nnnnnn.tar.gとなります）。
2. Citrix Receiverパッケージに必要な変更を加えます。たとえば、標準のReceiverのインストールには含まれていない発行機関からの証明書を使用する場合は、新しいTLSルート証明書をパッケージに追加します。新しいTLSルート証明書をパッケージに追加する方法については、Citrix製品ドキュメントサイトの「
—ユーザーデバイスへのルート証明書のインストール
」を参照してください。Receiverに付属の証明書については、Citrix製品ドキュメントサイトの「
—SSLおよびTLSの構成と有効化
」を参照してください。
3. PkgIDファイルを開きます。
4. パッケージが変更されたことを意味する次の行を追加します。MODIFIED=traceinfoは、誰がいつ変更したかの情報を示します。この情報の形式は、任意のものにできます。
5. ファイルを保存して閉じます。
6. パッケージファイルの一覧platform/platform.psf（たとえばLinux/x86プラットフォームの場合ならlinuxx86/linuxx86.psf）を開きます。
7. パッケージファイルの一覧を更新して、パッケージに対する変更を適用します。このファイルを更新しない場合、新しいパッケージのインストール時にエラーが起こることがあります。変更には、修正したファイルのサイズの更新、またはパッケージに追加したファイルに対する新しい行の追加などを含めることができます。パッケージファイルの一覧に含まれている列には次のようなものがあります。
 - ファイルタイプ
 - 相対パス
 - サブパッケージ（corから編集不可）
 - 権限
 - 所有者
 - グループ
 - サイズ
8. ファイルを保存して閉じます。
9. tarコマンドを使用して、Receiverパッケージファイルを再構築します。例：tar czf ../newpackage.tar.gz * newpackageは、新しいReceiverパッケージファイルの名前です。

Citrix Receiver for Linuxの起動

Mar 07, 2018

Citrix Receiverは、ターミナルプロンプト、またはサポートされているデスクトップ環境を使って起動できます。

Citrix Receiverをデフォルトのインストールディレクトリにインストールしなかった場合は、環境変数ICAROOTに実際のインストール先ディレクトリを指定しておく必要があります。

ヒント

以下の手順は、Webパッケージによるインストールや、Tarballを使用したにもかかわらずセルフサービス要件が満たされなかった場合は適用されません。

コマンドウィンドウでCitrix Receiverを起動するには

ターミナルプロンプトで、`/opt/Citrix/ICAClient/selfservice`と入力し、Enterキーを押します（ここで`/opt/Citrix/ICAClient`は、Citrix Receiverをインストールしたディレクトリです）。

LinuxデスクトップからCitrix Receiverを起動するには

ファイルマネージャーを使ってLinuxデスクトップ環境からCitrix Receiverを起動できます。

一部のデスクトップでは、メニューからCitrix Receiverを起動することもできます。Linuxのディストリビューションにより、Receiverを起動するためのメニューの位置が異なる場合があります。

Citrix Receiver for LinuxをICA-to-Xプロキシとして使用する

Sep 19, 2017

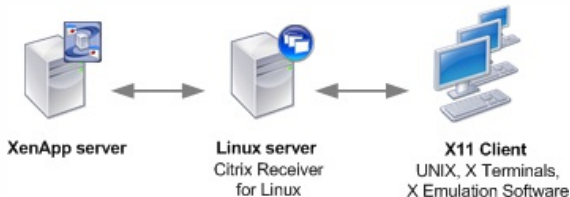
Citrix Receiverを実行しているワークステーションをサーバーとして使用し、出力を別のX11対応デバイスに転送できます。Citrix Receiverを使用できないX端末またはUNIXワークステーションにMicrosoft Windows用アプリケーションを配信する場合などに、この方法を使います。

注意

Citrix Receiverソフトウェアは多くのXデバイスで使用できるので、このデバイスへのソフトウェアのインストールはこの方法を使用することをお勧めします。Citrix ReceiverをICA-to-Xプロキシとして実行することを、サーバー側ICAとも呼びます。

この方法では、実行するCitrix ReceiverをICAからX11へのコンバーターとして使うことで、X11の出力をローカルのLinuxデスクトップ画面に転送します。また、その出力をさらに別のX11コンピューターの画面に転送できます。つまり、1つのシステムで複数のCitrix Receiverのコピーを同時に実行し、それぞれの出力を別の異なるデバイスに送信できます。

この図は、Citrix Receiver for LinuxがICA-to-Xプロキシとして動作するシステムを示しています。



この方法を使うようにシステムを設定するには、LinuxサーバーをICAからX11へのプロキシサーバーとして機能させる必要があります。

- X端末が既にある場合は、XアプリケーションをX端末に供給するLinuxサーバーでCitrix Receiverを実行できます。
- Citrix Receiverを使用できないUNIXワークステーションにアプリケーションを配布する場合は、プロキシサーバーとして機能するサーバーが1台必要です。たとえば、Linuxを実行しているPCをプロキシサーバーとして使用できます。

サポートされる機能

アプリケーションは、ICAプロトコルの機能を使用して、X11の最終デバイスに提供されます。デフォルトで、プロキシサーバー上のドライブにアクセスするには、ドライブマッピング機能を使う方法しかありません。（通常はローカルドライブがけい）X端末を使用している場合は、これは問題ありません。ほかのUNIXワークステーションにアプリケーションを配布する場合は、次のいずれか実行できます。

- ローカルのUNIXワークステーションをNFSを使ってプロキシサーバーにマウントし、プロキシサーバー上のNFSマウントポイントをクライアントドライブとしてマップしてアクセスする。
- SAMBAなどのNFSからSMBへのプロキシサーバー、またはMicrosoft Services for UNIXなどのサーバー上のNFSクライアントを使用する。

次の機能は、最終デバイスに提供されません。

- USBリダイレクト
- スマートカードリダイレクト

- COMポートリダイレクト
- プロキシとして機能するサーバーがオーディオをサポートしている場合でも、X11デバイスではオーディオを使用できません。
- クライアントプリンターは、X11デバイスでは使用できません。LPD印刷機能を使ってサーバーからUNIXプリンターに手動でアクセスするか、ネットワークプリンターを使用する必要があります。
- マルチメディア入力のリダイレクトは機能しません。これは、Citrix Receiverを実行しているマシン上でサーバーがプロキシとして機能するためにはWebカメラが必要なためです。GStreamerがインストールされたサーバーがプロキシとして機能するため、マルチメディア出力のリダイレクトは機能します（未テスト）。

X端末またはUNIXワークステーションからCitrix Receiverをサーバー側ICAとして起動するには

1. sshまたはtelnetを使って、プロキシとして動作しているデバイスに接続します。
2. プロキシデバイスのシェルで、**DISPLAY**環境変数をローカルデバイスに設定します。たとえば、Cシェルでは、次のように入力します。
setenv DISPLAY <local:0>

注：コマンドssh -Xを使ってプロキシとして動作するデバイスに接続する場合は、**DISPLAY**環境変数を設定する必要はありません。

3. ローカルデバイスのコマンドプロンプトで、次のように入力します。xhost <proxy server name>
4. Receiverをデフォルトのインストールディレクトリにインストールしない場合は、環境変数ICAROOTに実際のインストール先ディレクトリを指定しておく必要があります。
5. Citrix Receiverがインストールされているディレクトリを探します。コマンドラインで、selfservice &と入力します。

Customer Experience Improvement Program (CEIP) を構成するには

Sep 19, 2017

Citrixのカスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) に参加すると、匿名の統計および使用状況情報が、Citrix製品の品質およびパフォーマンスを向上させる目的で送信されます。CEIPについて詳しくは、『[Citrixカスタマーエクスペリエンス向上プログラム \(CEIP\) について](#)』を参照してください。

Citrix Receiver for Linuxをインストールすると、CEIPに自動的に登録されます。Receiverのインストールからおよそ7日後に、初回のデータアップロードが行われます。収集されたアクティブユーザーのデータは、7日ごとにCISサーバーにアップロードされます。

CEIPへの登録を制御するレジストリ設定：

- 場所：/config/module.ini
- セクション：CEIP
- エントリ：EnableCeip
- 値：有効 (デフォルト) /無効

次の匿名情報が収集されます。データでは、お客様を特定するすべての詳細は含まれません。EnableCeipをDisableに設定すると、Receiverのバージョン情報のみが収集されます。

| Data point | Description |
|---------------------|--|
| マシンID | データの発生元のマシンを識別 |
| Linuxカーネルのバージョン | マシンのカーネルバージョンを示す文字列 |
| Linux OSの名前およびバージョン | マシンのLinux OSの名前とバージョンを示す文字列 |
| データ収集日 | データの取り込みが完了した日付を示す |
| CPUモデル名 | クライアントマシンのCPUモデルを示す |
| システムメモリ情報 | 合計RAM、空きRAM、バッファRAM、共有RAM、合計スワップ、空きスワップ、現在のプロセスの数などシステムメモリの情報を収集 |
| モニターの解像度 | クライアントマシンのモニター解像度を取得 |
| デスクトップ環境 | 現在使用されているデスクトップ環境の種類がXDG_CURRENT_DESKTOPかDESKTOP_SESSIONかについて詳細を取得 |
| ブラウザのバージョン | 現在使用されているブラウザについての情報 (firefox、chromeなど) を取得 |

| Data points 情報 | Description システムで使用可能なUSBポートについての情報を取得 |
|-----------------------|---|
| Flashのバージョン | 使用されているFlashのバージョンについての情報を取得 |
| ロケールのバージョン | ロケールのバージョンを示す |
| 言語情報 | キーボードのマッピングとその情報の取得 |
| スキーマ情報 | Receiverスキーマ情報を取得 |
| マルチメディアリダイレクト | この機能が有効か無効かを示すブール値 |
| Webカメラリダイレクト | Webカメラリダイレクトが有効か無効かを示すブール値 |
| Flashリダイレクト | Flashリダイレクトが有効か無効かを示すブール値 |
| MediaStream | MediaStream機能が有効か無効かを示すブール値。これにはSpeedScreenオーディオおよびビデオ機能も含まれます。 |

Citrix Receiver for Linuxをアンインストールするには

Sep 19, 2017

以下の手順は、Tarballパッケージでテストされています。RPMおよびDebianパッケージの場合は、オペレーティングシステム側の標準的なツールを使用してアンインストールしてください。

環境変数ICAROOTはクライアントのインストールディレクトリに設定する必要があります。非スーパーユーザーのデフォルトのインストールディレクトリは、\$HOME/ICAClient/platformです。ここで、platform変数はシステムにより生成されるオペレーティングシステムIDです。例：Linux/x86プラットフォームの場合、\$HOME/ICAClient/linuxx86。権限を持つユーザーのインストールは、デフォルトが/opt/Citrix/ICAClientです。

1. \$ICAROOT/setupwfcと入力してEnterキーを押し、セットアッププログラムを起動します。
2. Citrix Receiver for Linuxをアンインストールするには、2と入力してEnterキーを押しします。

注意

Citrix Receiver for Linuxをアンインストールするには、インストール時と同じユーザーアカウントでシステムにログオンする必要があります。

接続

Sep 19, 2017

Citrix Receiverにより、仮想デスクトップやアプリケーションへの安全なセルフサービスアクセスと、Windows、Web、およびSaaS (Software as a Service) アプリケーションへのオンデマンドアクセスが提供されます。ユーザーのアクセスは、Citrix StoreFrontや従来のWeb InterfaceのWebページにより管理されます。

Citrix Receiverのユーザーインターフェイスを使用してリソースに接続するには

Citrix Receiverのホームページには、ユーザーのアカウント設定（つまり接続先のサーバー）とCitrix XenDesktopまたはCitrix XenAppの管理者による構成に基づいて、そのユーザーに提供されている仮想デスクトップやアプリケーションが表示されます。ユーザーは、[環境設定] ダイアログボックスの[アカウント] ページにStoreFrontサーバーのURLや自分のメールアドレス（メールアドレスによるアカウント検出が有効な場合）を入力してアカウントの構成を行います。

ヒント

StoreFrontサーバーの複数のストアに同じ名前を使用する場合、数字を追加することで重複を防ぐことができます。このようなストアの名前は追加する順番に従います。Program Neighborhoodエージェントの場合、ストアURLが表示され、ストアを確実に識別します。

ストアへの接続後、セルフサービスで次のタブが表示されます。お気に入り、デスクトップ、アプリケーション。セッションを起動するには、適切なアイコンをクリックします。アイコンを[お気に入り]に追加するには、アイコンの横の[詳細] リンクをクリックして[お気に入りに追加]を選択します。

コネクション設定の構成

Citrix Receiverと、XenAppおよびXenDesktopサーバー間の接続に対する数々のデフォルトの設定を構成できます。また必要に応じて、個々のコネクションに対する設定を変更することもできます。

このセクションの以降のトピックでは、Citrix Receiverのユーザーが実行する一般的な操作の手順について説明します。管理者とユーザーの作業と責任範囲は重複することがありますが、ここでは一般的にユーザーが行う操作について「ユーザー」という用語を使用して区別します。

- [コマンドラインまたはWebブラウザからリソースに接続する](#)
- [リソース接続のトラブルシューティング](#)
- [構成ファイルを使ったReceiverのカスタマイズ](#)

コマンドラインまたはWebブラウザからリソースに接続する

Dec 08, 2017

Receiverのホームページでデスクトップやアプリケーションのアイコンをクリックすると、サーバーへの接続が作成されます。また、コマンドラインやWebブラウザから接続を開くこともできます。

コマンドラインでProgram NeighborhoodまたはStoreFrontサーバーへの接続を作成するには

前提条件として、Citrix Receiverがストアを認識できるようにします。必要に応じて、次のコマンドを実行してストアを追加します。

```
./util/storebrowse --addstore <ストアのURL>
```

1. 接続するデスクトップまたはアプリケーションの固有のIDを取得します。このIDは、以下のコマンドによる出力の最初の引用文字列です。

- サーバー上のすべてのデスクトップおよびアプリケーションの一覧を取得するには、次のコマンドを実行します。

```
./util/storebrowse -E <ストアのURL>
```

- サブスクリプト済みのデスクトップおよびアプリケーションの一覧を取得するには、次のコマンドを実行します。

```
./util/storebrowse -S <ストアのURL>
```

2. 以下のコマンドを実行してデスクトップまたはアプリケーションを起動します。

```
./util/storebrowse -L <デスクトップまたはアプリケーションID> <ストアURL>
```

サーバーに接続できない場合は、管理者がサーバーの場所またはSOCKSプロキシの詳細を変更する必要がある場合があります。詳しくは、「[プロキシサーバー経由の接続](#)」を参照してください。

Webブラウザで接続を作成するには

通常、Webブラウザからセッションを開始するための構成はインストール中に自動で構成されます。さまざまなブラウザおよびオペレーティングシステムがあるため、手動の構成が必要な場合もあります。

Firefox、Mozilla、またはChrome用に.mailcapおよびMIMEファイルを手動で設定する必要がある場合は、次の手順に従ってファイルを変更して、ICAファイル（拡張子.ica）によりReceiverの実行可能ファイル（wfica）が起動するようにします。ほかのブラウザを使用するには、必要に合わせてブラウザ構成を変更する必要があります。

1. 管理者以外の環境にCitrix Receiverをインストールするには、以下のコマンドを実行します。デフォルト以外の場所にインストールされると、ICAROOTの設定が変更されることがあります。「wfica.desktop」を返すコマンド「xdg-mime query default application/x-ica」で結果をテストできます。

```
setenv ICAROOT=/opt/Citrix/ICAclient
```

```
xdg-icon-resource install --size 64 "$ICAROOT/icons/000_Receiver_64.png Citrix-Receiver"
```

```
xdg-mime default wfica.desktop application/x-ica
```

```
xdg-mime default new_store.desktop application/vnd.citrix.receiver.configure
```

2. ファイル「/etc/xdg/mimeapps.list（管理者のインストール）」または「\$HOME/.local/share/applications/mimeapps.list（mimeapps.list）」を作成または拡張します。ファイルは[Default Applications]から開始し、最後に以下が追加されている必要があります。

```
application/x-ica=wfica.desktop;
```

```
application/vnd.citrix.receiver.configure=new_store.desktop;
```

Firefoxの場合、環境設定/アプリケーション設定ページの構成が必要なことがあります。「Citrix ICA settings file content」の場合、プルダウンメニューから [Citrix Receiver Engine (標準設定)] を選択します。または、 [Use other ...] を選択し、ファイル「/usr/share/applications/wfica.desktop (管理者の環境でReceiverをインストール)」または「\$HOME/.local/share/applications/wfica.desktop (管理者以外のインストール)」を選択します。

リソース接続のトラブルシューティング

Sep 19, 2017

ユーザーがアクティブな接続を管理するには、接続センターを使用します。セッションの動作が遅い、または接続に問題がある場合、ユーザーや管理者は接続センターを使用してトラブルシューティングを行います。ユーザーは、接続センターで以下の操作を行います。

- アプリケーションを終了する。
- セッションからログオフする。これによりセッションが終了し、実行中のアプリケーションが終了します。
- セッションから切断する。これにより、アプリケーションを実行したまま（切断時にアプリケーションを閉じるようにサーバーを構成していない場合）、選択した接続のサーバー接続が切断されます。
- 接続の転送統計値を参照する。

接続を管理するには

1. Receiverメニューで [接続センター] を選択します。
接続先のサーバーと、各サーバー上でアクティブなセッションが表示されます。
2. 次のいずれかを行います。
 - サーバーを選択して、切断またはログオフしたり、プロパティを表示したりします。
 - アプリケーションを選択して、ウィンドウを閉じます。

構成ファイルを使ったカスタマイズ

Mar 07, 2018

構成ファイルについて

Receiverの構成ファイルを編集すると、高度な設定や一般的ではない設定を変更できます。これらの構成ファイルは、wficaの起動時に毎回読み取られます。変更する内容により、さまざまな構成ファイルを編集できます。

セッション共有が有効な場合は、更新した構成ファイルに基づくセッションが作成される代わりに既存のセッションが使用されることがあります。この場合、更新した構成ファイルの設定はセッションに反映されません。

すべてのCitrix Receiverユーザーにデフォルト設定を適用する

Citrix Receiverのすべてのユーザーに変更されたデフォルト設定を適用する場合は、\$ICAROOT/configディレクトリ内のmodule.ini構成ファイルを編集します。

注意

module.iniの値をほかの構成ファイルで上書きする場合を除き、module.iniの構成値のエントリをAll_Regions.iniに追加する必要はありません。All_Regions.iniのエントリで特定の値を設定すると、その設定に対するmodule.iniの値は使用されません。

新しいCitrix Receiverユーザーに変更を適用する

\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniファイルが存在しない場合、wficaが\$ICAROOT/config/wfclient.テンプレートをコピーして作成します。このテンプレートファイルに変更を加えると、以降のすべての新しいCitrix Receiverユーザーに適用されます。

特定のユーザーのすべてのコネクションに変更を適用する

特定のユーザーのすべてのコネクションに変更を適用する場合は、そのユーザーの\$HOME/.ICAClientディレクトリ内のwfclient.iniファイルを編集します。この構成ファイルによる設定は、そのユーザーの新しいコネクションに適用されます。

構成ファイルエントリを検証する

wfclient.iniのエントリの値を制限するには、設定可能な値またはその範囲をAll_Regions.iniで指定できます。可能な値を1つのみ指定すると、その値が使用されます。\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniは\$ICAROOT/config/All_Regions.iniで設定された値に一致するかその値を減らすだけで、制限を取り除くことはできません。詳しくは、\$ICAROOT/configディレクトリ内のAll_Regions.iniファイルを参照してください。

注意

module.iniとwfclient.iniで同一エントリに対する値を設定すると、wfclient.iniの値が優先されます。

構成ファイルのパラメーターについて

各構成ファイルのパラメーターは、セクションでグループ化されています。各セクションの冒頭には、角かっこで囲まれたセクション名（クライアント側ドライブのマッピングに関するパラメーターの[ClientDrive]など）が記述されています。

特に注記がある場合を除き、記述されていないパラメーターには自動的にデフォルト値が適用されます。パラメーターに値

が設定されていない場合も、自動的にデフォルト値が適用されます。たとえば、「InitialProgram=」の後に値が記述されていない場合、デフォルトの設定である「ログオン後にプログラムを実行しない」が適用されます。

優先順位

All_Regions.iniにより、ほかの構成ファイルに設定可能なパラメーターが指定されます。設定可能な値の範囲を指定したり、特定の値を指定したりできます。

通常、構成ファイルは以下の順序でチェックされます。

1. All_Regions.ini。この構成ファイルの値は、以下のファイルの値よりも優先されます。
 - コネクションのICAファイル
 - wfclient.ini
2. module.ini。この構成ファイルの値は、All_Regions.ini、コネクションのICAファイル、またはwfclient.iniで設定されておらず、All_Regions.iniで制限されていない場合に適用されます。

いずれの構成ファイルでも設定されていない場合は、Receiverのデフォルト設定が適用されます。

注意

上記の優先順位には例外があります。たとえば、セキュリティ上の理由から、サーバーの設定が適用されないように、一部の値がwfclient.iniから読み取られる場合があります。

Web Interfaceを使用したCitrix XenApp（以前のProgram Neighborhoodエージェント）接続の構成

Sep 19, 2017

このトピックは、Web Interface上のXenApp ServicesまたはStoreFront上の「旧来のProgram Neighborhood Agent」を使った展開にのみ適用されます。

selfservice、storebrowse、およびpnabrowseなどのオプションにより、XenApp Servicesサイトを実行するサーバーを介して公開リソース（公開アプリケーションやサーバーデスクトップ）に接続できます。これらのプログラムは接続を直接起動したり、ユーザーが公開リソースにアクセスできるメニューアイテムを作成するために使用したりできます。pnabrowseもこのためのデスクトップアイテムを作成できます。

ネットワーク上でCitrix XenAppを実行しているすべてのユーザーに対してカスタマイズ可能なオプションは、構成ファイルのconfig.xmlで定義されます。このファイルは、Web Interfaceサーバー上に格納されています。ユーザーがこれらのプログラムのいずれかを起動すると、このサーバーから構成データが読み取られます。その後、設定およびユーザーインターフェイスのconfig.xmlファイルで指定された間隔で定期的に更新します。

Important

config.xmlの設定は、XenApp Servicesサイトで定義されたすべての接続に適用されます。

コンテンツの公開

XenApp Servicesサイトも、アプリケーションやデスクトップではなくファイルを公開します。この処理は、コンテンツの公開と称され、pnabrowseにより公開ファイルを開くことができます。

Receiverにより認識されるファイルのタイプには制限があります。システム上で公開コンテンツのファイルタイプが認識され、ユーザーがReceiverを使用してそのコンテンツを表示するためには、そのファイルタイプに関連付けられたアプリケーションが公開されている必要があります。たとえば、公開されたAdobe PDFファイルをReceiverで表示するには、Adobe PDFビューアーなどのアプリケーションが公開されている必要があります。適切なアプリケーションが公開されていない場合、ユーザーは公開コンテンツを表示できません。

最適化

Mar 23, 2018

環境を最適化することで、Citrix Receiverのパフォーマンスおよびユーザーエクスペリエンスを向上させることができます。このことを実行することで、パフォーマンスを向上させて最適化できます。

- ユーザーデバイスのマッピング
- USBサポートの構成
- 狭帯域幅接続でのパフォーマンスの向上
- マルチメディアパフォーマンスの向上
- 画面タイルのパフォーマンスの最適化
- リテールログ機能の有効化

ユーザーデバイスのマッピング

Citrix Receiverは、XenAppおよびXenDesktopサーバーへの接続に対してクライアントデバイスのマッピングをサポートします。クライアントデバイスのマッピングによって、サーバー上で実行しているリモートアプリケーションから、ローカルのユーザーデバイスに接続しているデバイスにアクセスできるようになります。ユーザーデバイスのユーザーには、アプリケーションやシステムなどのリソースがローカルで実行されているように表示されます。クライアントデバイスのマッピングを行う前に、サーバーでこの機能をサポートしていることを確認してください。

注：SELinux (Security-Enhanced Linux) のセキュリティモジュールにより、XenAppおよびXenDesktopのクライアント側ドライブのマッピング機能とUSBリダイレクト機能が正しく動作しなくなることがあります。これらの機能を使用する場合は、サーバー上でこれらの機能を構成する前にSELinuxを無効にしてください。

クライアント側ドライブのマッピング

クライアント側ドライブのマッピング機能により、XenAppまたはXenDesktopサーバーのドライブ文字をローカルユーザーデバイスにあるディレクトリにリダイレクトできます。たとえば、Citrixユーザーセッション内で表示されるHドライブにアクセスしたときに、ローカルユーザーデバイスの特定のディレクトリにリダイレクトされるように設定できます。

クライアントドライブマッピングにより、CD-ROM、DVD、またはUSBメモリスティックなど、セッションにおいてユーザーが使用できるローカルユーザーデバイスにマウントされた任意のディレクトリに、ローカルユーザーがアクセスする権限を付与できます。サーバーでクライアント側ドライブのマッピングが許可されている場合、ユーザーはセッション内で各自のローカルファイルを読み込んで、再びローカルドライブに保存したり、サーバーのドライブに保存したりできます。

2種類のドライブマッピングを実行できます。

- 静的なクライアントドライブマッピングでは、ログオン時にユーザーデバイスの任意のファイルシステムがサーバー上の特定のドライブ文字にマップされるように設定できます。たとえば、ユーザーのホームディレクトリや/tmpディレクトリのすべてまたは一部分や、CD-ROM、DVD、またはUSBメモリスティックなどのハードウェアデバイスのマウントポイントをマップできます。
- 動的なクライアントドライブマッピングでは、CD-ROMドライブ、DVDドライブ、USBメモリスティックなどのハードウェアデバイスがマウントされるユーザーデバイス上のディレクトリが監視され、セッション内で追加した新しいデバイスが、サーバーで使用可能な最初のドライブ文字に自動的にマップされます。

クライアント側デバイスのマッピングを無効にしない限り、Citrix ReceiverがXenAppやXenDesktopに再接続したときに、マッピングが再確立されます。ポリシーを使用すると、クライアント側デバイスのマッピングを詳細に制御できます。詳しくは、[XenAppおよびXenDesktopのドキュメント](#)を参照してください。

ユーザーがドライブマッピングを設定するときは、[環境設定] ダイアログボックスを使用します。

注：デフォルトでは、静的なクライアントドライブマッピングを有効にすると自動的に動的なクライアントドライブマッピングも有効になります。静的なクライアントドライブマッピングを有効にして動的なクライアントドライブマッピングを無効にするには、wfclient.iniでDynamicCDMにFalseを設定します。

クライアントプリンターマッピング

Citrix Receiverは、ネットワークプリンターおよびユーザーデバイスにローカルで接続されているプリンターへの出力をサポートします。デフォルトでは、ポリシーを作成して変更しない限り、XenAppにより次のことを実行できます。

- ユーザーデバイスからアクセス可能なすべてのプリントデバイスに出力する
- プリンターを追加する

ただし、これらの設定はすべての環境に対して最適な設定とはならない可能性があります。たとえば、ユーザーデバイスからアクセスできるすべてのプリンターへの出力が可能なデフォルトの設定は、最も管理しやすい設定です。ただし、この設定は一部の環境ではログオンに時間がかかる要因となる可能性があります。このような状況では、ユーザーデバイス上で構成されたプリンターの一覧に制限するようにします。

このように、組織のセキュリティポリシーによってはローカルプリンターポートのマッピングをやめる必要があるものがあります。これを行うには、サーバーのICAポリシーで [クライアントCOMポートを自動接続する] 設定で [無効] を選択します。

ユーザーデバイス上で構成されたプリンターの一覧を制限するには

1. 次のいずれかの場所にある構成ファイル (wfclient.ini) を開きます。
 - %HOME%/ICAClient (1人のユーザーに対してプリンターを制限する場合)
 - %SICAROOT%/config (すべてのReceiverユーザーに対してプリンターを制限する場合)。この場合の「すべてのユーザー」は、変更後にselfserviceプログラムを最初に使用したユーザーです。
2. [WFClient] セクションに、次のパラメーターを入力します。
ClientPrinterList=printer1;printer2;printer3

ここでprinter1、printer2などは、選択したプリンターの名前です。各プリンターをコロン (:) で区切って指定します。

3. ファイルを保存して閉じます。

XenApp for Windowsでのクライアントプリンターマッピング

Citrix Receiver for LinuxはCitrix PSユニバーサルプリンタードライバーをサポートします。そのため、通常ネットワークプリンターまたはユーザーデバイスにローカルで接続されているプリンターへの出力をユーザーがローカルで構成する必要はありません。ただし、ユーザーデバイスのプリントソフトウェアがユニバーサルプリンタードライバーをサポートしていない場合などは、XenApp for Windows上でクライアントプリンターを手動でマップすることがあります。

サーバーにローカルプリンターをマップするには

1. Citrix Receiverでサーバーへのセッションを開始して起動し、XenAppサーバーにログオンします。
2. [スタート] ボタンをクリックし、[設定] > [プリンター] の順に選択します。
3. [ファイル] メニューから [プリンターの追加] を選択します。

プリンターの追加ウィザードが開きます。

4. ウィザードを使って、クライアントネットワークやクライアントドメインからネットワークプリンターを追加します。通常、これが標準のプリンター名です。標準のプリンター名とは、ネイティブのリモートデスクトップサービスで使用される「セッション3の (<クライアント名>からの) HP Laserjet 4」などです。

プリンターの追加について詳しくは、Windowsオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

XenApp for UNIXでのクライアントプリンターマッピング

UNIX環境では、Citrix Receiverにより定義されたプリンタードライバは無視されます。ユーザーデバイスのプリントシステムは、アプリケーションにより生成された出力形式を制御できる必要があります。

ユーザーがCitrix XenApp for UNIX（日本語版はリリースされていません）からクライアントプリンターに出力できるようにするには、事前に管理者が印刷機能を有効にしておく必要があります。詳しくは、XenAppおよびXenDesktopドキュメントの「[XenApp for UNIX](#)」を参照してください。

クライアントオーディオマッピング

クライアントオーディオマッピングにより、XenAppサーバー上で実行しているアプリケーションのサウンドを、ユーザーデバイスにインストールされているサウンドデバイスで再生できます。管理者はサーバーで接続ごとに音質レベルを設定できますが、ユーザーもユーザーデバイスで音質レベルを設定できます。ユーザーデバイスとサーバーの音質レベルの設定が異なる場合は、低い方の音質レベルが使用されます。

クライアントオーディオマッピングを使用すると、サーバーとネットワークに大きな負荷がかかります。音質を高くすると、オーディオデータの伝送により多くの帯域幅が必要になります。また高音質にするとサーバーのCPUもより多く使用します。

クライアントオーディオマッピングは、ポリシーを使用して構成します。詳しくは、[XenAppおよびXenDesktop](#)のドキュメントを参照してください。

注：クライアントオーディオマッピングは、Citrix XenApp for UNIX（日本語版未発表）に接続する場合はサポートされません。

非デフォルトのオーディオデバイスを設定するには

デフォルトのオーディオデバイスは、一般的にはシステムに対して構成されているデフォルトのALSAデバイスです。次の方法を使って、別のデバイスを指定します。

1. 変更を適用するユーザーの構成ファイルを選択して開きます。ほかのユーザーに適用される特定の設定ファイルを更新する方法については、「[設定ファイルを使ったReceiverのカスタマイズ](#)」を参照してください。
2. 次のオプションを追加して、必要に応じてセクションを作成します。

```
[ClientAudio]
```

```
AudioDevice = <device>
```

ここでdevice情報は、オペレーティングシステム上のALSA構成ファイルにあります。

注：この情報の場所は、すべてのLinuxオペレーティングシステムでの標準ではありません。この情報の場所について詳しくは、オペレーティングシステムドキュメントを参照してください。

USBサポートの構成

USBサポート機能により、ユーザーが仮想デスクトップ上で作業しているときにさまざまな種類のUSBデバイスを使用できるようになります。ユーザーがコンピューターにUSBデバイスを接続すると、仮想デスクトップ内でそのデバイスを操作できるようになります。この機能では、フラッシュドライブ、スマートフォン、PDA、プリンター、スキャナー、MP3プレーヤー、セキュリティデバイス、およびタブレットなどのUSBデバイスがサポートされます。

USBリダイレクトは、XenApp 7.6（以降）またはXenDesktopを必要とします。XenAppは、大容量記憶装置デバイスのUSBリダイレクトをサポートせず、オーディオデバイスをサポートするには特殊な構成が必要です。詳しくは、[XenApp 7.6のドキュメント](#)を参照してください。

Webカメラ、マイク、スピーカー、およびヘッドセットなどのUSBデバイスのアイソクロナス機能は、一般的な高速LAN環境でサポートされます。ただし通常は、標準のオーディオやWebカメラのリダイレクトの方が適しています。

XenDesktopセッションでは次の種類のデバイスは直接サポートされるため、USBサポート機能は使用されません。

- キーボード
- マウス
- スマートカード
- ヘッドセット
- Webカメラ

注：特殊用途のUSBデバイス（Bloombergキーボードや3Dマウスなど）では、USBサポート機能が使用されるように構成できます。そのほかの特殊用途のUSBデバイスのポリシー規則の構成について詳しくは、[CTX 119722](#)を参照してください。

デフォルトでは、特定の種類のUSBデバイスがXenDesktopセッションで動作しないように設定されています。たとえば、内部USBでシステムボードに装着されたNICは、リモートで動作する仮想デスクトップでの使用には適しません。次の種類のUSBデバイスは、XenDesktopセッションでの使用をデフォルトでサポートしていません。

- Bluetooth dongle
- 統合されたNIC
- USBハブ

リモート操作可能なUSBデバイスのデフォルトの一覧を更新するには、\$ICAROOT/にあるusb.confファイルを変更します。詳しくは、「リモートで実行できるUSBデバイスの一覧の更新」を参照してください。

エンドポイント側のUSBデバイスを仮想デスクトップ内で使用できるようにするには、USBポリシー規則を有効にする必要があります。詳しくは、[XenAppおよびXenDesktop](#)のドキュメントを参照してください。

USBサポートのしくみ

ユーザーがエンドポイントにUSBデバイスを接続すると、USBポリシーが照合され、許可されているデバイスであることが認識されると、仮想デスクトップ上で使用可能になります。USBポリシーで拒否されるデバイスは、ローカルのデスクトップ上でのみ使用可能になります。

デスクトップアプライアンスモードを介してアクセスするデスクトップでは、ユーザーがUSBデバイスを接続すると自動的に仮想デスクトップで使用可能になります。USBドライブの制御と表示は、仮想デスクトップにより処理されます。

デスクトップアプライアンスモードが使用中でない限り、ユーザーがリダイレクトを実行するためユーザーデバイスに接続するとき、セッションウィンドウにフォーカスがある必要があります。

大容量記憶装置デバイス

USB大容量記憶装置デバイスがローカルデスクトップに接続されたままユーザーが仮想デスクトップを切断した場合、再接続してもデバイスはその仮想デスクトップに接続されません。大容量記憶装置デバイスが仮想デスクトップに接続されるようにするには、仮想デスクトップへの再接続後にデバイスを一度取り外してから再接続する必要があります。

注：USB大容量記憶装置デバイスのリモートサポートを拒否するように構成されているLinuxワークステーションに大容量記憶装置デバイスを接続すると、Receiverソフトウェアはデバイスを受け入れず、別のLinuxファイルブラウザーが開くことがあります。そのためユーザーデバイス上では、事前にリムーバブルストレージの [メディアが挿入されたら参照する] 設定を無効にしておくことをお勧めします。Debianベースのデバイスでは、Debianメニューバー

で [Desktop] > [Preferences] > [Removable Drives and Media] を選択します。 [Storage] タブの [Removable Storage] で [Browse removable media when inserted] のチェックを外します。

注： [クライアントUSBデバイスリダイレクト]サーバーポリシーを有効にすると、クライアントドライブマッピングが有効な場合でも大容量記憶装置デバイスは常にUSBデバイスとして送信されます。

Webカメラ

デフォルトでは、HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮機能によりWebカメラのパフォーマンスが最適化されます。ただし一部の環境では、ユーザーがUSBサポート機能を使ってWebカメラを接続しなければならない場合があります。この場合、管理者がHDX RealTime Webカメラビデオ圧縮を無効にする必要があります。詳しくは、「[HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮を使ったビデオ会議](#)」を参照してください。

デフォルトで許可されるUSBクラス

次のUSBデバイスのクラスは、デフォルトのUSBポリシー規則により許可されます。

オーディオ (クラス01)

マイク、スピーカー、ヘッドセット、およびMIDIコントローラーがあります。

物理的インターフェイス (クラス05)

このデバイスはHIDに似ていますが、一般的にはリアルタイムの入力またはフィードバックを提供し、フォースフィードバックジョイスティック、モーションプラットフォーム、およびフォースフィードバックエクソスケルトンなどがあります。

静止画 (クラス06)

このクラスのデバイスとして、デジタルカメラおよびスキャナーがあります。ほとんどのデジタルカメラは、画像転送プロトコル (PTP) またはメディア転送プロトコル (MTP) を使ってコンピューターやほかの周辺機器にイメージを転送する静止画クラスをサポートします。また、デジタルカメラは大容量記憶装置デバイスとして機能する場合もあり、カメラ自体のメニューを使っていずれかのクラスを使用するように構成できます。

カメラが大容量記憶装置デバイスとして機能する場合はクライアントドライブマッピングが使用され、USBサポートは必要ありません。

プリンター (クラス07)

一部のプリンターではベンダー固有のプロトコル (クラスff) が使用されますが、一般的にはこのクラスにほとんどのプリンターが含まれます。マルチ機能プリンターの場合は、USBハブが内蔵されていたり、混合デバイスであったりする場合があります。いずれの場合も、印刷機能では一般的にプリンタークラスが使用され、スキャナーやFAX機能では静止画などの別のクラスが使用されます。

プリンターは通常、USBサポートなしで適切に動作します。

大容量記憶装置デバイス (クラス08)

最も一般的な大容量記憶装置デバイスとして、USBフラッシュドライブがあります。そのほか、USB接続のハードドライブ、CD/DVDドライブ、SD/MMCカードリーダーがあります。また、メディアプレーヤー、デジタルカメラ、スマートフォンなど、内部ストレージを持つさまざまな種類のデバイスが大容量記憶装置インターフェイスを使用します。既知のサブクラスには次のものが含まれます。

- 01 制限付きフラッシュデバイス
- 02 一般的なCD/DVDデバイス (ATAPI/MMC-2)
- 03 一般的なテープデバイス (QIC-157)
- 04 一般的なフロッピーディスクドライブ (UFI)

- 05 一般的なフロッピーディスクドライブ (SFF-8070i)
- 06 ほとんどの大容量記憶装置デバイスはこのSCSIのバリエーションを使用します

マスタートレージデバイスには、クライアントドライブマッピングを介して頻繁にアクセスすることができ、USBサポートは必要ありません。

重要：ウィルスプログラムの中には、あらゆる種類の大容量記憶装置デバイスを媒体にして活発に増殖するものがあります。クライアントドライブマッピングまたはUSBサポートのいずれかを介して大容量記憶装置デバイスの使用を許可する必要があるか、慎重に検討してください。このリスクを減らすため、クライアントドライブマッピングによりファイルが実行されるのを防ぐようにサーバーを構成することができます。

コンテンツセキュリティ (クラス0d)

通常、ライセンスまたはデジタル権利の管理のためのコンテンツ保護を実行します。このクラスのデバイスとして、ドングルがあります。

パーソナルヘルスケア (クラス0f)

このデバイスには、血圧センサー、心拍数モニター、万歩計、薬剤モニター、肺活量計などの個人用健康器具があります。

アプリケーションおよびベンダー固有 (クラスfeおよびff)

多くのデバイスがベンダー独自のプロトコルまたはUSBコンソーシアムで標準化されていないプロトコルを使用しており、これらは通常はベンダー固有 (クラスff) として分類されます。

デフォルトで拒否されるUSBデバイスのクラス

次のUSBデバイスのクラスは、デフォルトのUSBポリシー規則により拒否されます。

通信およびCDCコントロール (クラス02および0a)

モデム、ISDNアダプター、ネットワークアダプター、一部の電話およびFAX機器があります。

仮想デスクトップ自体への接続にこれらのデバイスのいずれかが使用される場合があるため、デフォルトのUSBポリシーではこれらのデバイスのリモートでの実行は許可されていません。

ヒューマンインターフェイスデバイス (クラス03)

さまざまな種類の入出力デバイスを含みます。一般的なヒューマンインターフェイスデバイス (HID) として、キーボード、マウス、ポインティングデバイス、グラフィックタブレット、センサー、およびゲームのコントローラー、ボタン、およびコントロール機能などがあります。

Subclass 01は起動インターフェイスクラスと呼ばれ、キーボードおよびマウスで使用されます。

デフォルトのUSBポリシーはUSBキーボード (クラス03、サブクラス01、プロトコル1) またはUSBマウス (クラス03、サブクラス01、プロトコル2) を許可しません。これは、ほとんどのキーボードおよびマウスはUSBサポートなしでも適切に処理され、一般に仮想デスクトップ内だけでなくローカルでも使用されるためです。

USBハブ (クラス09)

USBハブにより、追加のデバイスをローカルコンピューターに接続できます。これらのデバイスにリモートでアクセスする必要はありません。

スマートカード (クラス0b)

スマートカードリーダーには、非接触式および接触式のスマートカードリーダーがあり、また埋め込みスマートカード同等チップがあるUSBトークンもあります。

スマートカードリーダーは、スマートカードサポート機能によりアクセスできるため、USBサポートは必要ありません。

ビデオ (クラス0e)

このクラスのデバイスとして、ビデオ、Webカメラ、デジタルカムコーダー、アナログビデオ変換機、一部のテレビチューナー、およびビデオストリーミングをサポートする一部のデジタルカメラなど、ビデオ関連の機器があります。

デフォルトでは、HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮機能によりWebカメラのパフォーマンスが最適化されます。

ワイヤレスコントローラー (クラスe0)

このクラスのデバイスとして、ウルトラワイドバンドコントローラーやBluetoothなど、さまざまなワイヤレスコントローラーがあります。

これらのデバイスの中には、重要なネットワークアクセスを提供していたり、Bluetoothキーボードやマウスなどの基幹周辺装置を接続していたりするものがあります。

デフォルトのUSBポリシーはこれらのデバイスを許可していません。ただし、USBサポートを使ったアクセスに適したデバイスもあります。

リモート操作で使用できるUSBデバイスの一覧の変更

ユーザーデバイスの\$ICAROOT/にあるusb.confファイルに含まれるデフォルト規則の一覧を変更して、デスクトップへリモートで実行できるUSBデバイスの範囲を更新できます。

新しいポリシー規則を追加して一覧を更新し、デフォルト範囲に含まれないUSBデバイスを許可または拒否します。この方法により管理者が作成した規則は、どのデバイスがサーバーに提供されるかを制御します。次にサーバー上で規則が、どのデバイスを許可するかを制御します。

デバイスのリモートでの実行を許可しないためのデフォルトポリシー構成は次のとおりです。

DENY: class=09 # Hubデバイス

DENY: class=03 subclass=01 # HID起動デバイス (キーボードとマウス)

DENY: class=0b # スマートカード

DENY: class=e0 # ワイヤレスコントローラー

DENY: class=02 # 通信およびCDC制御

DENY: class=03 # UVC (Webカメラ)

DENY: class=0a # CDCデータ

ALLOW: # 完全なフォールバック:すべてを許可

USBポリシー規則の作成

ヒント : ポリシー規則を作成する場合、USB Webサイト (<http://www.usb.org/>) でUSBクラスコードを参照してください。ユーザーデバイス上のusb.confファイルで指定するポリシー規則は、{ALLOW:|DENY:}に次のタグの値をベースとした式セッ

トが付いた形式にします。

| タグ | 説明 |
|----------|-----------------------------|
| VID | デバイス記述子のベンダーID |
| REL | デバイス記述子のリリースID |
| PID | デバイス記述子の製品ID |
| クラス | デバイス記述子またはインターフェイス記述子のクラス |
| SubClass | デバイス記述子またはインターフェイス記述子のサブクラス |
| Prot | デバイス記述子またはインターフェイス記述子のプロトコル |

ポリシー規則を作成する場合、以下の点に注意してください。

- 大文字と小文字は区別されません。
- 規則の末尾に、「#」で始まる任意のコメントを追加できます。区切り文字は不要で、コメントは無視されます。
- 空白行およびコメントのみの行は無視されます。
- 区切りとして使用されるスペースは無視されますが、番号または識別子の間にスペースを入れることはできません。たとえば、Deny: Class=08 SubClass=05は有効な規則ですが、Deny: Class=0 8 Sub Class=05は無効です。
- タグには等号 (=) を使用する必要があります。たとえば、VID=1230とします。

例

次の例は、ユーザーデバイス上のusb.confファイルのセクションを示しています。これらの規則を実装するには、サーバー上と同じ規則のセットがある必要があります。

```
ALLOW: VID=1230 PID=0007 # ANOther Industries, ANOther Flash Drive
```

```
DENY: Class=08 SubClass=05 # 大容量記憶装置デバイス
```

```
DENY: Class=0D # すべてのセキュリティデバイス
```

スタートアップモードの構成

デスクトップアプライアンスモードを使って、仮想デスクトップを開始したときに既に接続されているクライアント側のUSBデバイスを有効にしたり無効にしたりできます。これを行うには、各ユーザーデバイスで\$ICAROOT/config/module.iniファイルを開き、WfClientセクションのDesktopApplianceMode = Booleanを以下のように設定します。

| | |
|-------|---|
| TRUE | 開始時に接続されているUSBデバイスが使用可能になります。サーバー（レジストリエントリ）またはユーザーデバイス（ポリシールール構成ファイル）のUSBポリシーでデバイスが禁止されていない場合のみ。 |
| FALSE | USBデバイスは使用可能になりません。 |

狭帯域幅接続でのパフォーマンスの向上

サーバー上ではXenAppまたはXenDesktop、ユーザーデバイスではReceiverのそれぞれ最新バージョンを使用することを推奨します。

帯域幅の狭い接続を使用する場合は、Receiverの構成や使い方を変えてパフォーマンスを向上させることができます。

- **Receiverの接続構成** - Receiverの接続構成を変更することで、ICAで消費される帯域幅を減らしてパフォーマンスを改善できます。
- **Receiverの使用方法** - Receiverの使用方法を変更することで、高いパフォーマンスが求められる接続での消費帯域幅を抑えることができます。
- **UDPオーディオの有効化** - この機能を有効にすると、ネットワークトラフィック負荷の高いVoIP (Voice over IP) 接続での遅延レベルが安定します。
- **最新バージョンのXenAppおよびReceiver for Linuxの使用** - Citrix製品では、パフォーマンスを向上して機能を拡張するためのバージョンアップが常に行われています。また、多くのパフォーマンス機能を使用するには、最新のReceiverおよびサーバーソフトウェアが必要である場合もあります。

接続の構成

デバイスのプロセッサの処理能力や接続に使用する帯域幅が限られている場合は、使用する機能とパフォーマンスのバランスを考慮する必要があります。ユーザーおよび管理者は、パフォーマンスを低下させずに多くの機能を利用できるように、構成を変更することができます。サーバーまたはユーザーデバイスで次の変更を行うと、接続に必要な帯域幅を減らしてパフォーマンスを向上させることができます。

- **SpeedScreenの有効化** - SpeedScreenを有効にすると、遅延時間の長いネットワーク接続でも、ユーザーの入力やマウスのクリックに対する反応時間が短くなります。この構成は、サーバー上でSpeedScreen管理ツールを使用して行います。Receiverにおいてデフォルトでは、これはキーボード操作に対しては無効になっており、遅延時間の長いネットワーク接続におけるマウス操作に対してのみ有効です。詳しくは、『
— Citrix Receiver for Linux OEM's Reference Guide
』を参照してください。
- **データ圧縮の有効化** - データを圧縮すると、接続を介して転送されるデータ量が減少します。これにはデータの圧縮と展開を行うためのプロセッサリソースが必要になりますが、低帯域幅接続でのパフォーマンスを向上させることができます。この機能を有効にするには、Citrixポリシーの [音質] および [イメージ圧縮] 設定を使用します。
- **ウィンドウサイズの縮小** - ウィンドウサイズを必要最小限に抑えます。XenApp Servicesサイトで、[セッションオプション] を設定します。
- **表示色数の変更** - 表示色数を256色に変更します。XenAppおよびXenDesktopサイトで、[セッションオプション] を設定します。
- **音質の変更** - サウンドのサポート機能を使用する場合は、Citrixポリシーの [音質] 設定で音質を下げます。

UDPオーディオの有効化

UDPオーディオ機能を有効にすると、インターネット接続を介した通話品質が向上します。この機能では、TCP (Transmission Control Protocol) の代わりにUDP (User Datagram Protocol) が使用されます。

以下の点に注意してください。

- 暗号化されたセッション (TLSまたはSecureICAを使用するセッション) では、UDPオーディオを使用できません。このようなセッションでは、TCP上でオーディオデータが転送されます。
- ICAチャンネルの優先度により、UDPオーディオの動作が異なります。

1. module.iniファイルのClientAudioセクションで、以下のオプションを設定します。

- EnableUDPAudioにTrueを指定します。デフォルトではFalseが設定されており、UDPオーディオが無効になります。
 - UDPAudioPortLowおよびUDPAudioPortHighに、UDPオーディオで使用されるポート番号の最小値および最大値を指定します。デフォルトでは、ポート16500~16509が使用されます。
2. 中レベルの音質が適用されるように、クライアント側およびサーバー側のオーディオ設定を以下のように構成します。

| | | クライアント側の音質レベル | | |
|-------------|---|---------------|---|---|
| | | 高 | 中 | 低 |
| サーバー側の音質レベル | 高 | 高 | 中 | 低 |
| | 中 | 中 | 中 | 低 |
| | 低 | 低 | 低 | 低 |

UDPオーディオを有効にしても、中レベルの音質が適用されない場合はTCPが使用されます。

Receiverの使用方法の変更

ICA技術は高度に最適化されているため、通常、処理能力の高いCPUを搭載したクライアントデバイスや広い帯域幅を必要としません。ただし、接続の帯域幅が非常に狭い接続では、適切なパフォーマンスを得るために、次のことを考慮してください。

- クライアント側ドライブ上のサイズの大きいファイルにはアクセスしない。クライアントドライブマッピングを使ってファイルにアクセスすると、サーバーとの接続でそのファイルのデータが転送されることとなります。遅い接続では、大きなファイルを転送するのに時間がかかることがあります。
- クライアント側のローカルプリンターで大きな文書を印刷しない。クライアント側のローカルプリンターで文書を印刷すると、サーバーとの接続でそのファイルのデータが転送されることとなります。遅い接続では、大きなファイルを転送するのに時間がかかることがあります。
- マルチメディアコンテンツを再生しない。マルチメディアファイルを再生するには、広い帯域幅が必要です。そのため、パフォーマンスが低下する可能性があります。

マルチメディアパフォーマンスの向上

Receiverには、メディアリッチな今日のユーザー環境に高品位なユーザーエクスペリエンスを提供する幅広い技術セットが含まれています。以下の機能により、ホストされるアプリケーションやデスクトップでのユーザーエクスペリエンスが向上します。

- HDX MediaStream Windowsメディアリダイレクト
- HDX MediaStream Flashリダイレクト
- HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮
- H.264サポート

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクトの構成

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクトを実行すると、Linuxユーザーデバイスでアクセスする仮想Windowsデスクトップでマルチメディア再生時の帯域幅が軽減されます。HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクトは、サーバーではなくユーザーデバイスでメディアランタイムファイルを再生し、マルチメディアファイルの再生に必要な帯域幅を減少させるメカニズムです。

HDX MediaStream Windows Mediaリダイレクトは、仮想Windowsデスクトップで実行中のWindows Media Playerおよび互換プレーヤーのパフォーマンスを向上させます。次の形式を含む、さまざまなファイル形式をサポートしています。

- Advanced Systems Format (ASF)
- Motion Picture Experts Group (MPEG)
- Audio-Video Interleaved (AVI)
- MPEG Audio Layer-3 (MP3)
- WAVサウンドファイル

Citrix Receiverには、Windows用のメディア形式であるGUIDをGStreamer用のMIMEタイプに変換するためのテキストベースの変換テーブルであるMediaStreamingConfig.tblが含まれています。この変換テーブルは、以下の目的で編集できます。

- 不明またはサポートされないメディアフィルター/ファイル形式を変換テーブルに追加する。
- 問題が生じるGUIDをブラックリストに追加して、強制的にサーバー側でレンダリングされるようにする。
- GStreamerパラメーターの変更により問題のある形式をトラブルシューティングできるようにするため、追加のパラメーターを既存のMIME文字列に追加する。
- ユーザーデバイス上のGStreamerによりサポートされているメディアファイルの種類に応じて、カスタムの構成を管理および展開する。

クライアント側でのコンテンツ取得機能を使用すると、http://、mms://、およびrtsp://形式のURLからのストリーム配信メディアを、Citrixサーバーを介さずにユーザーデバイスで直接取得できます。サーバーは、ユーザーデバイスをメディアに接続して、再生、一時停止、停止、音量、シークなどの制御コマンドを送信するだけで、メディアデータの処理は行いません。この機能を使用するには、ユーザーデバイス上に高度なマルチメディアGStreamerライブラリをインストールする必要があります。

HDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトを実装するには

1. オープンソースのマルチメディアフレームワークであるGStreamer 0.10を各ユーザーデバイス上にインストールします。通常、Citrix Receiverをインストールする前にGStreamerをインストールして、Citrix ReceiverがインストールプロセスでGStreamerの使用を構成できるようにします。
ほとんどのLinuxディストリビューションにはGStreamerが含まれています。または、<http://gstreamer.freedesktop.org>からGStreamerをダウンロードできます。
2. クライアント側でのコンテンツ取得機能を有効にするには、再生するメディアのファイルタイプに対応するGStreamerのプロトコルソース プラグインをインストールします。このプラグインのインストールおよび動作を確認するには、gst-launchユーティリティを使用します。このプラグインが正しくインストールされている場合、gst-launchでURLのマルチメディアを再生できます。たとえば、ビデオが再生されるかどうかを確認するには、gst-launch-0.10 playbin2 uri=http://file.wmvを実行します。
3. デバイス上でCitrix Receiverをインストールするときに、Tarballスクリプトを使用している場合、GStreamerオプションを選択します (.debおよび.rpmパッケージでは自動で実行されます)。

クライアント側でのコンテンツ取得機能を使用する場合は、次のことに注意してください。

- この機能は、デフォルトで有効になります。無効にするには、All-Regions.iniファイルのMultimediaセクションにあるSpeedScreenMMACSFEnabledオプションを使用します。ここでFalseを指定すると、Windows Mediaリダイレクト機能が使用されます。
- デフォルトでは、すべてのMediaStream機能でGStreamerのplaybin2プロトコルが使用されます。従来のplaybinプロトコルが使用されるようにするには、All-Regions.iniファイルのMultimediaセクションにあるSpeedScreenMMAEnablePlaybin2オプションを使用します。ただし、クライアント側でのコンテンツ取得機能では常にplaybin2プロトコルが使用されます。
- Receiverでは、.asxや.nscなどのストリーム構成情報ファイルや再生リストファイルを認識できません。可能な場合は、これらのファイルを参照しない標準的なURLをユーザーが指定する必要があります。URLが有効かどうかは、gst-launchを使

用して確認できます。

GStreamer 1.0については、以下のことに注意してください。

- GStreamer 0.10は、デフォルトでHDX MediaStream Windowsメディアリダイレクトに使用されます。GStreamer 0.10が使用できない場合のみ、GStreamer 1.0が使用されます。
 - GStreamer 1.0を使用する場合、次の手順に従います。
1. GStreamerプラグインのインストール先ディレクトリを検出します。プラグインのインストール先は、ディストリビューション、OSアーキテクチャ、GStreamerのインストール方法によって異なります。一般的なインストールパスは、`/usr/lib/x86_64-linux-gnu/gstreamer-1.0`または`$HOME/.local/share/gstreamer-1.0`です。
 2. Citrix Receiver for Linuxのインストールディレクトリを検出します。スーパーユーザー (root) のデフォルトのインストールディレクトリは、`/opt/Citrix/ICAClient`です。非スーパーユーザーのデフォルトのインストールディレクトリは、`$HOME/ICAClient/platform` (プラットフォームは`linuxx64`など) です。詳しくは、「[インストールとセットアップ](#)」を参照してください。
 3. GStreamerプラグインディレクトリでシンボリックリンクを作成することで、`libgstflatstm1.0.so`をインストールします：
`-sf $ICACLIENT_DIR/util/libgstflatstm1.0.so $GST_PLUGINS_PATH/libgstflatstm1.0.so`。この手順には、権限の昇格 (sudo権限など) が必要な場合があります。
 4. `gst_play1.0`をプレーヤーとして使用する：
`-sf $ICACLIENT_DIR/util/gst_play1.0 $ICACLIENT_DIR/util/gst_play`。この手順には、権限の昇格 (sudo権限など) が必要な場合があります。
- HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮でGStreamer 1.0を使用する場合、`gst_read1.0`をリーダーとして使用します。
`sf $ICACLIENT_DIR/util/gst_read1.0 $ICACLIENT_DIR/util/gst_read`

HDX MediaStream Flashリダイレクトの構成

HDX MediaStream Flashリダイレクトにより、Adobe Flashコンテンツがユーザーデバイス上でローカルに再生され、帯域幅要件を増やすことなく高品位な音声やビデオの再生機能が提供されます。

1. この機能に必要な要件をユーザーデバイスが満たしていることを確認します。詳しくは、[必要なシステム](#)を参照してください。
2. `wfclient.ini`の`[WFClient]`セクション (特定ユーザーのすべての接続に適用する場合) または`All_Regions.ini`の`[Client Engine\Application Launching]`セクション (環境内のすべてのユーザーに適用する場合) に、以下のパラメーターを追加します。

- **HDXFlashUseFlashRemoting=Ask | Never | Always**

ユーザーデバイス上でHDX MediaStream for Flashを有効にします。デフォルトでは、**Never**に設定されています。これにより、FlashコンテンツのWebページに接続したときに、そのコンテンツを最適化するかどうかを確認するダイアログボックスが開きます。

- **HDXFlashEnableServerSideContent Fetching=Disabled | Enabled**

サーバー側でのコンテンツ取得機能を有効または無効にします。デフォルトでは、**Disabled**に設定されています。

- **HDXFlashUseServerHttpCookie=Disabled | Enabled**

HTTP Cookieのリダイレクトを有効または無効にします。デフォルトでは、**Disabled**に設定されています。

- **HDXFlashEnableClientSideCaching=Disabled | Enabled**

Receiverにより取得されたWebコンテンツのクライアント側キャッシュを有効または無効にします。デフォルトでは、**Enabled**に設定されています。

- **HDXFlashClientCacheSize= [25-250]**

クライアント側でのキャッシュのサイズを、MB単位で定義します。この値は、25MB~250MBの間で定義できます。サイズが制限値に到達すると、キャッシュ内の既存のコンテンツが削除され、新しいコンテンツが保存されます。デフォルトでは、**100**に設定されています。

- **HDXFlashServerSideContentCacheType=Persistent | Temporary | NoCaching**

サーバー側でのコンテンツ取得機能により取得されたコンテンツのキャッシュの種類を定義します。デフォルトでは、**Persistent**に設定されています。

注：このパラメーターは、**HDXFlashEnableServerSideContent Fetching**を**Enabled**に設定した場合にのみ必要です。

3. Flashリダイレクトはデフォルトで無効になっています。/config/module.iniファイルで、FlashV2=OffをFlashV2=Onに変更して、この機能を有効にします。

HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮の構成

HDX RealTime機能のWebカメラビデオ圧縮オプションを使用すると、ビデオ会議で消費される帯域幅を効率化できます。これにより、GoToMeeting HD Faces、Skype for Businessなどのアプリケーションを使用するときに最適なパフォーマンスが提供されます。

1. この機能に必要な要件をユーザーデバイスが満たしていることを確認します。
2. マルチメディア仮想チャネルを有効にする必要があります。これを実行するには、\$ICAROOT/configディレクトリにあるmodule.ini構成ファイルを開き、[ICA3.0]セクションのMultiMediaを"On"に設定します。
3. オーディオ入力を有効にするには、[環境設定] ダイアログボックスの[マイクとWebカメラ] ページで、[マイクとWebカメラを使用する] をクリックします。

HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮の無効化

デフォルトでは、HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮機能によりWebカメラのパフォーマンスが最適化されます。ただし一部の環境では、ユーザーがUSBサポート機能を使ってWebカメラを接続しなければならない場合があります。これを実行するには、次の手順を実行する必要があります：

- HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮を無効にする
- WebカメラのUSBサポートを有効にする

1. 次のパラメーターを適切なINIファイルの[WFClient]セクションに追加する：

```
HDXWebCamEnabled=Off
```

詳しくは、「[構成ファイルを使ったReceiverのカスタマイズ](#)」を参照してください。

2. usb.confファイルを開きます。通常このファイルは、\$ICAROOT/usb.confにあります。
3. 次の行を削除するか、コメントアウトします。

```
DENY: class=0e # UVC (HDX RealTime Webカメラビデオ圧縮経由のデフォルト)
```

4. ファイルを保存して閉じます。

H.264サポートの構成

Receiverでは、XenDesktop 7で配信されるHDX 3D Proグラフィックを含むH.264グラフィックがサポートされます。この機能では、デフォルトで有効になっている深圧縮コーデックが使用されます。これにより、専門的なグラフィック処理アプリケーションをWANネットワークを介して使用する場合でも、既存のJPEGフォーマットよりも高いパフォーマンスが提供されます。

この機能を無効にする（つまりグラフィックをJPEGコーデックで処理する）には、このトピックの手順に従ってください。☺

圧縮コーデックを有効にしたまま、テキストトラッキングを無効にすることもできます。グラフィックに含まれるテキストが多くないまたは重要でない場合は、テキストトラッキングを無効にすることにより、複雑なグラフィック処理時のCPU負荷を軽減できます。

重要：この機能を構成する場合は、XenDesktopのポリシーの[表示品質]設定で無損失品質を指定しないでください。無損失品質を指定するとサーバー側のH.264エンコーディングが無効になり、Receiverでこの機能が動作しなくなります。

深圧縮コーデックのサポートを無効にするには：

wfclient.iniで、H264EnabledにFalseを設定します。これにより、テキストトラッキングも無効になります。

テキストトラッキングのみを無効にするには

深圧縮コーデックのサポートを有効にしたまま、wfclient.iniでtextTrackingEnabledにFalseを設定します。

画面タイルのパフォーマンスの最適化

Direct-to-Screenビットマップデコード、バッチタイルデコード、およびXSyncの待機機能を使用すると、JPEGエンコードの画面タイルの処理パフォーマンスを最適化できます。

1. JPEGライブラリがこれらの機能をサポートすることを確認します。
2. wfclient.iniの[Thinwire3.0]セクションで、DirectDecodeおよびBatchDecodeにTrueを指定します。

注：バッチタイルデコード機能を有効にすると、XSyncの待機機能が自動的に有効になります。

リテールログ機能の有効化

Citrix Receiver for Linuxのリテールビルドでログ機能を有効にするには、以下を実行します。

1. Citrix Receiver for Linux 13.9リテールビルドをダウンロードしてLinuxマシンにインストールし、ICAROOT環境変数をインストール場所に設定します。
2. Citrix Receiver for Linux 13.9リリースでは、debug.iniファイルはICAROOTの構成フォルダーにあります。コマンドラインで `> ln -s config/debug.ini debug.ini` を入力し、このファイルのシンボリックリンクを\$ICAROOTパスに作成します。
3. \$ICAROOTのdebug.iniファイルを編集し、必要なトレースパラメーターを[wfica]セクション下に追加します。
4. \$ICAROOT/config/module.iniファイルを編集して、[WFClient]セクションの最後にSyslogThreshold=7を追加します。これで、すべてのレベルのログが生成されます。エラーのみを記録するには、SyslogThresholdを3に設定します。
5. syslogトレースを取得するには、syslog構成ファイルを編集します。/etc/rsyslog.confファイル（またはLinuxディストリビューションによってはsyslog.conf）に移動し、次の変更を加えます。

すべてのファシリティからローカルログ記録を有効にするには、ファイルの最初の**\$ModLoad imuxsock.so**行がコメント解除されていることを確認します。

リモートログ記録では、構成ファイルで次の2つの変更が必要ですが、syslogへのローカルログ記録では**必要ありません**。

サーバー側の構成：syslogサーバーのrsyslog.confファイルで次の行をコメント解除します。

```
$ModLoad imtcp  
$InputTCPServerRun 10514
```

クライアント側の構成：localhostをリモートサーバーのIPアドレスに置換することで、次の行を追加します。

```
*.* @@localhost:10514
```

6. 変更を保存し、コマンドラインで `> sudo service rsyslog restart` を入力してsyslogサービスを再起動します。
7. すべてのsyslogログは/var/logに保存されます。このフォルダー内のログを表示または編集するには、sudoアクセス権が必要

要です。ログはuser-all-drivers_proxy22.logファイルに送られます。rsyslog.confファイルのRULESセクションで以下の行を編集し、ログファイルのパスと名前を構成できます。

user.* -/var/log/logfile_name.log

注：rsyslog.confファイルを編集するたびに、syslogサービスを再起動する必要があります。

- Receiverプロセス (SICAROOTの./selfservice) を起動します。セッション終了後、ログファイルは/var/logに格納されません。

デフォルトでは、起動するたびに、ログがログファイルに追加されます。起動ごとにトレースを追跡するには、起動するたびに構成ファイルを編集してログファイルを変更し、rsyslogサービスを再起動します。

操作性の向上

Mar 23, 2018

Receiverには、ユーザーエクスペリエンスを向上させるための以下の機能が用意されています。

- [基本設定の設定](#)
- [ClearTypeフォントスムージングの構成](#)
- [ユーザーフォルダーのリダイレクトの構成](#)
- [サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクトのセットアップ](#)
- [キーボードの制御](#)
- [xcaptureの使用](#)
- [ユーザーの自動再接続](#)
- [セッション画面の保持](#)
- [相対マウス](#)

基本設定の設定

各種設定を行うには、Citrix Receiverメニューの [環境設定] を選択します。ここでは、デスクトップの表示モード、セッションの自動再接続、およびローカルのファイルやデバイスへのアクセスについて設定します。

アカウントを管理するには

デスクトップやアプリケーションにアクセスするには、XenDesktopまたはXenAppのアカウントが必要です。ヘルプデスク担当者により、Citrix Receiver上でアカウントを追加したり、既存のアカウントのNetScaler GatewayまたはAccess Gatewayサーバーの指定を変更したりすることが指示される場合があります。また、Citrix Receiverからアカウントを削除することもできます。

1. [環境設定] ダイアログボックスの [アカウント] ページで、次のいずれかを実行します。
 - アカウントを追加するには、[追加] をクリックします。ヘルプデスク担当者により、新しいアカウントを作成するためのプロビジョニングファイルが提供される場合もあります。
 - アカウントで接続するストアの詳細（デフォルトのゲートウェイなど）を変更するには、[編集] をクリックします。
 - アカウントを一覧から削除するには、[削除] をクリックします。
2. 画面の指示に従って操作します。サーバーへの認証情報が必要な場合があります。

デスクトップの表示モードを変更するには

この機能は、Citrix XenApp for UNIXのセッションでは使用できません。

デスクトップを全画面で表示（全画面モード。デフォルト）したり、ウィンドウ内に表示（ウィンドウモード）したりできます。

- [環境設定] ダイアログボックスの [全般] ページを開き、[デスクトップの表示] オプションを使用して表示モードを選択します。

Receiver for Linuxの新しい **[You can enable Desktop Viewer]** ツールバー機能で、ここで述べた構成で指定された元の設定からリモートセッションのウィンドウ構成を動的に変更できるようになりました。

デスクトップビューアー

企業組織にはそれぞれ異なるニーズがあります。ユーザーが仮想デスクトップにアクセスする方法の要件は、ユーザーによ

て、そして企業ニーズが展開するにつれて変化する可能性があります。ユーザーが仮想デスクトップに接続したり接続を構成したりするときの手順は、管理者によるReceiver for Linuxセットアップ方法によって異なります。

ユーザーが仮想デスクトップを操作する必要がある場合は、Desktop Viewerを使用します。ユーザーの仮想デスクトップは公開仮想デスクトップにすることができ、または共有デスクトップや専用デスクトップにもすることができます。このアクセスシナリオでは、Desktop Viewerツールバー機能により、モニターを横断したマルチモニターサポートなど、ウィンドウモードと全画面モードのセッションの切り替えることができます。ユーザーは、同じユーザーデバイス上で複数のXenDesktopコネク션을確立して、デスクトップセッションを切り替え、複数のデスクトップを使用できます。すべてのデスクトップセッションを最小化し、Ctrl+Alt+Delシーケンスを送信し、接続を切断し、セッションをログオフするボタンが提供されるため、簡単にユーザーのセッションを管理できます。

Desktop Viewerのユーザー補助機能として、Ctrl+ Alt + Breakキーを押すと、ポップアップウィンドウでDesktop Viewerツールバーが開きます。

Desktop Viewerを有効/無効にしたり、ユーザー補助機能のキーシーケンスを変更するための詳細設定の入力については、Linux OEMガイドを参照してください。

セッションへの自動再接続を有効にするには

Citrix Receiverには、ネットワークインフラストラクチャの問題があるなどの理由で切断されたデスクトップやアプリケーションのセッションに、自動的に再接続するための機能が用意されています。

- [環境設定] ダイアログボックスの [全般] ページを開き、[アプリやデスクトップへの再接続] でオプションを選択します。

ローカルファイルへのアクセスを制御するには

仮想デスクトップやアプリケーションからローカルコンピューター上のファイルにアクセスする場合は、そのアクセス方法を制御することができます。

1. [環境設定] ダイアログボックスの [ファイルアクセス] ページを開き、マップするドライブを選択してから適切なオプションを選択します。
 - 読み取り/書き込み：デスクトップやアプリケーションでのローカルファイルの読み取りおよび書き込みを許可します。
 - 読み取りのみ：デスクトップやアプリケーションでのローカルファイルの読み取りのみを許可し、書き込みを禁止します。
 - アクセス なし：デスクトップやアプリケーションでのローカルファイルへのアクセスを禁止します。
 - 毎回確認する：デスクトップやアプリケーションでのローカルファイルにアクセスするときに、毎回確認メッセージを表示します。
2. ローカルファイルへのアクセスを許可するオプションを選択すると、ユーザーデバイス上の場所を参照するときの時間を節約できます。 [追加] をクリックして場所を指定し、それに割り当てるドライブ文字を選択します。

マイクまたはWebカメラをセットアップするには

仮想デスクトップやアプリケーションからローカルコンピューター上のマイクやWebカメラにアクセスする場合は、そのアクセス方法を制御できます。

[環境設定] ダイアログボックスの [マイクとWebカメラ] ページでは、次のオプションを選択できます。

- マイクとWebカメラを使用する：デスクトップやアプリケーションでのマイクやWebカメラの使用を許可します。
- マイクとWebカメラを使用しない：デスクトップやアプリケーションでのマイクやWebカメラの使用を禁止します。

Flash Playerをセットアップするには

Flashコンテンツの表示方法を選択できます。通常、これらのコンテンツにはビデオ、アニメーション、およびアプリケーションが含まれ、Flash Playerを使って表示します。

[環境設定] ダイアログボックスの [Flash] ページでは、次のオプションを選択できます。

- コンテンツを最適化する：コンテンツの再生品質を向上させます。ただし、セキュリティが低下する可能性があります。
- 最適化しない：セキュリティを犠牲にすることなく、標準的な再生品質が提供されます。
- 毎回確認する：Flashコンテンツを表示するときに、毎回確認メッセージを表示します。

ClearTypeフォントスムージングの構成

ClearTypeフォントスムージング（サブピクセルのフォントレンダリング）は、従来のフォントスムージングやアンチエイリアスに比べて表示フォントの質を向上させます。この機能を有効/無効にしたりスムージングの種類を指定したりするには、適切な構成ファイルの[WFClient]セクションで次の設定を編集します。

FontSmoothingType = number

numberに以下のいずれかの値を設定します。

| 値 | 動作 |
|---|--|
| 0 | デバイス側の設定が適用されます。デバイス側の設定は、FontSmoothingTypePrefで定義します。 |
| 1 | スムージング処理なし |
| 2 | 標準のスムージング |
| 3 | ClearType（水平サブピクセル）スムージング |

標準スムージングまたはClearTypeスムージングを使用すると、Receiverで消費される帯域幅が増加することがあります。

重要：サーバー側の設定は、ICAファイルのFontSmoothingTypeで定義できます。この設定は、[WFClient]の設定よりも優先されます。FontSmoothingTypeが0の場合、[WFClient]の次の設定によりローカルの動作が決定されます。

FontSmoothingTypePref = number

numberに以下のいずれかの値を設定します。

| 値 | 動作 |
|---|----------------------------------|
| 0 | スムージング処理なし |
| 1 | |
| 2 | 標準のスムージング |
| 3 | ClearType（水平サブピクセル）スムージング（デフォルト） |

ユーザーフォルダーのリダイレクトの構成

この機能では、ユーザーごとに個別に設定される以下の2つのユーザーフォルダー（特殊フォルダー）が対象になります。

- ユーザーのデスクトップフォルダー
- ユーザーのドキュメントフォルダー（Windows XPではマイドキュメント）

ユーザーフォルダーのリダイレクト機能では、ユーザーデバイス上の特定の場所をユーザーフォルダーとして指定できます。これにより、サーバーの種類やファーム構成が異なってもこれらのフォルダーに一貫してアクセスできるようになります。たとえば、異なるサーバーファームのサーバーにログオンする必要があるモバイルユーザーには便利な機能です。常に同じサーバーファーム内のサーバーにログオンする静的な社内ワークステーションの場合、この機能はあまり必要ではありません。

ユーザーフォルダーのリダイレクトを構成するには

2つの処理が必要です。まず、module.iniにエントリを作成してユーザーフォルダーのリダイレクトを設定します。次に、以下のように[WFClient]セクションにフォルダーの場所を指定します。

1. 次の文字列をmodule.ini（\$ICAROOT/config/module.iniなど）に追加します。

```
[ClientDrive]
```

```
SFRAllowed = True
```

2. 次の文字列を[WFClient]セクション（\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniなど）に追加します。

```
DocumentsFolder =
```

```
DesktopFolder =
```

ここでとは、それぞれユーザーのDocumentsフォルダーおよびDesktopフォルダーとして使用するディレクトリのUNIXファイル名（フルパス）です。次に例を示します。

```
DesktopFolder = $HOME/.ICAClient/desktop
```

- \$HOMEなどの環境変数として、パスで任意のコンポーネントを指定できます。
- 両方のパラメーターの値を指定する必要があります。
- 指定するディレクトリは、クライアントデバイスマッピングを介して使用できる必要があります。このため、このディレクトリはマップされたクライアントデバイスのサブツリーにある必要があります。
- ドライブ文字として、Cまたはそれ以降を使用する必要があります。

サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクトのセットアップ

公開アプリケーションで使用しているファイル内に埋め込まれている特定のURLを、ローカルのアプリケーションで開くように指定できます。たとえば、セッションで実行するMicrosoft OutlookでWebページへのリンクをクリックすると、そのWebページがユーザーデバイス上のWebブラウザで開きます。管理者は、この機能を使ってサーバーのリソースをより効率よく配分し、ユーザー側のパフォーマンスを向上させることができます。

次の種類のURLをクライアントにリダイレクトできます。

- HTTP（Hypertext Transfer Protocol）
- HTTPS（Secure Hypertext Transfer Protocol）
- RTSP（Real Player）
- RTSPU（Real Player）
- PNM（従来のReal Players）

Citrix Receiverに適切なアプリケーションがない場合、またはコンテンツに直接アクセスできない場合は、URLがサーバー上のアプリケーションで開きます。

サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクト機能は、サーバー側で構成します。Citrix Receiverでは、RealPlayerとWebブラウザ（Firefox、Mozilla、またはNetscapeの内の最低1つ）がUNIXパスに指定されている場合は、この機能がデフォルトで有効になります。

注意

RealPlayer for Linuxについて詳しくは、<http://www.real.com/resources/unix/>を参照してください。

RealPlayerとWebブラウザがパスにない場合に、サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクト機能を有効にするには

1. 構成ファイルwfclient.iniを開きます。
2. [Browser]セクションで、次の設定を変更します。

Path=path

Command=command

ここでpathは、Webブラウザの実行ファイルのディレクトリです。また、commandはリダイレクトされるURLを処理する実行ファイルの名前で、サーバーから送信されるURLに追加されます。次に例を示します。

```
SICAROOT/nslaunch netscape,firefox,mozilla
```

このコマンドにより、以下が実行されます。

- 既存のWebブラウザウィンドウにURLを渡すnslaunchユーティリティが起動します。
- リストで指定された各Webブラウザを順番に試行して、コンテンツを表示します。

3. [Player]セクションで、次の設定を変更します。

Path=path

Command=command

ここでpathは、RealPlayerの実行ファイルのディレクトリです。また、commandはリダイレクトされるマルチメディアURLを処理する実行ファイルの名前で、サーバーから送信されるURLに追加されます。

4. ファイルを保存して閉じます。

注意

どちらのPath設定においても、WebブラウザおよびRealPlay実行ファイルがあるディレクトリだけを指定する必要があります。実行ファイルのフルパスは必要ありません。たとえば、[Browser]セクションではPathの値は/usr/X11R6/bin/netscapeではなく、/usr/X11R6/binとなります。また、複数のディレクトリ名をコロンで区切って指定できます。この値を指定しない場合、SPATHが使用されます。

Receiverで、サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクト機能を無効

にするには

1. 構成ファイルmodule.iniを開きます。
2. CREnabledの設定をOffに変更します。
3. ファイルを保存して閉じます。

キーボードの制御

Ctrl+Alt+Delキーを送信するためのキーを設定するには：

1. Ctrl+Alt+Del キー操作を送信するために使用するキーの組み合わせを決定します。
2. 適切な構成ファイルを開き、[WFClient]セクションのUseCtrlAltEndで、以下の値を設定します。
 - Trueを指定すると、Ctrl+Alt+Endキーを押すことでリモートのデスクトップにCtrl+Alt+Delキー操作が送信されます。
 - False (デフォルト) を指定すると、Ctrl+Alt+Enterキーを押すことでリモートのデスクトップにCtrl+Alt+Delキー操作が送信されます。

xcaptureの使用

Citrix Receiverのパッケージには、サーバーのクリップボードと、Xデスクトップ上のICCCMに準拠していないX Windowアプリケーション間で画像をコピーおよび貼り付けできる、xcaptureユーティリティが付属しています。xcaptureを使って、次の操作を実行できます。

- ダイアログボックスや画面領域をキャプチャし、コネクションウィンドウ内で実行中のアプリケーションと、ユーザーデバイスデスクトップ (ICCCMに準拠していないX Windowアプリケーションを含む) 間でコピーする。
- コネクションウィンドウと、グラフィックを編集するX Windowアプリケーションであるxmagまたはxv間で、画像をコピーする。

コマンドラインからxcaptureを起動するには

コマンドプロンプトで、/opt/Citrix/ICAClient/util/xcaptureと入力し、Enterキーを押します (ここで /opt/Citrix/ICAClientは、Receiverをインストールしたディレクトリ)。

ユーザーデバイスデスクトップからコピーするには

1. [xcapture] ダイアログボックスで、[画面から] をクリックします。カーソルが十字型に変わります。
2. 次のいずれかを選択します。
 - ウィンドウの選択。コピーするウィンドウの上にカーソルを移動し、マウスの中央ボタンをクリックします。
 - 領域の選択。マウスの左ボタンを押したままカーソルをドラッグして、コピーする領域を選択します。
 - 選択の取り消し。マウスの右ボタンをクリックします。ドラッグしているときに中央ボタンまたは左ボタンを押したままマウスの右ボタンをクリックすると、選択が解除されます。
3. [xcapture] ダイアログボックスで、[ICAへ] をクリックします。ボタンの色が変わり、情報を処理していることが示されます。
4. 転送が完了したら、コネクションウィンドウから起動したアプリケーションで適切なコマンドを使用して、情報を貼り付けます。

xvから、ICAセッション内のアプリケーションにコピーするには

1. xvで情報をコピーします。
2. [xcapture] ダイアログボックスで、[xvから]、[ICAへ] の順にクリックします。ボタンの色が変わり、情報を処理していることが示されます。

3. 転送が完了したら、コネクションウィンドウから起動したアプリケーションで適切なコマンドを使用して、情報を貼り付けます。

ICAセッション内のアプリケーションからxvにコピーするには

1. ICAセッション内のアプリケーションで、情報をコピーします。
2. [xcapture] ダイアログボックスで、[ICAから]、[xvへ]の順にクリックします。ボタンの色が変わり、情報を処理していることが示されます。
3. 転送が完了したら、コピーした情報をxv内に貼り付けます。

ユーザーの自動再接続

このトピックでは、HDX Broadcastのクライアント自動再接続機能について説明します。この機能は、HDX Broadcastセッション画面の保持機能と組み合わせて使用することをお勧めします。

ネットワークの状態が不安定であったり、待ち時間が非常に変わりやすかったりする場合、また、無線デバイスの伝送距離に制限がある場合に、セッションが切断されてしまうことがあります。HDX Broadcastのクライアント自動再接続機能では、ネットワークの問題などによって切断されたセッションをCitrix Receiverが検出すると、そのセッションに自動的に再接続します。

この機能がサーバーで有効になっていると、ユーザーは作業を続けるために手動で再接続する必要がありません。Citrix Receiverは、セッションへの接続に成功するかユーザーがキャンセルするまで設定した回数再接続を試行します。サーバー側でユーザー認証を要求する設定になっている場合、再接続時にユーザーの資格情報を入力するためのダイアログボックスが得きます。ユーザーがセッションからログオフしないでアプリケーションを終了してセッションを切断した場合、自動再接続は行われません。自動再接続は、ユーザーによる切断以外の理由で切断されたセッションに対してのみ行われます。

デフォルトでは、Citrix Receiverは30秒間待機してから切断したセッションに再接続を実行し、またこれを3回試行します。

AccessGatewayを介して接続すると、ACRは使用できません。ネットワークの障害から保護するため、AccessGateway上で構成するだけでなく、サーバーとクライアントの両方でもセッション画面の保持を有効にしておきます。

HDX Broadcastのクライアント自動再接続の構成手順については、XenAppおよびXenDesktopのドキュメントを参照してください。

セッション画面の保持

このトピックは、デフォルトで有効になっているHDX Broadcastセッション画面の保持機能について説明します。

HDX Broadcastセッション画面の保持を有効にすると、公開アプリケーションへの接続が中断しても、ユーザーのセッション画面には作業中の画面が保持され、表示されたままになります。たとえば、ワイヤレス接続でのセッション中にトンネル障害物などの影響で接続に障害が生じた場合、ユーザーデバイス上の画面表示が停止します。トンネルから出るなどして再接続されると、ユーザーはそのまま作業を続行できます。接続が切断している間、ユーザーのデータのすべて、キー入力、およびその他の操作は記憶され、アプリケーションは応答しないまま表示されます。接続が再度確立されると、これらすべての操作がアプリケーション内に反映されます。

クライアント自動再接続とセッション画面の保持が構成されているとき、接続の問題がある場合にはセッションの画面保持を優先して実行されます。セッション画面の保持は既存のセッションへの接続を再度確立しようとします。接続の問題を検出するには最大で25秒かかることがあり、次に再接続するための構成可能な期間（デフォルトは180秒）を指定します。セッション画面の保持が再接続に失敗すると、クライアント自動再接続が再接続を試みます。

HDX Broadcastセッション画面の保持を有効にすると、セッションの通信に使用されるデフォルトのポートは、1494から2598に変更されます。

Citrix Receiverのユーザーには、サーバー側の設定が自動的に適用されます。詳しくは、XenAppおよびXenDesktopのドキュメントを参照してください。

Important

HDX Broadcastセッション画面の保持では、サーバー上で（ポリシー設定を使って）Common Gateway Protocolを有効にする必要があります。Common Gateway Protocolを無効にすると、HDX Broadcastセッション画面の保持も無効になります。

相対マウス

相対マウスのサポートでは、マウスの絶対位置ではなく相対位置を読み取るオプションを提供します。この機能は、マウスの絶対位置ではなく相対位置の入力を必要とするアプリケーションに必要です。

注意

この機能は、XenAppまたはXenDesktop 7.8以降を実行しているセッションでのみ使用できます。デフォルトでは、無効になっています。

この機能を有効にするには、以下の手順に従います。

ファイル\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniの[WFClient]セクションにエントリRelativeMouse=1を追加します。

これによって、機能が有効になります。有効にするまでは、無効になっています。

ヒント

相対マウス機能を有効にする方法について詳しくは、セクション「[Alternative Relative Mouse values](#)」を参照してください。

この機能を有効にするには、以下の手順に従います。

「Ctrl/F12」と入力します。

機能が有効になった後、再度「Ctrl/F12」と入力し、クライアントでサーバーポインターの位置を同期します（サーバーおよびクライアントのポインター位置は、相対マウスを使用する場合には同期しません）。

この機能を無効にするには、以下の手順に従います。

「Ctrl-Shift/F12」と入力します。

この機能は、セッションウィンドウからフォーカスが失われた場合もオフになります。

相対マウスのその他の値

別の方法として、相対マウスで次の値も使用できます。

- RelativeMouse=2。機能を有効にし、セッションウィンドウがフォーカスを取り戻すとアクティブになります。
- RelativeMouse=3。機能を有効にし、アクティブにし、常時アクティブ状態に維持します。

- **RelativeMouse=4**。クライアント側のマウスポインターが非表示または表示のときに、機能を有効または無効にします。このモードは、ファーストパーソンゲーム形式のアプリケーションインターフェイスで相対マウスを自動的に有効または無効にする場合に適しています。

キーボードコマンドを変更するには、以下のような設定を設定を追加します。

- **RelativemouseOnChar=F11**
- **RelativeMouseOnShift=Shift**
- **RelativemouseOffChar=F11**
- **RelativeMouseOffShift=Shift**

RelativemouseOnCharおよび**RelativemouseOffChar**でサポートされる値は、Citrix Receiverインストールツリーの `config/module.ini` ファイルの [Hotkey Keys] に一覧があります。**RelativeMouseOnShift**および**RelativeMouseOffShift**の値は、使用される識別子キーを設定し、[Hotkey Shift States] 見出しの下に一覧があります。

セキュア

Mar 23, 2018

ここでは次のことについて説明します。

- [プロキシサーバー経由の接続](#)
- [Secure GatewayまたはCitrix SSL Relayの使用](#)
- [NetScaler Gateway経由の接続](#)

サーバーファームとCitrix Receiver間の通信を保護するには、以下の一連のセキュリティ技術を使用します。

- SOCKSプロキシサーバーまたはSecureプロキシサーバー（セキュリティプロキシサーバー、HTTPSプロキシサーバーまたはTLSトンネリングプロキシサーバーとも呼ばれます）。プロキシサーバーでネットワークから外部へのアクセスや外部からネットワークへのアクセスを制限して、Receiverとサーバー間の接続を制御できます。Receiverは、SOCKSプロトコルとSecureプロキシプロトコルをサポートしています。
- Secure GatewayまたはTransport Layer Security (TLS) プロトコルによるSSL Relayソリューション。TLS Version 1.0から1.2がサポートされます。
- ファイアウォール。ネットワークファイアウォールは、送信先アドレスとポート番号に基づいてパケットを通過させたりブロックしたりできます。サーバーの内部IPアドレスを外部インターネットアドレスにマップするネットワークファイアウォール（つまりNAT（Network Address Translation：ネットワークアドレス変換））を介してReceiverを使用する場合は、外部アドレスを構成します。

プロキシサーバー経由の接続

プロキシサーバーは、ネットワーク内部から外部への、および外部から内部へのアクセスを制限して、Citrix ReceiverとCitrix XenAppやCitrix XenDesktopとの間の接続を制御するために使います。Citrix Receiverは、SOCKSプロトコル、Secure GatewayおよびCitrix SSL Relay、Secureプロキシプロトコル、およびWindows NTチャレンジ/レスポンス（NTLM）認証をサポートしています。

サポートされているプロキシの種類の一覧は、Trusted_Regions.iniとUntrusted_Regions.iniの内容によってAuto、None、およびWpadの種類に制限されます。SOCKS、Secure、またはScriptといった種類を使用する必要がある場合は、それらのファイルを編集して、許可された一覧へ追加の種類を追加します。

注意

確実に安全な接続を実行するには、TLSを有効にします。

セキュアプロキシサーバー経由の接続

Secureプロキシプロトコルを使用する接続を構成して、Windows NTチャレンジ/レスポンス（NTLM）認証のサポートを有効にできます。このプロトコルを使用できる場合は、追加構成なしで実行時にこれが検出され使用されます。

Important

NTLMをサポートするには、ユーザーデバイスにOpenSSLライブラリのlibcrypto.soをインストールする必要があります。このライブラリは、多くの場合Linuxディストリビューションに含まれていますが、新しいウィンドウで必要な場合、<http://www.openssl.org/>からダウンロードすることもできます。

Secure GatewayまたはCitrix SSL Relayの使用

ReceiverをSecure GatewayまたはCitrix SSL (Secure Sockets Layer) Relayと共に使うことができます。ReceiverはTLSプロトコルをサポートします。TLS (Transport Layer Security) は、標準化されたSSLプロトコルの最新版です。IETF (Internet Engineering TaskForce) が、SSLの公開標準規格の開発をNetscape Communications社から引き継いだ時に、SSLという名前をTLSに変更しました。TLSは、サーバーの認証、データの暗号化、メッセージの整合性の確認を行って、データ通信を保護します。米国政府機関をはじめとする組織の中には、データ通信を保護するためにTLSの使用を義務付けているところもあります。このような組織では、さらにFIPS 140 (Federal Information Processing Standard) などのテスト済み暗号化基準の使用を義務付けられる場合があります。FIPS 140は、暗号化の情報処理規格です。

Secure Gatewayを経由する接続

Secure Gatewayを通常モードまたはリレーモードのどちらかで使用して、Citrix Receiverとサーバーの間に保護された通信チャネルを提供できます。Secure Gatewayを通常モードで使用し、ユーザーがWeb Interface経由で接続する場合は、Citrix Receiver側での構成は不要です。

Citrix ReceiverがSecure Gatewayサーバーと通信する時は、リモートのWeb Interfaceサーバーで構成されている設定が使用されます。Citrix Receiverをサポートするプロキシサーバー設定の構成については、[Web Interface](#)のドキュメントを参照してください。

Secure Gateway Proxyがセキュリティで保護されたネットワーク内のサーバーにインストールされている場合は、Secure Gateway Proxyをリレーモードで使用できます。詳しくは、[XenApp \(Secure Gateway\)](#) のドキュメントを参照してください。

ただし、リレーモードで使用する場合、Secure Gatewayサーバーはプロキシサーバーとして機能するため、Citrix Receiverで次の項目を構成する必要があります。

- Secure Gatewayサーバーの完全修飾ドメイン名。
- Secure Gatewayサーバーのポート番号。Secure Gateway, Version 2.0では、リレーモードはサポートされていません。

完全修飾ドメイン名には、以下の3つの要素を順に指定する必要があります。

- ホスト名
- サブドメイン名
- 最上位ドメイン名

たとえば、my_computer.my_company.comは完全修飾ドメイン名です。ホスト名 (my_computer)、サブドメイン名 (my_company)、最上位ドメイン名 (com) が順に指定されています。一般的には、サブドメイン名と最上位ドメイン名の組み合わせ (my_company.com) をドメイン名といいます。

Citrix SSL Relayを使用する接続

デフォルトではCitrix SSL Relayのリスナーポートとして、TLSで保護された通信の標準ポートであるXenAppサーバーのTCPポート443が使用されます。SSL Relayは、SSL/TLS接続要求を受信すると、その要求を解読してからサーバーに転送します。

443以外のリスナーポートを構成する場合、Citrix Receiverに対して非標準のリスナーポート番号を指定する必要があります。

Citrix SSL Relayを使用すると、次の通信のセキュリティを保護できます。

- TLSが有効なユーザーデバイスとサーバー間の通信。
- Web InterfaceによるXenAppサーバーとWebサーバー間の通信。

SSL Relayによるセキュリティ機能については、XenAppのドキュメントを参照してください。TLS暗号化を使用するためのWeb Interfaceの構成については、[Web Interface](#)のドキュメントを参照してください。

TLSの構成および有効化

[WFClient]セクションに次の構成オプションを追加することでネゴシエートできるTLSプロトコルのバージョンを制御できます。

- MinimumTLS=1.0
- MaximumTLS=1.2

これらはデフォルト値で、コードで設定されています。必要に応じてこれを変更します。

注：これらの値は、プログラムの開始時に必ず読み取られます。selfserviceまたはstorebrowseを開始した後でこれらの値を変更する場合は、「**killall AuthManagerDaemon ServiceRecord selfservice storebrowse**」と入力する必要があります。

注：Citrix Receiver for LinuxではSSLv3プロトコルは使用できません。

Citrix Receiver for Linuxは、DTLS 1.0およびTLS 1.0、1.1、1.2と次の暗号の組み合わせをサポートします。

- RSA+AES256-SHA (RSAによる鍵交換、AES 256による暗号化、SHA-1によるダイジェスト)
- RSA+AES256-SHA256 (RSAによる鍵交換、AES 256による暗号化、SHA-256によるダイジェスト)
- RSA+AES128-SHA (RSAによる鍵交換、AES 128による暗号化、SHA-1によるダイジェスト)
- RSA+DES-CBC3-SHA (RSAによる鍵交換、トリプルDESによる暗号化、SHA-1によるダイジェスト)
- RSA+RC4128-MD5 (RSAによる鍵交換、RC4 128による暗号化、MD5によるダイジェスト)
- RSA+RC4128-SHA (RSAによる鍵交換、RC4 128による暗号化、SHA-1によるダイジェスト)
- RSA+AES128_GCM+SHA256 (RSAによる鍵交換、AES 128による暗号化、SHA-256によるダイジェスト)
- RSA+AES256_GCM+SHA384 (RSAによる鍵交換、AES 256による暗号化、SHA-384によるダイジェスト)
- TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_256_GCM_SHA384 (楕円曲線ディフィーヘルマン鍵共有、RSAによる認証、AES 256およびGCM SHA 384によるダイジェスト)
- TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA384 (楕円曲線ディフィーヘルマン鍵共有、認証用のRSA、AES 256およびCBC SHA 384によるダイジェスト)
- TLS_RSA_AES256_CBC_SHA256 (RSAによる認証、AES 256およびCBC SHA 256によるダイジェスト)

上に挙げた標準SSL/TLS暗号の組み合わせで有効な暗号キーサイズは、以下のように定義されています。

- RC4アルゴリズム：128ビット (ストリーム暗号)
- トリプルDESアルゴリズム：3×64ビット (有効サイズ、3×56 = 168ビット) (ブロックサイズ、64ビット)
- AESアルゴリズム：128ビットまたは256ビット (ブロックサイズ、128ビット)
- RSA鍵交換および認証では、サポートされる鍵長 (モジュラス) は1024ビットから4096ビットの範囲です。
- ECDH鍵交換の場合、サポートされる楕円曲線は、NIST P-256およびNIST P-384 (256および384ビットの鍵長) です。

暗号の組み合わせセットを選択するには、[WFClient]セクションで次の構成オプションを追加します。

- SSLCiphers=GOV

これがデフォルト値です。その他の認識される値は、COMおよびALLです。

注：TLSバージョン構成のように、selfserviceまたはstorebrowseを開始した後にこれらの値を変更する場合は、「**killall AuthManagerDaemon ServiceRecord selfservice storebrowse**」と入力する必要があります。

ユーザーデバイスへのルート証明書のインストール

TLSを使うには、サーバー証明書の証明機関の署名を確認するためのルート証明書がユーザーデバイスにインストールされている必要があります。Citrix Receiverでは、デフォルトで以下の証明書がサポートされます。

| 証明書 | 証明機関 |
|--------------------------|--|
| Class4PCA_G2_v2.pem | VeriSign Trust Network |
| Class3PCA_G2_v2.pem | VeriSign Trust Network |
| BTCTRoot.pem | Baltimore Cyber Trust Root |
| GTECTGlobalRoot.pem | GTE Cyber Trust Global Root |
| Pcs3ss_v4.pem | Class 3 Public Primary Certification Authority |
| GeoTrust_Global_CA.pem | GeoTrust |
| DigiCertGlobalRootCA.pem | DigiCert Global Root CA |

これらの証明書を使用する場合は、ルート証明書をユーザーデバイスにインストールする必要はありません。ただし、上記の証明機関以外の証明書を使用する場合は、該当する証明機関からルート証明書を取得して、各ユーザーデバイスにインストールする必要があります。

Citrix Receiver for Linuxは、ビット長1024、2048、3072のRSAキーをサポートします。さらに、ビット長4096のRSAキーを持つルート証明書がサポートされます。

注：Receiver for Linux 13.0はローカルデバイスの`cx_rehash`を使用します。Version 13.1以降は、次の手順で説明されている`ctx_rehash`ツールを使用します。

ルート証明書の使用

証明機関により発行され、ユーザーデバイスに信頼されていないサーバー証明書を認証するには、StoreFrontストアを追加する前に以下の手順を行ってください。

1. PEM形式のルート証明書を入手します。
ヒント：PEM形式の証明書が見つからない場合は、`openssl`ユーティリティを使用してCRT形式の証明書をPEMファイルに変換できます。
2. パッケージをインストールしたユーザー（通常はルート）が、以下の手順を実行します。
 1. ルート証明書を`$ICAROOT/keystore/cacerts`にコピーします。
 2. 次のコマンドを実行します。
`$ICAROOT/util/ctx_rehash`

中間証明書の使用

お使いのStoreFrontサーバーが使用している証明書と一致する中間証明書を提供できない場合、または中間証明書をインストールしてスマートカードユーザーをサポートする必要がある場合、StoreFrontストアを追加する前に次の手順を実行します。

1. PEM形式の中間証明書を別途入手します。

ヒント：PEM形式の証明書が見つからない場合は、opensslユーティリティを使用してCRT形式の証明書をPEMファイルに変換できます。

2. パッケージをインストールしたユーザー（通常はルート）が、以下の手順を実行します。

1. ファイルを\$ICAROOT/keystore/intcertsにコピーします。
2. パッケージをインストールしたユーザーとして次のコマンドを実行します。
\$ICAROOT/util/ctx_rehash

スマートカードサポートの有効化

Citrix Receiver for Linuxは、さまざまな種類のスマートカードリーダーをサポートしています。サーバーとReceiverの両方でスマートカードのサポートを有効にすると、以下の機能が有効になります。

- スマートカードによるログオン認証 スマートカードを使って、Citrix XenAppサーバーにログオンするユーザーを認証します。
- スマートカード対応アプリケーションのサポート。スマートカード対応の公開アプリケーションを使って、ローカルのスマートカードリーダーにアクセスできます。

スマートカードのデータは機密性の高い情報であるため、TLSなどの信頼された証明機関から認証されたセキュリティアーキテクチャを経由して転送する必要があります。

次に、スマートカードサポートを使用するための条件を示します。

- スマートカードリーダーと公開アプリケーションが、業界標準のPC/SC規格に準拠している必要があります。
- 使用するスマートカードに適切なドライバーをインストールする必要があります。
- PC/SC Liteパッケージをインストールする必要があります。
- ミドルウェアがPC/SCを使ってスマートカードにアクセスするためのpcscdデーモンをインストールして実行する必要があります。
- 64ビットシステムには、64ビットと32ビットの両バージョンの"libpccsc-lite1"パッケージがある必要があります。

重要： SunRayサーバーソフトウェアVersion 2.0以降でSunRayターミナルを使用している場合は、PC/SCバイパスパッケージをインストールする必要があります。このパッケージは、SunのWebサイト (<http://www.sun.com>) からダウンロードできます。

サーバー上でのスマートカードサポートの構成について詳しくは、[XenAppおよびXenDesktop](#)のドキュメントを参照してください。

NetScaler Gateway経由の接続

Citrix NetScaler Gateway（旧称「Access Gateway」）を使用すると、StoreFrontストアへの接続を保護して、デスクトップやアプリケーションへのユーザーアクセスを詳細に管理できます。

NetScaler Gateway経由でデスクトップやアプリケーションに接続するには

1. 管理者により提供されたNetScaler GatewayのURLを指定します。これを行うには、以下のいずれかの手順に従います。
 - セルフサービスユーザーインターフェイスの初回使用時に、[アカウントの追加] ダイアログボックスでURLを入力します。
 - セルフサービスユーザーインターフェイスの初回使用時以降は、[環境設定] > [アカウント] > [追加] の順に選択

します。

- storebrowseコマンドで接続する場合は、コマンドラインにURLを入力します。URLにより、ゲートウェイと、必要に応じて特定のストアが指定されます。

- Receiverで検出された最初のストアに接続されるようにするには、URLを `https://gateway.company.com`形式で指定します。
- 特定のストアに接続する場合は、URLを `https://gateway.company.com?`形式で指定します。このURLには等号 (=) を含めないでください。storebrowseコマンドで特定のストアに接続する場合は、URLを引用符で囲んで指定します。

2. 資格情報の入力を確認するメッセージが表示されたら、ユーザー名、パスワード、およびセキュリティトークンを入力します。手順について詳しくは、NetScaler Gatewayのドキュメントを参照してください。認証処理が完了すると、デスクトップまたはアプリケーションが表示されます。

トラブルシューティング

Mar 23, 2018

ここでは、管理者によるCitrix Receiver for Linuxのトラブルシューティングに役立つ情報について説明します。

- [接続の問題](#)
- [表示の問題](#)
- [ブラウザの問題](#)
- [その他の問題](#)
- [接続構成エラー](#)
- [wfclient.ini構成エラー](#)
- [PACファイルエラー](#)
- [その他のエラー](#)
- [Citrixテクニカルサポートへの診断情報の送付](#)

接続の問題

以下の接続関連の問題が確認されています。

公開リソースまたはデスクトップセッションに接続できない

Windowsサーバーへの接続を確立している時に、ダイアログボックスに「サーバーxxxに接続しています」というメッセージが表示されて接続画面が開かない場合は、サーバーのクライアントアクセスライセンス（CAL）の構成を確認する必要があります。ライセンスについて詳しくは、「[ライセンス管理](#)」を参照してください。

セッションに再接続できない場合がある

Receiverからの要求よりも多いウィンドウの色数でセッションを再接続しようとする、接続に失敗する場合があります。これは、サーバーのメモリ不足が原因です。再接続に失敗した場合、Receiverはセッションで元の色数を使おうとします。再接続した場合は、サーバーは新しいセッションを要求した色数で開始しようとし、元のセッションは切断されたままになります。ただし、サーバーのメモリが依然不足している場合は2つ目のセッションも失敗する可能性があります。

サーバー名を省略せずに指定してもサーバーに接続できない

ネットワークでDNS（ドメインネームシステム）を構成すると、接続するサーバー名を解決できるようになります。構成されたDNSがない場合は、サーバー名をIPアドレスに解決することができません。または、接続先サーバーの名前の代わりにIPアドレスを指定することもできます。ただし、TLS接続では、IPアドレスではなく完全修飾ドメイン名の指定が必要です。

接続時に「プロキシを検出できません。」というエラーメッセージが表示される

接続が自動プロキシ検出を使用するように構成されていて、接続時に「プロキシを検出できません。JavaScriptエラーです。」というエラーメッセージが表示される場合は、\$ICAROOT/ut/il内にwpad.datファイルをコピーします。次のコマンドを実行します。ここで、hostnameは接続するサーバーのホスト名です。

```
cat wpad.dat | ./pacexec pac.js FindProxyForURL http://hostname hostname 2>&1 | grep "undeclared variable"
```

コマンドを実行しても出力がない場合は、サーバーのwpad.datファイルに調査が必要な深刻な問題があります。ただし、「assignment to undeclared variable ...」のような出力がある場合は問題を解決できます。pac.jsを開き、出力内に表示されている各変数について、ファイルの最初に次の形式の行を追加します。ここで、「...」は変数名です。

var ...;

セッションの開始に時間がかかる

マウスを動かすまでセッションが開始されないことがあります。Linuxカーネルでの乱数生成に問題があると、この問題が発生します。この問題を回避するには、run an entropy-generating daemon such as rngd (ハードウェアベース) または haveged (Magic Software) などのエントロピー生成デーモンを実行してください。

SSL接続の暗号の組み合わせが弱い

TLS接続を確立すると、Receiver for Linux 13.7ではより最新の、制限された暗号の組み合わせセットがデフォルトで提供されます。

古い暗号の組み合わせを必要とするサーバーに接続する場合、[WFClient]セクションで構成オプションをSSLCiphers=ALLに設定する必要があります。

UDTプロトコルを使用すると、次のエラーメッセージが表示される：“...”への接続が失われました

これは、UDTの最大転送単位がデフォルトの1500バイトより小さいルーター経由の接続で発生することがあります。次の両方を実行する必要があります。

- \$ICAROOT/config/All_Regions.iniおよび\$HOME/.ICAClient/All_Regions.iniでudtMSSエントリのコメントアウトを解除します
- 構成ファイルでudtMSS=1000を設定します

接続エラー

接続エラーでは、さまざまな異なるエラーダイアログが表示されます。以下はその例です。

- 接続エラー：認証サービスとの通信中にプロトコルエラーが発生しました
- 認証サービスにアクセスできませんでした
- このサーバーアドレスでアカウントを追加することはできません

こうしたエラーの原因は、以下のようにさまざまです。

- ローカルコンピューターとリモートコンピューターが共通のTLSプロトコルをネゴシエートできないとき。詳しくは、「[TLSの構成および有効化](#)」を参照してください。
- リモートコンピューターのTLS接続に古い暗号の組み合わせが必要な場合。この場合、接続の再開前に、構成ファイルの[WFClient]セクションで構成オプションをSSLCiphers=ALLに設定し、**killall AuthManagerDaemon ServiceRecord selfservice storebrowse**を実行します。
- リモートコンピューターが不適切にクライアント証明書を要求する場合。IISはCitrix/Authentication/Certificateの証明書のみを許可または要求する必要があります。
- その他の問題。

表示の問題

スクリーンティアリングが起きるのはなぜですか？

スクリーンティアリングは、横ブロックに画面上で複数の異なるフレームが同時に積み重なって表示される時に発生します。画面上のコンテンツを迅速に大幅に変更するとよく見られる現象です。データはティアリングを避ける方法でVDAでキャプ

チャされ、ティアリングを起こさない方法でクライアントに渡されますが、X11 (Linux/Unixグラフィックスサブシステム) によって、ティアリングを防ぐ方法で画面に描画する一貫した方法が提供されません。

スクリーンティアリングを防ぐには、アプリケーションの描画と画面の描画を同期化する標準的なアプローチをお勧めします。つまり、vsvncによる次のフレームの描画開始を待機します。Linuxを使用する場合、クライアントに搭載されているグラフィックスハードウェアおよび使用するウィンドウマネージャーに応じて、多くの選択肢があります。これらの選択肢は2つのソリューションに分けられます。

- X11 GPU設定
- コンポジションマネージャーを使用する

X11 GPU構成

Intel HDグラフィックスについては、以下の内容でxorg.conf.dに**20-intel.conf**というファイルを作成します。

```
Section "Device"
    Identifier "Intel Graphics"
    Driver "intel"
    Option "AccelMethod" "sna"
    Option "TearFree" "true"
EndSection
```

Nvidiaグラフィックスについては、お使いの構成に対応する"MetaModes"オプションを含む、xorg.conf.dフォルダーでファイルを見つけます。コンマ区切りの使用されるMetaModeごとに、以下を追加します。

```
{ForceFullCompositionPipeline = On}
```

次に例を示します。

```
Option "MetaModes" "DFP-0: 1920x1200 +0+0 {ForceFullCompositionPipeline = On}"
```

注：異なるLinuxディストリビューションはxorg.conf.dに対して異なるパスを使用します。たとえば、/etc/X11/xorg.conf.d、または、/user/share/X11/xorg.conf.d。

コンポジションマネージャー

以下を使用します。

- Compiz (Ubuntu Unityに組み込み)。ComprizConfig Settings Managerをインストールする必要があります。

"ComprizConfig Settings Manager"を実行

"General->Composition"で"Undirect Fullscreen Windows"をチェック解除

注：ComprizConfig Settings Managerは注意して使用してください。誤って値を変更するとシステムが起動しなくなる可能性があります。

- Compton (アドオンユーティリティ)。詳しくは、Comptonのmanページ/ドキュメントを参照してください。たとえば、次のコマンドを実行します。

```
compton --vsync opengl --vsync -aggressive
```

キーボードの使用時に不正なキーストロークが表示される

英語以外のキーボードを使用している場合、画面表示がキーボード入力と一致しないことがあります。この場合、使用しているキーボードの種類とレイアウトを指定する必要があります。キーボードの指定については、「[キーボードの構成](#)」を参照してください。

シームレスウィンドウの移動時に過度に再描画される

ウィンドウマネージャーの種類によっては、ウィンドウを移動すると新しいウィンドウ位置が常にサーバーにレポートされ

ため、再描画が過度に発生することがあります。ウィンドウを移動した時にウィンドウ枠のみを描画するモードに切り替えると、この問題は解決します。

アイコンの互換性

Receiverは、ほとんどのウィンドウマネージャーと連携するウィンドウアイコンを作成しますが、ICCCM (Inter-Client Communication Convention Manual: クライアント間通信規約マニュアル) に準拠していません。

ICCCMに完全に準拠するには

1. 構成ファイルwfclient.iniを開きます。
2. [WFClient]セクションで次のように行を編集します: UseIconWindow=True
3. ファイルを保存して閉じます。

カーソルの表示に問題がある

カーソルの色が背景色と同じまたは似ている場合には、見分けるのが難しくなることがあります。この問題は、カーソルを黒または白にすることで解決できます。

カーソルの色を変更するには

1. 構成ファイルwfclient.iniを開きます。
2. 次のいずれかの行を[WFClient]セクションに追加します。
CursorStipple=ffff,ffff (カーソルを黒で表示)

CursorStipple=0,0 (カーソルを白で表示)

3. ファイルを保存して閉じます。

画面上で色がちらつく

接続ウィンドウの内/外にマウスを移動させると、フォーカスのないウィンドウの色がちらつくことがあります。これは、PseudoColor表示でX Windows Systemを使用する場合の制限事項として知られています。可能な場合、問題のある接続ではより色数の多いウィンドウを使用してください。

True Color表示による色の高速変更

サーバーに接続する時、ウィンドウの色数として256色を選択できます。256色を選択する場合は、ビデオカードがパレットをサポートしていて、アプリケーションでパレットの色を高速変更し、アニメーション表示が可能であることが前提になります。

True Color表示では、パレットを高速変更してアニメーションを生成する機能はエミュレートできません。ソフトウェアでのこの機能のエミュレーションは相対的に時間がかかり、多くのネットワークトラフィックが費やされます。この問題を解決するために、Receiverは高速パレット変更をバッファに格納し、数秒ごとに実際のパレットを更新するように設定されています。

日本語を使用する場合の問題

Receiverでは、日本語文字にEUC-JPまたはUTF-8文字エンコードが使用されます。一方、サーバー側ではShift-JIS文字エンコードが使用されます。Receiverでは、これらの文字セット間でのエンコーディングが実行されません。このため、ファイルに日本語の名前を使用し、クライアントドライブマッピングを使用してローカルコンピューターにそのファイルを保存する場合、

ローカルコンピューターではその日本語ファイル名が正しく表示されません。逆に、ローカルで日本語名のファイルを作成し、クライアントドライブマッピングを使用してサーバーに保存した場合、サーバー上でこのファイル名を正しく表示できません。この問題は、拡張パラメーターパス機能で 사용되는パラメーターの日本語でも発生します。

セッションを複数のモニターに表示する

全画面モードのセッションは、すべてのモニターの表示領域全体に表示されます。また、コマンドラインオプションとして `-span` を使用することもできます。これにより全画面セッションを複数モニターにまたがって表示できます。

Desktop Viewer ツールバーの機能によって、モニターを横断したマルチモニターサポートなど、ウィンドウモードと全画面モードのセッションの切り替えることができます。詳しくは、「[操作性の向上](#)」を参照してください。

重要： `-span` は、シームレスセッションや標準のウィンドウセッション、またそれらが混在するセッションには適用されません。

`-span` オプションは、以下のように指定します。

```
-span [h][o][a][[.]]
```

`h` を指定すると、モニターの一覧が `stdout` に出力されます。また、この値のみを指定した場合、モニター一覧の出力後に `wfica` が終了します。

`o` を指定すると、セッションウィンドウのリダイレクト属性が `override-redirect` になります。

注意： この値の使用は推奨されません。これは、非協調性のウィンドウマネージャーで使用するための最後の手段です。セッションウィンドウはウィンドウマネージャーで非表示となり、アイコンもなく、再スタックできません。セッションを終了することによってのみウィンドウを削除できます。

`a` を指定すると、すべてのモニターを使用してセッションが表示されます。

`-span` オプションの残りの値は、使用するモニターの番号として処理されます。特定のモニターを使用する場合は単一の値 () を指定します。また、表示領域の左上と右下のモニターを指定 (,) したり、上端、下端、左端、および右端のモニターを指定 (, ,) したりできます。

`wfica` コマンドでは、(`o` を指定しない場合) `_NET_FULLSCREEN_MONITORS` メッセージによりウィンドウマネージャーから適切なウィンドウレイアウトが取得されます (サポートされる場合)。それ以外の場合は、サイズおよび位置に関するヒントを使用して必要なレイアウトを要求します。

ウィンドウマネージャーがこのクライアントメッセージをサポートするかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
xprop -root | grep _NET_WM_FULLSCREEN_MONITORS
```

出力がない場合、サポートされません。サポートされないウィンドウマネージャーでは、ウィンドウリダイレクトの上書き (`override-redirect`) が必要な場合があります。 `-span o` を使って、 `override-redirect` ウィンドウをセットアップできます。

コマンドラインからセッションを複数のモニターにまたがって実行するには

1. コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。
`/opt/Citrix/ICAClient/wfica -span h`

ユーザーデバイスに現在接続しているモニターの番号の一覧が `stdout` に出力され、 `wfica` が終了します。

2. これらのモニターの番号をメモしておきます。
3. コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。

```
/opt/Citrix/ICAClient/wfica -span [w[,x[,y,z]]]
```

ここでw、x、y、およびzは、手順1でメモしたモニターの番号です。特定のモニターを使用する場合は単一の値 (w) を指定します。また、表示領域の左上と右下のモニターを指定 (w,x) したり、上端、下端、左端、および右端のモニターを指定 (w,x,y,z) したりできます。

重要：selfserviceを起動したりWebブラウザでWeb interfaceに接続したりする前に、WFICA_OPTS変数を定義しておく必要があります。これを行うには、プロファイルファイル（通常は、\$HOME/.bash_profileまたは\$HOME/.profile）を編集して、WFICA_OPTS変数を定義する行を追加します。例：

```
export WFICA_OPTS="-span a"
```

この変更は、XenAppおよびXenDesktopセッションの両方に適用されます。

selfserviceまたはstorebrowseを既に開始している場合は、新しい環境変数を適用するために開始したプロセスを削除する必要があります。次のコマンドで削除します：

```
killall AuthManagerDaemon ServiceRecord storebrowse
```

全画面セッションからローカルアプリケーションまたはほかのセッションに切り替えることができない

この問題は、クライアント側のシステムUIが非表示になっていて、キーボード透過機能が通常のキーボードコマンド（Alt+Tabなど）を無効にし、代わりにサーバーにコマンドを送るために発生します。

この問題を回避するには、フォーカスがセッションウィンドウに移るまでCtrl+F2キーを押してキーボード透過機能を一時的にオフにします。また代替策として、\$ICAROOT/config/module.iniでTransparentKeyPassthroughをNoに設定します。これによりキーボード透過機能は無効になりますが、All_regions.iniファイルにこの設定を追加してICAファイルを上書きする必要があります。

ブラウザの問題

Windowsセッション内のリンクをクリックすると、コンテンツがクライアントコンピュータのWebブラウザで表示される

サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクトは、wfclient.iniで有効になっています。このため、ローカルのアプリケーションが実行されます。サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクト機能を無効にするは、「[サーバーからクライアントへのコンテンツリダイレクトのセットアップ](#)」を参照してください。

公開リソースにアクセスする時に、Webブラウザにファイルの保存ダイアログボックスが表示される

FirefoxやChrome以外のWebブラウザでは、公開リソースに接続するための設定が必要な場合があります。Web Interfaceを介して接続する場合、リソースの一覧が表示されたWeb Interfaceのページにアクセスできる場合があります。公開されているリソースの一覧からアイコンをクリックしてリソースにアクセスしようとする、ICAファイルの保存を確認するメッセージが表示されることがあります。

Mozilla、Firefox、Netscape以外のWebブラウザを構成するには

Webブラウザにより詳細は異なりますが、WebブラウザのMIMEタイプをセットアップして、MIMEタイプapplication/x-icaまたはICAファイルが\$ICAROOT/wficaにより実行されるように設定します。

インストーラーでサポートされないWebブラウザ

特定のWebブラウザで問題が生じる場合、setupwfcを実行する前に環境変数BROWSERを設定して必要なWebブラウザのローカルパスや名前を指定してください。

Firefoxでデスクトップまたはアプリケーションを起動しても何も実行されない

ICAプラグインを有効にしてください。

FirefoxでICAプラグインが有効になっているがデスクトップおよびアプリケーションセッションが開始されない

ICAプラグインを無効にしてください。

その他の問題

そのほか、以下の問題が確認されています。

サーバーがReceiverにセッションを閉じる指示をしたかどうかを確認する

wficaプログラムを使って、セッションを中断するコマンドをサーバーからいつ受信したのか、ログを記録できます。

Syslogシステムを介してこの情報を記録するには、値を6に設定した*SyslogThreshold*を構成ファイルの[WFClient]セクションに追加します。これにより、LOG_INFO以上の優先度のメッセージのログが記録されます。*SyslogThreshold*のデフォルト値は4 (LOG_WARNING) です。

同様に、*wfica*が情報を標準のエラーに送信するようにするには、値を6に設定した*PrintLogThreshold*を[WFClient]セクションに追加します。*PrintLogThreshold*のデフォルト値は0 (LOG_EMERG) です。

Syslogシステムの構成手順については、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

構成ファイルの設定が適用されない

設定を適用するには、wfclient.iniの各エントリに対応するエントリがAll_Regions.ini内に存在する必要があります。これに加えて、wfclient.iniの[Thinwire3.0]、[Client Drive]、および[TCP/IP]セクションについて、実行する設定に対してcanonicalization.ini内に対応するエントリが必要です。詳しくは、\$ICAROOT/configディレクトリ内のAll_Regions.iniおよびcanonicalization.iniファイルを参照してください。

シリアルポートにアクセスする公開アプリケーションの実行に問題がある

公開アプリケーションがシリアルポートにアクセスする必要がある場合、ポートがほかのアプリケーションによりロックされていると元のアプリケーションを実行できません (エラーメッセージの表示または非表示はアプリケーションにより異なる)。このような環境では、シリアルポートを一時的にロックしたり、シリアルポートをロックしたまま解除せずに終了したりしているアプリケーションがないかをチェックします。

この問題を解決するには、シリアルポートをブロックしているアプリケーションを終了します。UUCPスタイルのロックの場合は、アプリケーションの終了後にロックファイルが残る可能性があります。このロックファイルの場所は、使用しているオペレーティングシステムにより異なります。

Receiverを起動できない

Receiverを起動できず、「Application default file could not be found or is out of date」というメッセージが表示される場合は、環境変数ICAROOTが適切に定義されていません。デフォルト以外の場所にReceiverをインストールした場合は、環境変数

ICAROOTを定義する必要があります。この問題を解決するには、次のいずれかを実行してください。

- ICAROOTをインストールディレクトリとして定義する。

ICAROOT環境変数が正しく定義されているかどうかをチェックするには、Receiverをターミナルセッションから起動します。エラーメッセージが表示される場合は、ICAROOT環境変数が正しく定義されていません。

- Receiverをデフォルトの場所に再インストールする。Receiverのインストールについて詳しくは、「[インストールとセットアップ](#)」を参照してください。

以前デフォルトの場所にReceiverをインストールしていた場合は、再インストールする前に/opt/Citrix/ICAClienまたは\$HOME/ICAClient/platformディレクトリを削除する必要があります。

Citrix CryptoKit (旧称SSLSDK) またはOpenSSLのバージョン番号を確認する

実行中のCitrix SSLSDKまたはOpenSSLのバージョン番号を確認するには、次のコマンドを使用できます。

```
strings libctxssl.so | grep "Citrix SSLSDK"
```

また、AuthManagerDaemonまたはPrimaryAuthManager上でもこのコマンドを実行できます。

キーボードショートカットが正しく機能しない

ウィンドウマネージャーで同じキーボードショートカットが定義されている場合、セッションでのキーボードショートカットが正しく機能しない場合があります。たとえば、KDEウィンドウマネージャーでデスクトップ13~16に切り替えるためのキーの組み合わせである、Ctrl+Shift+F1~F4キーがこれに該当します。この問題を解決するには、以下の方法を使用します。

- ローカルのキーの組み合わせをサーバー側のキーの組み合わせにマップするトランスレートモードを使用します。たとえば、デフォルトのトランスレートモードでは、Ctrl+Shift+F1がサーバー側のAlt+F1にマップされています。これを変更しほかのローカルキーの組み合わせを使用するには、\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniの[WFClient]セクションを編集します。たとえば、次の変更によりローカルのAlt+Ctrl+F1がサーバー側のAlt+F1にマップされます。
 - Hotkey1Shift=Ctrl+ShiftをHotkey1Shift=Alt+Ctrlに変更する。
- キーの組み合わせをすべてサーバー側に直接送信するダイレクトモードを使用します。この場合、キーの組み合わせはローカルでは処理されません。ダイレクトモードを構成するには、\$HOME/.ICAClient/wfclient.iniの[WFClient]セクションで、TransparentKeyPassthroughをRemoteに設定します。
- ウィンドウマネージャー側のキーボードショートカットを再構成して競合を解消します。

リモートのクローアチア語キーボードを有効にする

クローアチア語キーボードレイアウトでリモートの仮想デスクトップにASCII文字が正しく送信されるようにするには、以下の手順に従います。

1. 適切な構成ファイルを開き、[WFClient]セクションのUseEUKSforASCIIでTrueを指定します。
2. UseEUKSで2を指定します。

クライアントで日本語キーボードを使用する

日本語キーボードの使用を構成するには、wfclient.ini構成ファイルで次のエントリを更新します。
KeyboardLayout=Japanese (JIS)

クライアントでABNT2キーボードを使用する

ABNT2キーボードの使用を構成するには、wfclient.ini構成ファイルで次のエントリを更新します。

KeyboardLayout=Brazilian (ABNT2)

ローカルキーボードの一部のキーが正常に機能しない

SICAROOT/config/module.iniの一覧で最適のサーバーレイアウトを選択します。

Windows Media Playerが特定のフォーマットのファイルを再生できない

要求されたフォーマットを処理するためのGStreamerプラグインがCitrix Receiverにないことがあります。この場合は通常、サーバーに別のフォーマットが要求されます。まれに、適正プラグインの初期チェックにおいて間違っって必要なプラグインが存在すると表示されることがあります。通常、この誤りは検出され、ファイルの再生中Windows Media Playerで問題が起こったことを示すエラーダイアログがサーバーに表示されます。Citrix Receiverにより件の形式は拒否されるため、セッション内ファイルの再生を再試行すると通常は正常に機能し、その結果、サーバーが他のフォーマットを要求するか、メディアそのものをレンダリングします。

まれに、進行状況インディケーターがWindows Media Playerで正常に動作しているにもかかわらず、適正なプラグインがないという事実が検出されずにファイルが正常に再生されないことがあります。

以降のセッションで、このエラーダイアログや再生の失敗を避けるには：

1. たとえば、構成オプション"SpeedScreenMMAVerbose=On"を\$Home/.ICAClient/wfclient.iniの[WFClient]セクションに一時的に追加します。
2. ターミナルから開始されたセルフサービスのwficaを再開します。
3. このエラーを生成するビデオを再生します。
4. 見つからないプラグイントレースに関連付けられたMIMEの種類、またはサポート対象であるが再生されないMIMEの種類 ("video/x-h264.."など) を (トレースアウトプットなどに) メモします。
5. メモしたMIMEの種類がある行で、SICAROOT/config/MediaStreamingConfig.tblを編集し、'!'とそのMIMEの種類の間 に '?' を挿入します。これによりフォーマットが無効となります。
6. このエラー状態の原因となるそのほかのメディアフォーマットに対して、(上記の) 手順2~5を繰り返します。
7. GStreamerプラグインのほかのセットがあるそのほかのマシンに、この変更したMediaStreamingConfig.tblを配信します。

注：または、MIMEの種類を識別した後、それをデコードするためにGStreamerプラグインをインストールできます。

シリアルポート設定を構成する

単一のシリアルポートを構成するには、SICAROOT/config/module.ini構成ファイルに次のエントリを追加します。

LastComPortNum=1

ComPort1=<デバイス>

複数のシリアルポートを構成するには、SICAROOT/config/module.ini構成ファイルに次のエントリを追加します。

LastComPortNum=2

ComPort1=<デバイス1>

ComPort2=<デバイス2>

接続構成エラー

このエラーは、コネクションエントリが適切に構成されていない場合に発生します。

E_MISSING_INI_SECTION - 構成ファイルを検証してください："..." 構成ファイルでセクション"..."が見つかりません。

構成ファイルが直接編集されたか、壊れています。

E_MISSING_INI_ENTRY - 構成ファイルを検証してください："..." セクション"..."にはエントリ"..."が含まれている必要があります。

構成ファイルが直接編集されたか、壊れています。

E_INI_VENDOR_RANGE - 構成ファイルを検証してください："..." 構成ファイルのXサーバーベンダーの範囲"..."が無効です。

構成ファイル内のXサーバーのベンダー情報が壊れています。Citrixに連絡してください。

wfclient.ini構成エラー

これらのエラーは、wfclient.iniの構成が正しくない場合に発生します。

E_CANNOT_WRITE_FILE - ファイルを書き込めません："..."

接続データベースに保存する時に、空きディスク容量が不足するなどのエラーが発生しました。

E_CANNOT_CREATE_FILE - ファイルを作成できません："..."

新しい接続データベースの作成時にエラーが発生しました。

E_PNAGENT_FILE_UNREADABLE - Citrix XenAppファイル"..."を読み取れません：そのようなファイルまたはディレクトリはありません。

— または —

Citrix XenAppファイル"..."を読み取れません：アクセスは拒否されました。

デスクトップアイテムまたはメニューからリソースにアクセスしようとしていますが、そのリソースのXenAppファイルを使用できません。[ビュー]メニューの[アプリケーションの更新]を選択して公開リソースの一覧を更新し、もう一度リソースにアクセスしてみてください。問題が解決されない場合は、デスクトップアイコンまたはメニューのプロパティ、およびアイコンまたはメニューが参照しているXenAppファイルのプロパティを確認します。

PACファイルエラー

プロキシ自動検出スクリプトファイル (PACファイル) を使用してプロキシ構成を指定する場合、以下のエラーが発生することがあります。

プロキシ検出に失敗しました。不適切な自動構成URLです。

ブラウザーで指定したアドレスのURLのタイプが無効です。有効なタイプは「http://」および「https://」で、ほかのタイプはサポートされていません。アドレスを有効なURLタイプに変更してもう一度試してください。

プロキシを検出できません。PACスクリプトHTTPダウンロードに失敗しました。接続できません。

入力した名前またはアドレスが間違っていないかチェックします。間違いがある場合は、それを修正してもう一度入力します。間違いがない場合は、サーバーがダウンしています。しばらくしてから、もう一度試してください。

プロキシ検出に失敗しました。PACスクリプトのHTTPダウンロードができません。パスが見つかりません。

必要なPACファイルがサーバーにありません。サーバー上でこれを変更するか、ブラウザーを再構成してください。

プロキシ検出に失敗しました。PACスクリプトをHTTPでダウンロードできません。

PACファイルのダウンロード中に接続が切断しました。再接続してもう一度実行します。

プロキシ検出に失敗しました。自動構成スクリプトが空です。

PACファイルが空です。サーバー上でこれを変更するか、ブラウザを再構成してください。

プロキシ検出に失敗しました。JavaScriptがサポートされていません。

PAC実行ファイルまたはpac.jsテキストファイルがありません。Receiverを再起動します。

プロキシ検出に失敗しました。JavaScriptエラーです。

PACファイルに含まれているJavaScriptが無効です。サーバーでPACファイルを修正してください。 [接続の問題](#) も参照してください。

プロキシ検出に失敗しました。プロキシ自動構成スクリプトから不適切な結果が戻されました。

サーバーから不正な形式の応答を受信しました。サーバー上でこれを修正するか、ブラウザを再構成してください。

その他のエラー

ここでは、Receiverの使用中に発生する可能性がある一般的なエラーを示します。

エラーが発生しました。エラーコードは11 (E_MISSING_INI_SECTION) です。ドキュメントを参照してください。終了しています。

Receiverをコマンドラインから実行する時にこのメッセージが表示される場合は、通常コマンドラインに指定した名前が appsrv.iniにないことを意味します。

E_BAD_OPTION - オプション"..."は無効です。

オプション"..."の引数が指定されていません。

E_BAD_ARG - オプション"..."に無効な引数があります："..."

オプション"..."に無効な引数が指定されています。

E_INI_KEY_SYNTAX - 構成ファイル"..."のキー"..."が無効です。

構成ファイル内のXサーバーのベンダー情報が壊れています。新しい構成ファイルを作成してください。

E_INI_VALUE_SYNTAX - 構成ファイル"..."の値"..."が無効です。

構成ファイル内のXサーバーのベンダー情報が壊れています。新しい構成ファイルを作成してください。

E_SERVER_NAMELOOKUP_FAILURE - サーバー"..."に接続できません。

サーバー名を解決できません。

1つまたは複数のファイルに書き込めません："..."。ディスクの空き容量の問題または権限の問題を解決して、もう一度実行してください。

ディスクの空き容量または権限をチェックします。問題が見つかった場合は、これを修正し、エラーのあった操作をもう一度試してください。

サーバー接続がなくなりました。再接続してもう一度実行します。これらのファイルにはデータがない可能性があります : "..."

再接続し、エラーのあった操作をもう一度試してください。

Citrixテクニカルサポートへの診断情報の送付

Receiverの実行時に問題が発生した場合、Citrixテクニカルサポートに診断情報の提出を求められる場合があります。この情報は、Citrixテクニカルサポートで問題を調査して修正する目的で使用されます。

Receiverに関する診断情報を取得するには

1. インストール先のディレクトリで、util/lurdumpを実行します。セッションが開かれていて、可能なら問題が発生している間にこれを事項することをお勧めします。
Receiverのバージョン、構成ファイルの内容、およびさまざまなシステム変数値などの詳細な診断情報を含むファイルが作成されます。
2. テクニカルサポートにこのファイルを送信する前に、ファイルに機密情報が含まれていないことを確認してください。

SDKおよびAPI

Mar 23, 2018

Citrix仮想チャネルSDK

Citrix仮想チャネルソフトウェア開発キット (SDK) は、ICAプロトコルを使用する追加の仮想チャネルのための、サーバー側アプリケーションやクライアント側ドライバーの作成をサポートします。サーバー側仮想チャネルアプリケーションは、XenAppまたはXenDesktopサーバー上にあります。このバージョンのSDKは、Receiver for Linux用の新しい仮想チャネルの作成をサポートします。他のクライアントプラットフォーム用の仮想ドライバーの作成については、Citrixにお問い合わせください。

仮想チャネルSDKには、以下のものが用意されています。

- Citrix Server API SDK (WFAPI SDK) の仮想チャネル機能とともに使用して新しい仮想チャネルを作成する、Citrix Virtual Driver Application Programming Interface (VDAPI)。VDAPIによって提供される仮想チャネルサポートは、独自の仮想チャネルを容易に作成できるように設計されています。
- プログラミングテクニックの実例となるいくつかの仮想チャネルサンプルプログラムの、実際に機能するソースコード。
- 仮想チャネルSDKでは、WFAPI SDKで仮想チャネルのサーバー側を作成する必要があります。

SDKについては、[Citrix Virtual Channel SDK for Citrix Receiver for Linux](#)を参照してください。

コマンドラインのリファレンスとパラメーター

コマンドラインのリファレンスとパラメーターについて詳しくは、[Citrix Receiver for Linux Command Reference](#)」を参照してください。

プラットフォーム最適化SDK

Citrix Receiver for LinuxのHDX SoC計画の一環として「プラットフォーム最適化SDK」を提供し、低コスト、省電力、高パフォーマンスのデバイスに画期的なフォームファクタを組み合わせたエコシステムを実現しました。

プラットフォーム最適化SDKは、Linuxベースのデバイスのパフォーマンスを改善する方法を探している開発者が、Citrix Receiver for LinuxのICAエンジンコンポーネント (wfica) の拡張プラグインを作成するために使用できます。プラグインは、wficaが動的に読み込む共有可能なライブラリとして構築されます。プラグインによって、Linuxデバイスのパフォーマンスを最適化して、以下の機能を実現できます。

- セッション画面の描画に使用されるJPEGおよびH.264データのデコーディングをアクセラレート
- セッション画面の描画に使用されるメモリの割り当てを制御
- セッション画面の低レベル描画を制御してパフォーマンスを向上
- X11をサポートしないOS環境で、画像の出力およびユーザーの入力サービスを提供

詳しくは、[Citrix Receiver for Linux - Platform Optimization SDK](#)を参照してください。